

新・刀使ノ乱舞

エクスカリバー！！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

古き時代より、人々に災いを齎す存在『荒魂』

それらを打つ為に御刀を振るう巫女達『刀使』

それが世間一般の常識だった

だが、もし――

彼女達以外に荒魂を打つ事が出来、そして歴史を守る者達がいるとしたら？

以前投稿してたのに、とある理由で消した小説を設定から書き直した物です

目次

胎動編

プロローグ (刀使 side)	1
プロローグ (??? side)	14
運命の御前試合	33
運命の御前試合 (別 side)	68
逃亡と追っ手	103
逃避行と調査任務	135
隠れ家	166
剣士の誓い	198
調査隊、始動	232
無想の剣 VS 刀鍛冶	263

村正 VS 村正	299
天狗と日輪刀	342
伊豆での交錯	374

①

胎動編

プロローグ (刀使 side)

『……ああ、そうか……こんなにも簡単なことだった……』

それは今でも分からない不思議な体験だった。

『ありがとう。君のおかげで私は、僕が為すべきことを漸ようやく分かった』

幼い頃に出会った、不思議なひと。

師匠お母さんが亡くなってすぐの頃に、近所の公園で出会ったお兄さん。

『全ては今日……この未来の為にある。君の母上が、君という明日を遺せたように』

お兄さんの言っている事は、未だに理解出来ない。

分かるとしたら、彼は何か答えを得たという事だ。

『僕は世界を守り、そして……君を守るよ、可奈美』

そう言い残し、光となって消えた不思議なお兄さん。

もう、顔はほとんど覚えていないけど、また……会えるかな？



ドンドン……！

「可奈美ちゃん！起きてるー？」

「う……う……う……」

ここは刀使の育成機関である『美濃関学院』。そして刀使とは世の平和を守る為に剣を振るう巫女達である。

その美濃関学院の寮内の1つの部屋

そこで鳴り響くノック音、そして少女の声。

その2つにより、この部屋の主で美濃関学院中等部2年『衛藤 可奈美』は眠い目を擦りながら、ベッドから起き上がり、ドアを開ける。

「ふあゝいゝゝ (m、D、) m」

「ふあゝい、じゃないよ、可奈美ちゃん」

そう言うのは、可奈美と同学年で親友の『柳瀬 舞衣』である。

よく見ると、彼女の腕には大きな旅行鞆があった。そして、何か急いでいるようにも見える。

「おはよう、舞衣ちゃん。どうしたの？」

「もう……可奈美ちゃん……今日は何の日か覚えてるかな？」

ニッコリと笑う彼女。だが心のそこから笑ってる訳ではない。

「えつと確か……今日は鎌倉の御前試合の会場に行く日……だよね？」

この2人は、鎌倉で行われる御前試合の代表選手に選ばれた2人だ。

「うん。そして、今の時間は分かる？」

「えつと……」

チラッと、部屋にある時計を見ると――

「7時………30分過ぎ………」

そういえば、新幹線の時間は――

「8時14分だよ」

「(;。ロ。)」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

美濃関学院 学長室

カキカキ……と書類にサインや内容に目を通す女性。そして、窓の外を見ながら「そろそろ、衛藤さん達は駅に向かったかしら……」

「寝坊したー!!」

「まだみたいだったみたいね……」

ハア……とため息をつくのは、美濃関学院の学長『羽島 江麻』。

「本当に、貴女によく似たわね……美奈都」

そう言って、机の上に飾ってる写真を懐かしそうに見つめた。



岐阜羽島駅

「いやー、危なかった危なかった……」

「ホントにそうだよー!」

「舞衣が起こして、私たちが手伝ってなかったら、どうなっていたやら……」

「ホントにすいませんでしたー!」

もう土下座する勢いで同級生達に頭を下げる可奈美。

あの後、大急ぎで着替えて、昨夜に準備した荷物を同級生達に頼んで、羽島学長が用意した車まで運んで貰い、駅に到着。何とか新幹線の時間には間に合ったのだ。

「可奈美、降りる駅間違わないですよ?」

「もう!そんな子供みたいなこと——」

「可奈美ならあり得るかも」

「美炎ちゃん?!」

「あく、確かに……」

「この間の親善試合も、遅刻したあげく、試合会場間違えてたっけ？」
「うぐっ!?!その事を言われると……言い返せない……」

トホホ……と項垂れる可奈美。しかし、すぐ頭を上げて

「で、でも舞衣ちゃんがいるから間違えないよ!絶対っ!!」

「結局、舞衣頼みかいっ!?!」

「夫婦か!」

「だとしたら可奈美が奥さん?」

「いやいや美炎、可奈美がダメ旦那、舞衣がちよー出来る奥さんだよ」

「なるほどっ!」

「なるほどっ!、じゃないよっ!?!なんで私がダメ旦那なの!?!」

「剣術以外は見どころがない!!」

「Σ(???)!」

アハハ……!と皆で笑いあってる内に、新幹線の時間が迫ってきた。そして、皆で改札へと向かう。

そこで、仲間の1人である『安桜 美炎』が前に出て来る。そして2人は黙って拳を合わせる。

慢が出来ないようだ。

「はい、可奈美ちゃん」

そこに、舞衣から小さな箱を手渡された。

蓋を開けると、サンドイッチが入っていた。

「うわー、サンドイッチー！ありがとう、舞衣ちゃんっ！」

「お礼なら、学園長に言つて。『衛藤さんは絶対朝ごはん食べ忘れるから』つて」

「なんだろう……嬉しいけど何故か、悲しい……」

そう言いながらサンドイッチを一つかじる。

野菜はシャキシャキしており、ハムが少しジューシーさを感じさせ、ピリツと感じる

マスタードの辛みで目が覚めるようだ。

「それと、これはデザートだよ」

そして今度に出したのは、可愛らしい柄の小さな袋。

その中身はと言うと

「うわー！舞衣ちゃんのクッキーー！」

趣味がお菓子作りの舞衣お手製のクッキーが詰まっていた。

そして、羽島学長のサンドイッチを食べながら、お茶を飲む可奈美。そこに舞衣が

「そう言えば、今日も見たの？可奈美ちゃんがたまに見るつて言う不思議な夢。この間

の御前試合の日も見たんでしょ?」

不思議な夢。あの青年と出会ったあの夢。あれを見ると、大抵可奈美は寝坊するのだ。

「確か、小さい頃……お母さんが亡くなった頃に会ったって言ってたっけ?」

「うん。顔はよく覚えてないけど、不思議な人だったのは覚えている。なんか『ありがとう』とか、『未来のために』とか……なんか『守る』って言ってた気がする……?」

「不審者とかじゃないよね?」

「分かんない。いつの間にかそのお兄さんが居なくなってたし……」

そして、可奈美は舞衣のクツキー一つを口に放り込む。

「モグモグ……うくん! やっぱり舞衣ちゃんのクツキーは最高っ! 私、舞衣ちゃんのクツキー大好きだよ!」

「私は、そう言つて美味しそうに食べてくれる可奈美ちゃんの顔が好きだよ」

そうして2時間、新横浜までクツキーを味わい、舞衣と会話をしながら可奈美は明日と御前試合へのワクワクを高めていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

可奈美達が新幹線に乗り込んだ頃

岐阜羽島駅前

可奈美達を見送った後、美炎はある女生徒と話していた。

「行っちゃったね。あの子たちが、美濃関の代表?」

オレンジ色の制服で、美炎よりも年上の女生徒。長船女学院の『瀬戸内^{せとうち} 智恵^{ちえ}』である。

「そうだよ、『衛藤可奈美』ちゃんと『柳瀬舞衣』ちゃん。2人とも私なんかよりずっと強いんだよ! 私ももつともつと頑張つて、強くなるなくちや!」

そうまるで嬉しそうに、話す美炎を見て、変わらないなと思う智恵。

この2人は学院は違うが、幼なじみである。幼い頃、智恵の方は親の都合で岡山へ引越して行つたが、2人の交流は続いていた。

そして、今回の御前試合前に、智恵が久々に美濃関に遊びに来たのだ。

「頑張つてね。それじゃ、私はそろそろ帰るとするわ。ちようど良いから西行きの新幹線でね」

「えっ!? ちい姉もう帰っちゃうの?」

「美炎ちゃんも鎌倉行きの準備があるんでしょ? 大丈夫、直ぐまた会えるわ」

そして、智恵は駅の方へと向かって行こうとしたが、美炎の方へと振り返り

「美炎ちゃんもやっぱり彼の事は……」

「うん……ごめん、分からない。家の人もいつの間にか居なくなってたって言ってたし

……捜索願いも出して……」

「そっか……大丈夫だよ美炎ちゃん。義勇くんは必ずどこかで元気にしてるわよ」

「……うん！」

そして、智恵は駅内へと歩いて行つた。

3人を見送つた美炎は、晴れた青い空を見上げながら

「そうだね、大丈夫だよ……必ず生きてる……そうだよね……義勇くん？」

そう願ひ、自分に言い聞かせながら、いつも持ち歩いてるアレに握り締める



鎌倉駅

昼過ぎ、可奈美たち一行は鎌倉へと着いた。

駅周辺では、美濃関以外に『鎌府女学院』、『綾小路武芸学舎』、『長船女学院』の生徒がチラホラ見えた。

この中に明日の御前試合の相手が居る。そう思うと、可奈美の心はワクワクが溢れ出そうだった。

そして2人は明日の御前試合の会場であり、刀使達をまとめ上げる『折神家』へと向かった。

そこはまるでお城のような門と、山1つ丸々を拠点としたお家が建っていた。

「うわ〜！凄いい、凄いい舞衣ちゃんっ!!」

「これが折神家……」

可奈美はキヤーキヤーと、騒いでいるうちに舞衣は壮大の日本風の正門で言葉を失いかけていた。例え自家の柳瀬グループでもそこまで大きな建築がなかったはず。

「ねえねえ、ちよつと記念写真撮ろ——」

スマホのカメラを出した瞬間、可奈美の目に1人の刀使の姿が入る。

距離がちよつと遠いけど、肉眼が捉える視界に自分と同じくらい年頃の刀使がいた。制服の色から、『平城学館』の者ということが分かる。

すると、向こうもこちらに気付いたのか、こちらに向かって来る。

「……こんにちは！貴女も明日の試合に出るの？」

「……………」

長い髪の刀使は何も答えず、その場を後にしようとした。その瞬間――

ポオoooooooooooo……

「っっ!？」

突如、2人の持っていた御刀から不思議な音と、感覚を感じる。

二人は同時に抜刀の構えをするが……その音が直ぐに収まった。長い髪の刀使もその不思議な音の後、何事も無かったかのようにその場を後にした。

「えっと……大丈夫、可奈美ちゃん？」

「う、うん……けど、今の……」

一体何があったのか、と自分の御刀『千鳥』を見つめた。

プロローグ (???) side)

日本のとある屋敷。

まるでそこだけ時間の流れが江戸時代から止まったような広々とした屋敷。

だが、日本にいる人々……いや、この世界でこの屋敷の存在を知る者は片手で握れるほどの数しかない。

そんな屋敷に朝が来た。

「ふあゝ……眠い……」

「兼さん、またセイバーさんと夜中まで鍛錬してたの？」

一つの襖がガラッと開かれ、その部屋から長い黒髪を掻きながら、胸元を大きく開けた青年と、中学生のような体格をした、真面目ほりかわくにびろそうな少年が出て来た。

青年の名は『和泉守兼定』、少年は『堀川国広』である。

「だってよく、セイバーの奴が中々辞めようとしなくてさゝ」

部屋を出て、食堂へと向かう2人

「前もそう言ってたけど、実際は兼さんだって辞める気無かったでしょう？セイバーさ

んにも聞いてたけど、どうせ『俺が一本取るまでやるぞ!』って、また言ったんでしょ?」

「ギクツ……だって、もう少しで、アイツに勝てそうだったんだよ! それなのにセイバーのヤツ、『明日、任務もあることだし、そろそろお開きにしない?』だと……ふざけんな! 勝ち逃げはさせねえよ!」

そう意気込む和泉守。そんな彼に文句も言わず付き合ってくれるセイバー。

「ハア……ホントに仲良いよな……」

「和泉守の相棒は大変だね?」

曲がり角の所にさしかかった瞬間、別方向から声がする。そこには、日本人のような顔つきなのに、どこか西洋風な雰囲気と漂わせる黒髪で、瞳が蒼い青年。

彼が2人の会話に出て来た人物『セイバー』である。

「おはようございます、セイバーさん」

「おはよう、堀川くん。和泉守も」

「おう! 今日少し遅めの起床だな?」

「確かに……セイバーさんいつも、もう少し早く起きていませんか? たまにありませんよ?」

「うん、今日はちよつと夢見が……ね」

言葉を濁すセイバー。そこでハッと和泉守だけは気付いた。セイバーが遅めに起きてくるときは、あの夢を見た時だけだ。

「すまん、セイバー……」

「気にしないでくれ。もう慣れた」

そんなことより行こう、とセイバーに言われ、彼らは食堂へと着いた。

食堂に着くと、長い机があり、すでにその上には食器が並べられていた。

奥の部屋から、良い匂いが香ってくる。その部屋にのぞき込むと、割烹着を着た青年が包丁で野菜を切っていた。

「おはよう、菊一文字。いつもみんなの食事の準備、ありがとう」

「おはようございます、セイバーさん。僕が好きでしてる事です。それに村正さんと交代でしてますからね」

料理をしている手を一時的に止めて、顔だけ振り向くの青年『菊一文字則宗』。

「おはよう、菊一文字」

「おはようございます、和泉守さん。堀川くんも、おはよう」

「おはようございます、菊一文字さん。何か手伝いましょうか？」

堀川が手伝いを名乗り上げると、セイバーと和泉守も自分たちも言ってくれた。

「ありがとうございます。お味噌汁はもう出来るから、セイバーさんは全員分を入れて

下さい。和泉守さんはそろそろ焼き魚が焼けると思うので、その準備を。堀川くんは様子を起こしてきて下さい」

「了解」

そして手分けして、セイバーは味噌汁とついでに、ご飯をお椀によそう。

和泉守は、いい焼き目の付いた焼き魚を皿に盛り付け、ご飯や味噌汁と共に、机に並べた。

堀川はこの屋敷の主であり、彼らの主を起こしに行つた。

そこに、次々とセイバーたち以外の他の住人たちが食堂に揃う。

「ふあ……悪いな一文字、今日は任せっきりにして」

よつこらしよと、自分の場所に座るのは、赤みかかった髪で、見た目に反して年寄りの雰囲気を感じさせる青年『千子村正』

「いえいえ、昨晩は僕の刀を打ち直してくれていたので、コレくらいは」

「まあ、それが刀鍛冶の儂オシの仕事だからな」

「いやいや、村正。お前も俺たちと同じ刀剣男子だろうが」

そう言つて、彼の前に朝ごはんを並べる和泉守。

「は！何が刀剣男子だ。和泉守、何度も言うが、儂はお前たちの知る村正じゃねえよ。縁を切り、定めを切り、業を切る。怨恨を清算する究極の一刀。それを目指して

出来たのが儂だっただけだ」

もちろん、彼自身もまだ完璧とは思っていない。

「それでも君は村正だ。僕らの仲間の村正。それは事実だろう？」

そうニコリと笑いかけるセイバー。すると、村正もヤレヤレと言いながら、それ以上は何も言わなかった。

そこに、新たに2人が入って来た。

「よう、みんな！おはようさん！」

「おお、中々良い香りがするな。今日は一文字か？」

白髪でにこやかに入って来た青年は、『鶴丸国永』つるまるくになが。

背が高く体格が良い青年は『蜻蛉切』とんぼぎりである。

「よお、鶴丸に蜻蛉切、おはよう」

「おはよう。和泉守殿、拙者も手伝おうか？」

「もうちよつとだから、座っててくれ」

「そうか……なら、お言葉に甘えさせて貰おう」

「相変わらず驚くほどに真面目だねえ、蜻蛉切は……」

「てめえは普段から、もう少し手伝いやがれ」

和泉守に叱られ、てへぺロとしながら自身の場所に座る。

蜻蛉切も村正の隣に座り

「おはようございませす、兄上。」

「おう蜻蛉切、おはよう。それと『兄上』は止めろと言ってるだろうが……儂は——」

「いえいえ！貴方はあの『千子村正』と違つても、我が兄上であることは変わりません」
「つたく……分かつた、好きに呼べ……」

村正が根負けしたその頃、次に食堂入つて来たのは

「おお……今日の朝餉も良い匂いだな。そうは思わぬか炎定よ？」

「うむ、一文字くん！また料理の腕を上げたようだな！流石だ！」

「おはよう、三日月。それとまだ朝早いから声のポリウムを下げてくれないか炎定？」

「おお！それはすまないな！セイバー殿！」

「だから、声がデケえつて……」

「驚く程に目が覚めるな……アイツの声は……」

この中で一番背が高く、村正のような年上の雰囲気を感じながらも、どこか浮世絵離れをした青年『三日月宗近』

そして、炎のような赤髪と紅い瞳をし、和泉守と鶴丸の耳を苦しめる程の、人一倍声
が大きい青年『炎定』
杏寿郎。

「なんだ、俺たちが最後か？」

「……………」

次に入つて来たのは、堀川と同じ位の年頃だが、キリツとした目をした少年と、背中まで無造作に伸ばした髪を首のあたりで一つに結ぶ高校生位の無口の少年。

『薬研藤四郎』と『富田やげんとらう 義勇とみた』である。

「おはよう、薬研。富田もおはよう」

「よう、セイバー」

「ああ……………」

「ああー、富田、お前。相変わらずちゃんと挨拶出来ねえんだ？」

「……………なぜだ？」

「いや、なぜって……………」

「まあまあ、村正。富田はいつもの事だよ。それと、彼はちゃんと挨拶したみたいだよ

？」

「はあつ、本当かあ？」

「そう、富田はちゃんと挨拶はしたのだ。自分自身では

「ああ【おはよう】」

「ちやんと、挨拶はしたのに」なぜだ？」

この通り。富田は無口と言うか、言葉足らずの名人なのだ。彼の言葉を翻訳出来るのは、セイバー、三日月、そしてあと一人、彼らの主。

富田が自分の場所に座ると、隣の三日月が尋ねた。

「ところで富田、黄瀬はどうした？」

「一応、部屋の外から声をかけたから、返事があつたから」起こした」

「うん……恐らくそれだと——」

ドタドタ……！ガラツ！！

「あつぶな——！！俺、大丈夫だよな？まだ審神者様来てないよね!？」

寝癖を直さず慌てた様子で、食堂に駆け込んで来たのは、金髪で、富田と同じ年位の

少年『黄瀬 善逸』

「うむ！安心しろ、ギリギリ間に合ったぞ！」

「だから炎定、声デケえ」

それを聞いて、良かった良かったと黄瀬は自分の場所に座る。そして、真正面に座る

富田の方を向き

「おい富田っ！部屋隣なんだから、起こしてくれよ！」

「いや、部屋の外からだが、声はかけた。それでちゃんと起きなかった」お前が悪い
「んだとっ！（怒）」

「はいはい、そこまでですよお二人さん」

会話を断ち切るように、菊一文字が黄瀬の前に朝ごはんを並べる。

そして、菊一文字も自身の場所に座る。

そこに、堀川が食堂に戻って来て、彼の後に男性が入って来た。それと同時に

ザツ——

セイバーや食堂にいた面々は男性に対して頭を下げる。

「おはようございます、審神者様」

「ああ、おはよう。今日も皆元気そうで何よりだよ」

そうニコリと笑いかけるのは30後半程の歳で、前髪の半分が左目を隠すようになって
いる男性が、この屋敷の主にして、セイバーたちの主である『審神者』である。

「いえ、審神者様も変わらずのご様子で何よりでございます」

セイバーが代表として返答する。そんなセイバーや皆の態度にヤレヤレとまで肩を
おろす審神者。

「前々から言っているだろ、任務外では、家族のように接してくれって。四六時中そんな
態度を取られると正直私が困ってしまう」

「はっ……」

セイバーたちはそう言われ、頭を上げた。それを見て、審神者も机の一番奥の方へと座る。

審神者から見て、前左右には和泉守とセイバーが座っている。

そのセイバーの隣から、村正、蜻蛉切、三日月、富田、薬研。

和泉守の隣から、堀川、菊一文字、鶴丸、黄瀬、炎定と並んで座っている。

【図解】

審神者

セ	村	蜻	三	富	薬
和	堀	菊	鶴	黄	炎

「それより遅くなつてすまない。それでは、朝食を頂こう」

審神者が言うのと、皆一齐に手を合わせ、いただきます、と合掌し食事を始めた。

「ん……おい、一文字。味噌汁の味、変えたか？」

「確かに……いつもより味に深みを感じるような……」

流星は村正とセイバーだな……と菊一文字は思い、いつもと違う味噌を使ったと話した。

「もしかして、お口に合いませんでしたか？」

「いや、これはこれで、中々良いじゃねえか……」

「うん。具の味もより一層引き立ってる感じがするよ」

「ありがとうございます」

「うまい！うまい！うまい！」

別では、バクバクツ！と、ご飯や味噌汁、おかずを頬張る炎定。

「炎定、うるせえ！」

「仕方ないよ兼さん。一文字さんの料理は本当に美味しいから」

「ありがとう、堀川くん。おかわりはまだあるからね」

「では、一文字殿！おかわりっ!!」

「早っ!?!」

ハハハッ……と賑やかな食事の時間が過ぎていった。

皆それぞれの腹が満腹になったところで、皆で手分けして食器の片付けと洗い物をし、再び机に集まる。

「では、朝会の方はゼロ時キュウイチ分ゼロとする。場所はいつもの第1会議室で行う。皆、遅れないように」

「はっ！」

そして、それぞれの部屋へと戻り、支度をする。

セイバーも自身に用意された部屋へと戻った。

部屋に戻ってから、寝間着からいつもの黒スーツに着替えたあと、自身に靈力を集中させると、彼の体に風が纏い、スーツ姿から、蒼銀の騎士甲冑へと変わった。

そして、部屋の奥にある棚に置いてある、自分の半身である聖剣を持つ。すると、剣にも風が纏い、その姿が見えなくなった。

「……………行こう、世界を救いに」

それが、僕の宿命だから——



富田用自室

「……………」

自室に戻った富田も、支度を整えていた。

旧日本軍の軍服を思わせる服の上に、右半分が赤の無地、左半分は亀甲柄の羽織に袖を通し、壁に立てかけてある愛刀を腰に差す。

最後に、机の上にあるペンダントを手取る。そして、カチャツと蓋を開けるとそこには1枚の写真が。

幼い頃に、幼なじみ2人と撮った彼女たちとの最後の思い出。

「……………」

しばしその写真を見つめたあと、ペンダントの蓋を閉め、ポケットに突っ込む。そして会議室へと向かった。



第1会議室

仕事用のスーツへと着替えた審神者は会議室の前まで着いた。

屋敷は和風だが、会議室内は近代にしているので、入り口も襖ではなくドアになっている。

そして審神者が会議室に入ると、既に揃い、机に座っていたセイバーたちが立ち上がる。

審神者はぐると皆を見渡す。

セイバーは蒼銀の騎士甲冑を纏い、和泉守は赤い袴の上に浅葱色のダンダラ模様の羽織を着ている。

菊一文字も和泉守と同じ羽織を羽織っているが、羽織は雪のような白色を着ている。

堀川と薬研は学生服と軍服をミックスしたような服を着、村正は黒いライトアーマーの上に白色の羽織をマントのように肩にかけている。

蜻蛉切は紫と白よ袖無し着物を身につけ、両腕には籠手が付けられている。

三日月は蒼い着物を、鶴丸は真っ白なフード付の着物を身に付けている。

富田は柄が左右違う羽織を着、炎定と黄瀬は富田と同じ軍服を着ているが、炎定はその上に炎の模様の羽織を、黄瀬は雷模様の羽織を纏っている。

そして何より、先ほどの食事とは違い、皆の顔から、ビシビシと闘気を感じさせる。

「座つてくれ……………さて、いよいよ明日、鎌倉にて折神家主催の御前試合が行われる。我々は政府からの要請により、警備任務を命じられた」

「やれやれ……………なんで俺たち零課が警備任務なんて任務やらせんだよ……………」

「ちよつと兼さん……………」

和泉守が嫌そうに毒づくど堀川はアワアワ…と慌てるが、審神者の方は気にしていなかった。

「確か『吉野長官』からの命令……………でしたっけ……………?」

「またあのオツサンかよっ!?オレたちを便利屋か何かと間違えてないっ!」

菊一文字からの情報で、黄瀬も嫌そうに愚痴る。

「ハハハ……………確かに我々零課の任務は、世界を守る事。ならば警備任務だって、大きく見れば、世界を守る事にも繋がっている」

「守るのは折神家じゃねえのに?」

和泉守と黄瀬に続いて、村正も口を開く。

「……………最近、迦行軍がなりを潜めてる。農^オたちの荒魂討伐の任務が多くなつたのはそれが原因だろう。そして、ヤツらは遂にこの時代に侵攻しようとしている。そして、目を付けられたのは……………」

「舞草からの情報によると、『折神 紫』が……………最近に密かに誰かと密会しているらし

い。しかも当人はそれを味方の折神紫派の誰にも秘密にして」

「……………」

「その密会が行われたとされる日には必ず、時間間の歪みが観測された。そしてその日に折神紫の姿は誰も見ていないらしい」

「審神者様、となるとやはり……」

「そうだ、セイバー。密会の相手は『時間遡行軍』で間違いない。そしてヤツらと交渉していたのは折神紫じゃない」

その事を聞き、皆に緊張が走る。

「ならば、我々零課の出番だろうか？」

彼等の所属する組織『警視庁公安部公安零課』。

その任務は2つ。1つは刀使たちのように荒魂討伐であるが、あくまでそれはついで任務のようなものだ。

本当の任務は、時間を遡り、歴史改ざんを目的とした謎の集団『時間遡行軍』の討伐である。

時間遡行軍は隠世よりもその先にある異世界からの侵入者たち……と言う事しか零課を発足させた初代零課責任者にも分からなかった。だが、それでもこの世を乱す存在

であることには変わらない。

その為に組織されたのが『公安零課』である。

ここに所属する者はただの人では無い。そのほとんどは――

「折神紫とどんな計画を立てているか未だに分かっていない中での御前試合。何か起きる可能性は非常に高い。いや、断言しよう……絶対起きる」

「何か、あつたのですね……？」

あの審神者がここまではつきり断言するなんて滅多に無い。不思議に思った面々を代表としてセイバーが問うた。

すると、審神者が頭を机の上に落とす。

「何のつもりか知らないけど……舞草が『十条 姫和』にあの事を教えたみたいだ……」

すると、皆がああ……と納得した。

「それは確かに……」

「確実にな……」

「驚きもしないな」

「若いとは良いなあ……」

「やりかねませんな」

「うむ！ 確実に何かしらの行動は起こすな！」

堀川を始めとし、薬研、鶴丸、三日月、蜻蛉切、炎定が口々に言う。

審神者も頭を押さえ、何も言い返せなくいた。心当たりがたくさんあるからだ。

「ハア〜……それを踏まえての、班分けを発表する……まずは十条姫和が行動を起こした場合にいち早く彼女を保護し、安全が確保出来る場所まで護衛する役目を……セイバーと和泉守にお願いする」

「お任せを」

「しつかり守ってやるぜ、主！」

「頼むよ……次にその2人の支援と刀剣類管理局の監視を……村正と鶴丸、菊一文字に頼む。なお後で3人には管理局のスタッフ用の制服を渡す」

「了解した」

「おう！」

「はっ！」

「次に舞草の動きを監視するのを、薬研と蜻蛉切に。舞草が十条姫和に何かしらの行動を起こそうとするなら、セイバーたちに連絡を」

「了解だ、大将」

「この命に代えましても」

「そこまで気張らなくて良いよ……次に富田と炎定、黄瀬、三日月はしばらくの間は各班のフォロワーを。状況に応じて4人には別の任務を与える」

「はっー!」

「堀川は私のサポートを頼む。今回はあちこち飛び回るかもしれないから」

「分かりました、主様!」

「主の事を頼んだぜ、国広!」

「兼さんも無茶をしないように。セイバーさん、兼さんの事をお願いします。この人、結構無茶するんで」

「いやになるほど知ってるよ」

「フッフ……では、零課諸君……時間遡行軍による現代への侵攻ならびに計画を阻止、世界を守る事を任務とする」

「はっ!!」

「では、各員行動開始、鎌倉へ向かってくれ……皆の健闘を祈る……」

運命の御前試合

大浴場

「ふうく……スツゴい広いお風呂だね！」

「うん、流石は折神家だね……」

可奈美と舞衣は折神家運営の旅館の大浴場で旅の疲れを癒している。

現在この旅館は明日の御前試合出場選手や、その関係者、スタッフ等が利用しているが、2人は少し遅めに来たので、ほぼ貸し切り状態になっている。

「そういえば……昼間に会った人って平城学館の人だね。もしかして、明日の代表の人なのかな……」

不安そうに呟く舞衣。彼女も可奈美同様、美濃関の代表生だが、自分は可奈美のように強くないと思い、明日の試合が不安で仕方がないのだ。

そんな親友の心中を察したのか、それでもないのか、舞衣の背中を流して上げた。

「あ……ありがとう、可奈美ちゃん」

「ううん、それにしても舞衣ってホントに綺麗な体してるよね〜?」

「／／ふえっ!?!いい、いきなりどうしたの!?!」

「いや〜、こうして舞衣の体を見るとね……」

可奈美にジロジロ見られ、恥ずかしくなる舞衣。いくら女子同士でも、自分の身体がそんなに見つめられるのは流石に恥ずかしい。

だが、見た目は確かに可奈美の言う通り。舞衣は中学生とは思えない体つきをしている。特に――

「(う〜ん……やっぱり舞衣大きいなあ……)」

「／／か、可奈美ちゃん? 私の体がどうしたの?」

「何でもないよ!」

大浴場で体を流した後は、部屋で豪華な夕食が2人を待っていた。

見たこと無いお肉や、刺身、鍋料理で2人は旅の疲れを綺麗サツパリ忘れられた。

「あ〜……美味しかった!」

「うん、なんか温泉旅行みたいで楽しいね」

「なに言ってるの! ホントの楽しみは明日の試合だよ!」

「可奈美ちゃん、ホントに剣術が好きなんだね」

「うんっ！剣術も好きだけど、舞衣ちゃんのクッキーも好きだよ」

「うふふっ、ありがとう」

可奈美の屈託のない笑顔、だが、それでも舞衣の心にある不安と緊張が消していなかった。

その原因は、明日御刀での試合だ。しかも学校の代表として出場する身なんだから、緊張するのも不安になるのもおかしいことではなかった。

「よし！なら、今からちよつとだけ練習しようか！」

「練習？」

「うんっ！」

早く、早く！と可奈美に急かされ、御刀を持った2人は庭に出た。

互いの正面に立ち、抜刀する。

「千鳥……」

「孫六兼元……」

一呼吸置き、互いに精神を集中させる。

「双方……写シ！」

『写シ』、刀使が持つ能力の1つ。御刀を媒介として肉体を一時的に霊体へと変質させ、運動機能も向上させる。

これに使うと、痛みと精神疲労を代償に、実体へのダメージを肩代わりできる。それが刀使たちが持つ力だ。だが、それでも無敵ではなかった。

意識を失ったり、一定的なダメージを受けると、写シが解除される。また写シの維持は精神力と関わっているから、写シがダメージ受け続けるとその精神も喰らえる。故に、普通写シが強制解除された場合に一時に使用者が動かなくなる。

「……………」

集中力を高め、御刀とリンクし、自らの体を霊体化させる。

2人とも、無事に写シを貼れることが出来た。

「よし！このまま一本やろっか？」

「今日はいいよ。本番は明日」

「ええ……………」

ちよつと不満そうにした可奈美だが、舞衣に説得され、大人しく布団に入った。

「おやすみ、可奈美ちゃん」

「おやすみ」

正直、もう少しだだをこねるかと思ったが、それからはあつという間にぐっすり眠ってしまった可奈美。

「Z……………Z……………」

「(ホント、可奈美ちゃんはブレないな……)」

そして彼女を起こさないように、舞衣はこっそり部屋を抜け出した。

旅館内 エントランス

部屋を抜け出した舞衣は、他の宿泊客や従業員も居ないエントランスにやって来た。誰も居ないエントランスは静かすぎて少し不気味だが、1人になるには充分だった。

「明日……か……可奈美ちゃん、本気で戦ってくるよね……」

ふとエントランスの端にある大きな時計を見る。

時間はまだ夜中の11時過ぎ。まだ日は跨いでいない。

「……………」

コツ…コツ…と針が動いているが、今の舞衣にとっては、いつも以上に長くも短くも感じてしまう。

「(緊張し過ぎかな……でも、このままじゃ眠れない……)」

飲み物でも飲もうか、そう考えた時——

「飲むか？」

「えっ!？」

1人だけだった筈なのに、いつの間にか目の前に誰かが立っていた。

浴衣を着ているが、自分よりも年上で白髪の青年。

そして手には、2本ジューズ缶があり、1本を舞衣に差し出していた。

「驚いたか（ニコリ）？」

「えつと……ありがとうございます。お金は——」

「いいよ、俺が勝手にお前さんの分を買っただけだ」

そう言つて、白髪の青年は舞衣から少し離れた椅子に座り、ジューズを開ける。

舞衣も渡されたジューズ缶を開け、一口飲む。

冷たいオレンジジューズが舞衣の喉を潤す。

そして、そのジューズを渡した青年をチラリと見る。見た目は高校生……いや、もしかしたら大学生かもしれない。

現在この旅館には明日の出場選手と大会スタッフしか宿泊してないはず。

いや、そう言えば簡単な仕事を行うスタッフをバイト募集をしていたと聞いたことがある。彼もその1人か？

「お前は明日の試合に出るのか？」

「えつ……は、はい。美濃関代表です……」

いきなり声をかけられ少し驚く舞衣。チラチラ見ていたのがバレたのか、少し恥ずか

しい

「そうか……だが、夜更かしなんてして大丈夫なのか？」

「ええ……ちよつと寝付けなくて……あなたは大会スタツフの方ですか？」

「スタツフ……まあ、一応……」

一応、と言う事はやはり正規のスタツフではなく、バイトの方なのだろうか。

「ただ俺は同室のヤツのいびきがうるさすぎて眠れないだけだ……」

今頃グツスリ眠っているだろう同室のヤツに腹村正を立てる青年鶴丸。

「まあ、緊張し過ぎで眠れないお前さんの方が辛いよな？」

「えっ……どうして……」

「驚くこともないだろう、そんな深刻そうな顔をしてたら誰だつて分かるぜ」

そこまで分かりやすい顔をしていたのか？そう思うとまた恥ずかしくなってしまう。

「確かに大きな戦を前に緊張するなつて言う方が無理だよな……だから、お前さんのその気持ちは正しい。だがな、何時までもそんなんだと、対戦相手もそうだが、共に戦つてくれている刀にも失礼だろ？」

何故だろう、初対面の筈なのに、彼の言葉には重みがあると言うか、説得力を感じる。

「本気で試合に出たいなら出れば良い。だがもし、本当に無理なら辞退すればいい。お前さん自身の選択でありお前の人生だ。好きにすれば良い。だが、後悔だけはするな」

「後悔……」

「選択は自由だ、だが後悔だけはするな。その道を選んだのは、間違いなく自分なのだからな」

「……………」

何故だろう。彼の言葉はまるで自分にではなく、別の誰かにも言っているような気がする。

「おっと……見知らぬヤツに言われてもしょうがねえか……」

恥ずかしそうにポリポリと頬をかく青年は空になった缶をゴミ箱に入れると、自分の部屋に戻ろうとした。

「あの……………」

「ん、どうした？」

「ありがとうございます！」

そう言って、舞衣は青年に頭を下げる。青年も頑張れよ、と最後に一言言っ去って行った。



翌朝 折神家本家

「……………」

長い髪をなびかせ、凜々しい顔つきを持ちながら、強者の威厳を感じさせる女性が一人、折神家本家の山奥、洞窟内に造られた社に一人立っていた。

その名は『折神 紫』。既に年齢は30代だと言うのに、現最強の刀使の名を持つ。そして、祭殿に舞を奉納を終えた紫は御刀を2本差し、社を出ようとした。その時「何の用だ……………」

足を止め、出入り前にいる者を睨みつける。

『ナアニ、才主ノ様子ヲ見ニ来タダケダ』

そう言う者は異常としか言えなかつた。

まず全身が黒い瘴気のようなものに包まれ、鎧甲冑を着ているが、人間の2倍近の巨体を持ち、顔は鬼そのものであった。

「くだらん要件なら、斬り捨てるぞ……………」

『マア、ソウ邪険ニスルナ…………我々ハ、目的ハ違エド、今ハ同志デアロウ。ナア折神紫…………イヤ、ソレトモ別ノ呼び方ガ良イノカ?』

「好きにしろ…………それより、お前が言っていた『零課』という組織だが…………未だに掴めな

い。本当に存在するのか……？」

『アア……我々ハソノ零課と敵対シテイル。勿論、才主ノ味方デモ無イ。早く見ツケ出シ、始末シタ方ガ良イ』

「まあいい……引き続き情報を集める。その代わり——」

『アア、何時でも我々ハ力ヲ貸ソウ。全テハ、我々ノ望ム世界ノタメニ……』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

御前試合会場内 受付近く

いよいよ御前試合当日となり、普段はそこまでもなかつたのに、今日は様々な人であらゆる御前試合会場内 受付近く。いっばいになっている。

試合出場の各学院の代表生徒たちとその関係者。

試合に使われる備品を運んだり、出場の受付、他の部署に連絡をまわす会場スタッフたち。

試合審判員や、刀剣類管理局の高官や、警察関係者など様々な人が見える。

それぞれ慌ただしく動いていた、立ち話をしたりしていたが、その中でまるで人形

のように、隅で誰かを待っている者がいた。

周囲は彼女を見てヒソヒソ話している。

それもそのはず、彼女の着ている制服は伍箇伝のどれとも違う。

焦げ茶色に近い制服、それを着るのを許されているのは、彼女を含めてたったの4人だけ。

大会などで優秀な成績を収めた者の中で、特に優秀で折神家への忠誠心のある者達。それが『折神紫親衛隊』であり、彼女がそのうちの1人、『さつき臯月 夜見』である。

感情を読めない無表情の彼女は一体誰を待っていたかというと――

「夜見さん！遅くなってしまってますいません！」

彼女の姿を見つけ駆けよって来たのは、スタツフ用の制服を着た白髪青年。

「いえ、私も今し方来たところなのでお気になさらず」

まるでデート前のカップルのような会話をする2人に、周囲の者達は更に驚く。

「こちらこそ、会場スタツフのバイトを引き受けてくださり、ありがとうございます。菊

「さん」

『菊一』と呼ばれる青年はいえいえ、と答える。そもそも彼も、用事があつたから丁度良かった。

「まあ、親衛隊の皆さんの仕事と比べると大した仕事ではないですが……」

「いえいえ、菊一さんたちスタッフの方々が頑張つて下さるからこそ、私たちも親衛隊の仕事十全に果たせますし、御前試合も無事に行えます」

「そう言つて貰えるとありがたいです。あ、そうだ……」

菊一は持つていたランチボックスを彼女に手渡す。

「これ、ちよつとした差し入れです。休憩している真希さんたちにもこれを渡してくれ」「お忙しいのにありがとうございます、獅童さんたちも喜びます」

そう言いながら受け取るも、その表情に変化が見えない。

相変わらず無表情だなあ……と思いつつも、彼女らしいとも思う菊一。

「では、僕はそろそろ仕事の方に戻ります。真希さんたちによろしくお伝え下さい」「分かりました」

そして、菊一が去つて行くのを見送り、皐月も自分の持ち場に戻りながら、菊一から受け取つたランチボックスを大事に、嬉しそうに胸に抱えた。

ブウーン…ブウーン… ピツ

「はい、もしもし」

『俺だ、和泉守だ。用事は済んだのか?』

「はい。これから持ち場に戻ります」

『ホントに親衛隊のヤツらと仲良くしてんだな……大丈夫なのか。今回の件でお前は――』

「和泉守さん、覚悟なら出来てます。たとえ彼女たちと刃を交える事になっても……たとえ彼女たちとの縁が切れようと……僕は、彼女たちのために、戦います」

そう強く、まるで自分に言い聞かせるように電話相手に宣誓する菊一こと、菊一文字。

『そうか……悪かったな、余計な事言つて……こつちは少し会場内を調べる』

「了解しました。お気を付けて」



御前試合 決勝戦会場

「うわー！凄ーい！広ーい！」

立派な日本庭園のようにも見える会場を見た可奈美は昨日大きな正門を見ると同じ反応をする。

「流石、御前試合の決勝戦会場だけあるね」

「よーし、ここを指して頑張ろうね、舞衣ちゃん！」

「うんっ！」

「そこのお嬢様方」

決勝戦会場を見て、新たに決意する2人に、1人の青年が声をかけた。

「申し訳ないが、お手洗いの場所を教えて貰えないかな？会場が広くて……」

黒スーツの青年が申し訳なさそうに2人に尋ねた。

確かに地図が無いと、この広い会場ではトイレを探すのも一苦労だろう。

「構いませんよ。えっと……お手洗いは武道館に入って右奥の廊下の先にあるのと、2階の廊下にそれぞれありますね」

会場内の構造はあらかじめ覚えていたが、一応会場スタッフから渡されていた地図を見せながら舞衣が青年に丁寧に教えた。

「ふむふむ……なるほど、ありがとう。助かるよ」

「いえ……可奈美ちゃん、どうしたの？」

先ほどから黙っている可奈美。いつもの彼女なら、舞衣と一緒に青年にトイレの場所を探してくれるはずなのに。青年の顔を見て、ずっとぼおーとしていた。

「ん？私の顔に何か付いているのかい？」

「あの……前に私と会ったことありませんか？」

「いや……今日が初対面のはずだけど……？」

「可奈美ちゃん……?」

「……………」

何故か分からない……だが、この蒼い瞳を……この人と……知ってるような気がする。

「では、私はこれで」

そう言い残し、青年は武道館の方へと行ってしまった。

「可奈美ちゃん、あの人と会ったことがあるの?」

「分からない……でも、どこかで……まあ、いいや! さあ舞衣ちゃん、私たちも行こつ!」
「あつ、待つてよ可奈美ちゃんつ!」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

武道館内 自販機エリア

ガタン…

「はあく……やっぱ、会場内の警備はしつかりしてるみたいだな……」

自販機の取り出し口から緑茶のペットボトルを取り出す和泉守。

先ほどまで会場内を廻り、どのような警備体制が敷かれているか確認していた。

流石は折神家。御前試合会場と言うこともあるが、本家もあると言うことで、全ての出入りは多くの警官と警備員でガッチリ守られている。

監視カメラも至る所にあるので、下手な行動は出来ない。普通ならば。

「(現代つてすげえな……こんなもんで監視の目を誤魔化せるとは……)」

そう思いながら、チラリとポケットに隠し入れている小さな黒い四角形の物を見た。

和泉守は会場内を周りながら、幾つかの監視カメラにこの四角形を取り付けていたのだ。

「(さて……仕掛けも済んだ事だし、そろそろセイバーと合流——)」

「っ！」

「おっと！悪い……な……」

「いや、(こちらこそ)」

ペットボトルを握りつぶし、ゴミ箱に捨てようとした瞬間、誰かとぶつかりそうになった。

何とか躲し、一言謝ろうとその人物の顔を見たとき、和泉守の心臓が止まりそうになった。

その相手は平城学館の制服を着ており、長い黒髪で、鋭い目つきの少女。

「(コイツが、『十条 姫和』か……)」

ペットボトルをゴミ箱に入れながら、チラリと姫和の方を見る。

姫和は和泉守の事はまるで気にせず、自販機に売ってる飲み物を選んでいた。

例の少女に何の前触れも無しに出会い、驚いてしまったが、何とか自然に振る舞うことが出来た。

「(それにしても、よくよく見ると可愛いな……見た目は母親似だろうが、どこことなく父親の面影がある……)」

まあ、そんなことよりも、仕事をしないと。そう思い、和泉守はサツサとその場を後にした。

そして彼女の方はと言うと……

「……………チヨコミントジュース……………無いなあ……………」



武道館内

準決勝戦まで行われるこの会場内。

その中心、折神家の紋章とトーナメント表が大きく飾られている場所の近く。

試合全てを見渡せる場所で1人の刀使が会場全体を見渡していた。

平城学館であるが、親衛隊第一席でもある『獅童 真希』である。

彼女の姿が見えると、平城以外の刀使でも、彼女の姿に興奮してしまう。

彼女はこの御前試合に2連覇という偉業を成し遂げ、親衛隊第一席の地位を獲得したのだ。

「今年は中等部の年少者の方が多いですわね」

その後ろから声をかけたのは、親衛隊第二席『此花 寿々花』。言葉遣いだけでなく、名家の令嬢なのだ。

「御刀の適性率は年少の方が高いと聞く。次世代になったと言うことさ」

「あら、前世代は2連覇を成し遂げた真希さんが終わらせたとでも?」

「僕はそこまで自惚れてない。寧ろ——」

結芽や彼を見るとそう感じられずにいられなかった。

『結芽』と言うのは、親衛隊の最後のメンバー。第四席の『燕 結芽』。親衛隊では一番年少でもあるが、第一席の真希さえも凌ぐとされるまさに『天才』。

そんな彼女も今は、美味しそうにサンドイッチを頬ばっていた。

「ん? サンドイッチ?」

「はい、真希さんもどうぞ」

そう言つて、真希にもサンドイッチを手渡す寿々花。もちろん彼女の手にも自分の分があつた。

武道館内は一部を除いて飲食禁止。もちろん彼女たちも例外ではない。

真希も注意しようとしたが

「菊一さんからの差し入れですわ。夜見さんが預かっていたそうです」

「菊一から？」

ならば仕方ない。せつかく自分たちのために作つてくれた差し入れを無下にするわけにはいかない。

なにより、思い人からなら尚更だ。

「じゃあ、一つ………美味しいな、このカツサンド」

「あら、こちらのベーコンレタスサンドもいけますわよ？」

「ええ、このイチゴサンドだよ？」

「いえ、このツナマヨサンドが一番です」

いつの間にか集結し、どのサンドイッチが一番か話していた親衛隊。こうしてみると、年相応の少女たちに見える。



「礼っ！……双方、構えっ……写シ……始めっ！」

定刻通り、開会式は行われ、一試合ごとに試合が始まった。

流石は伍箇伝代表に選ばれただけあって、皆その実力が高い者ばかりであった。

刀使たちは写シを張るだけでなく、短時間のみ、外の時間から切り離され高速移動出来る『迅移』、一時的に筋力を向上出来る『八幡力』などの技を使い戦う。

そのため、迅移を使い短時間で決着をつける者。

八幡力で力押しする者と様々のあった。

そして、時間はあっという間に過ぎ、準決勝戦まで進んだ。

既に1人は決まっていた。平城学館代表の『十条姫和』。

もう1人はこれから行われる。その対戦は同じ美濃関同士のぶつかり合い

可奈美と舞衣の対戦である。

「あゝ、可奈美と舞衣の対決か！」

「今までの試合の中で一番ドキドキするよ！」

「可奈美——舞衣——どっちも頑張れえ——」

応援に来てくれた仲間たちの声がよく聞こえる。

彼女たちの言う通り、舞衣も今までの試合の中で、これほど緊張し、同時に心が落ちていた言葉無い。

相手は親友である可奈美。今まで勝った事は片手で数えるくらいしか無いが、彼女との対決は全て覚えている。

彼女の戦い方、クセは全部分かってる。

だがそれは可奈美も同じ。舞衣とは練習試合だけでなく、ずっと辛い稽古を共に乗り越えてきた。

美濃関での代表戦だって、ギリギリ勝てた。彼女の實力も相当のもの。

だからこそ——

「（絶対に負けたくないっ!!）」

「礼っ！………双方、構えっ………写シ………始めっ！」

審判の合図と共に、少しの間、2人は微動だにしなかった。

「（可奈美ちゃんは強い………特にここ最近私なんか足下にも及ばないくらい………）」

「（舞衣ちゃんの明眼はそう簡単に崩せない………誘いをかけて、技を打ち込んだところを

狙うか……)」

「(私の手の内は全部知られてる……けど、コレだけは——)」

スウ…

「えっ!？」

「(可奈美ちゃんが知らない、私が可奈美ちゃんへの秘策っ!)」

舞衣が御刀を納刀したかと思いきや、両膝をつき、居合いの構えを取った。

それは対戦相手の可奈美だけではない、美濃関の仲間たちや、他の刀使たちも驚いた。居合いを使う刀使なんて歴史上居たかもしれないが、滅多に居なかつたのだ。

「(これが……舞衣ちゃんが私への切り札……)」



観客席入り口付近

「ほお……居合いか……中々思い切つた事するねえ……」

スタッフ用の制服を着た青年、鶴丸が壁に体を預けながら、試合を見ていた。

そこに、スーツ姿のセイバーがやって来た。

「珍しいね、鶴丸が刀使の試合を見るなんて」

「驚いたか?……セイバーこそ、こんなところに居ても良いのか?」

「会場内はもう見て回った。後は決勝戦を待ただけさ。ん……彼女たちは……」

そこで、セイバーは準決勝戦に誰が出ているのか分かった。トイレの場所を教えてくださいました美濃関の刀使たちだった。

「2人とも、いい目をしてるな……何時の時代も、女の子は強い子ばかりだな……」

「それは経験談か、セイバー?」

「まあね……」



「(やっぱり舞衣ちゃんは凄いなあ……ホントにいつもドキドキさせてくれる!)」

「(私は、私のやり方で可奈美ちゃんに追い付くっ!)」

居合いの舞依に対し、可奈美は御刀を振り上げ、上段の構えを取る。

それからは、また2人だけの睨み合いが続く。

そして――

「っ!!」

「来るっ！」

迅移で真つ正面から斬り込む……と見せかけ、一気に背後に回り込む可奈美。だが、それは舞衣は予想出来た事。

可奈美が刃を振り下ろす前に、彼女の胴を一閃しようと、即座に振り返り御刀を抜刀する。

「早いっ!!」

「取ったっ!!」

この勢いなら、可奈美の刃より舞衣の刃が早い。

この勝負、舞衣の——

「でもっ!!」

バシッ——!

「なっ!?!」

寸前のところで、可奈美は舞衣の手を掴み、刃の勢いを止めた。

「ほお……」

「へえ……やるじゃん、あのお姉さん……」

「終わったな……」

「ああ、あの子の直感能力は相当のものみたいだな」

「(くっ……!）」

「(ごめん、舞衣ちゃん。私だって勝ちたい……勝って、決勝戦であの子と戦いたい!)」

そして、可奈美は真つ直ぐ舞依に刃を振り下ろした。

「———そこまでっ!勝者、衛藤可奈美!」

「……決勝、頑張つてね。可奈美ちゃん!」

「うんっ!!」

試合が終わり、決勝戦まで少し時間が開く。

可奈美から居合いに關する質問攻めから何とか逃れだ舞衣は1人、武道館の端の廊下にいた。

「(あくあ……負けちゃった……)」

今日まであの居合いの腕を高め続けてきた。

欲を言えば、もっと鍛錬をしておけば良かったと思うところだが、不思議とそんな考

えは出てこなかった。

逆に、先日からのモヤモヤが綺麗に無くなり、スッキリしていた。

「なんでだろう……ホントは勝ちたく無かったのかな……」

「それは違うぜ」

突如声をかけられ、その方向に向くと、缶ジュースを放られ、慌てて受け取った。

そしてその缶ジュースは昨夜と同じオレンジジュース。そして先ほどの声は――

「貴方は……」

「よっ。さつきは残念だったな」

スタッフ用の服を着ているが、間違いなく昨夜出会ったあの青年だった

「お前さんは間違いなく勝ちたかった。試合に出て、とつておきの居合術を使って勝ちたかった。その選択を選び、全力でぶつかかった。だから今、驚くくらい清々しい気分なんだろう？」

そうだ。ホントはまだ完璧じゃ無い居合い術を使うべきか、選択に迷っていた。

だが青年のおかげでその選択を選んだ。

それでも可奈美の実力の方が勝っていた。

でも、おかげで少しは彼女に近付けたかもしれない。何故なら――

『舞衣ちゃん、居合いなんていつ覚えたのっ!? 私ビツクリして力抜けそうになったよ! それに全然使いこなせてたし、一瞬負けるかと思っただよ!』

可奈美のあの反応を見れば、それはそれで成果はあった。

「そっか……だから私……」

「それに負けは負けだが、結構格好良かったぞ」

「／／／／／っ!!」

そう率直に褒められて、舞衣もいつい顔顔を赤く染めてしまう。

「それじゃ、俺は仕事に戻る。サボっていると叱られるから……」

主に、相方^{村正}を怒らすと後が怖い……

「あ、あのっ!」

その場を立ち去ろうとする青年に、舞衣は声をかける。

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

そうして、青年はどこかへ行ってしまった。

不思議な人であったが、会えるならまた会いたい。

そう思う舞衣だった。



御前試合 決勝戦会場

会場内は多くの刀使たちや刀剣類管理局関係者でいっぱいになっていた。

そして、その決勝戦に出る可奈美に、美濃関の仲間たちからの激励を受ける。

「ここまで来たら優勝だよ！」

「頑張つてね！」

「可奈美、勝つてね！」

「ありがとう、美炎ちゃん。みんなも……頑張るよ！」

その時

「見て、紫様よ！」

「御当主様だわ……」

「相変わらず凛々しくて素敵ね……」

試合場から真っ正面、貴賓の観覧席となる御殿の奥から折神家当主、折神紫が出て来

たのだ。

二十年前、荒魂が引き起こしたある災厄を沈めた英雄の登場に会場内は静かに興奮を高めた。

「うわ〜！御当主様の前で試合するんだね、可奈美」

「ヤバイ……すつごく緊張してきた……！」

「今さら、何言ってるの？」

「あれっ!？」

平城学館側では、代表の1人は折神紫の登場に興奮していたが、もう1人は

「十条さん、紫様だよ！」

「ええ、そうですね……（折神……紫……）」



御殿から折神紫が姿を現し、会場内の陰に隠れているセイバーは注視する。

「彼女が折神紫か……『大災厄』の英雄か……」

ヒッッ…

『こちら和泉守。折神紫を確認した。そっちはどうだ?』

「こちらセイバー、僕も確認した。決勝戦出場者2名も見えてる」

『確か十条姫和と……衛藤……衛藤可奈美だったか?』

「そう。衛藤可奈美の方は特に注視しなくても良いだろう。問題は十条姫和の方だ」

『分かってるよ。願わくば、普通に試合して欲しいな……』

「確かに……そろそろ試合が始まる。準備を……」

『了解』

ブツンッ…

「さて……任務開始……」



「これより決勝を始めます。選手は前へ!」

「はい」

審判の元、可奈美と姫和は会場の中心の試合場に立つ。

可奈美は今まで危ない勝ち方をしてきているように見えるが、咄嗟の判断力と反射神

経で勝利をものにしてきた。

一方姫和は小回りの効いた動きと相手の隙を見逃さない観察眼で確実な勝ち方をしてきた。

「(この勝負、長引くかも……けど、絶対負けないうっ!)」

「(ようやくここまで来た……)」

「お互いに、礼っ……構え……」

「……………」

お互いに頭を垂れて相手に向き、抜刀し、構える。

可奈美は真っ直ぐ姫和を見ているが、心なしか姫和の方は別の何かに意識を集中しているように感じる。

「写シ……………」

写シを張る可奈美は決勝戦のドキドキと同時に、妙な胸騒ぎを覚える。

「(なんだろう……ワクワクとは違う……)」

「始めっ!!」

審判の合図と同時に、姫和は重心を落とした『車の構え』をとる。

それに対し可奈美は、臨機応変を身上とする『無行の位』。

互いに古流とされる剣術の構えだが、あり方は真逆だ。

そして――

会場全てに衝撃が走る――

姫和の姿が試合場から――

消えた――

ガキンツ!!

「――それがお前の一つの太刀か？」

「――っ!？」

次に姫和の姿を現した場所は折神紫の前。彼女に刃を振るい、それを防がれていた。

「(ならば、もう一度――)」

「させんっ！」

ザシュツ！

「くっ……!!？」

もう一度、紫に斬り掛かろうとしたが、今度は背後から真希に斬られ、写シが消えてしまった。

そして今度は、自分が真希に斬られそうになり、目を閉じようとしたその時

ガキンツ！

「迅移っ！」

「……っ！」

可奈美が2人の間に割り込み、それを防いだ。

それと同時に、姫和は迅移でその場を離脱。可奈美も後に続いた。

夜見が後を追おうとするが

「構わん、追うな」

夜見、真希、寿々花は指示に従ったが、1人だけ違った。

「アハハ！」

「なっ!!?待て、結芽！」

結芽だけは、2人の背後から回り込み、2人の正面に立ち御刀を抜く。

「私とも遊ぼうよ?」

「(くそっ!)」

「(やるしか……!)」

戦うしか無い。そう判断しようとした時――

「どりゃあっ!!」

ドオーーン!!

今度は別の何者かが3人の間に割り込むように刀を地面に叩き込んだ。

すると、その衝撃で会場全てが土煙で覆われた。

「ゴホッ……ゴホッ……な、なん――」

「ほら、ボサツとすんな!行くぞっ!!」

「なっ!?!お前はだれ――」

何者か問う前に、ガシツと脇に抱え込まれてしまう姫和。

「いいから、逃げるぞっ!!」

「ま、待って!私もっ!」

何者かが姫和を抱えて会場を抜け出したのを感じた可奈美も、その後を追った。

そして、結芽も

「もおく、逃がすと思う?」

「悪いが逃げさせて貰う」

「ん?」

3人の後を追おうとした結芽の前に、別の誰かが立ち塞がっていた。

まだ土煙でよく見えないが、蒼銀の騎士甲冑がうつすらと見えた。

「誰よ、あんた?」

「通りすがりの騎士だ」

すると、蒼銀の騎士は何も持っていない両手を、まるで剣を振るうかのように振り下ろすと、今度は突風が舞い上がり、結芽の目を閉じさせた。

「この……っ!?!」

風が止み土煙が晴れると、もう彼等の姿は煙のように消えていた。

運命の御前試合（別side）

御前試合当日

御前試合会場となる折新家本家の敷地にある鎌倉市街には、街の住人だけでなく出場選手の応援に向かう刀使やその関係者などでいっぱいになっていた。

それもあつてか、あちこちの店には刀使たちがお土産を探したり、街をじっくり見て回っていた。

その中には、美濃関学院の刀使の安桜美炎たちの姿があつた。

「うわ〜！さすが鎌倉！凄い都会感っ！」

「いやあ〜、それは比べるのが私たちの地元だからじゃない？」

「そうそう、都会って言うならせめて東京や名古屋じゃん！」

「それより美炎は会場にいたら別行動なの？」

可奈美たちと違って今鎌倉についたばかりだが、彼女は一応補欠要員。

もし何かあればいつでも出場でれるように控えねばならないはず。

「ううん、みんなと同じだよ。可奈美と舞依ちゃんが棄権しないかぎり観客席で応援だよ」

もつとも、あの2人はそんな事はするはずは無いが。

必ず決勝戦まで意地でも出るだろう。

「ふうん、そっかー。あ、他校の生徒発見! もしやあれが可奈美たちの敵かつ!」

「いやいや、普通に私たちと同じ応援の人でしょう?」

「……あん?なんだ、なにガンくれてんだよお前ら?」

友人が他校のフードを被った少女を見つけ指を指す。

すると、その少女はこちらを睨みつけ、ズカズカと近寄ってきた。

「えっ!? えっと……その……ちよつとどうすんの!」

「……………任せた!」

そう言い残し、美炎を置いて一目散に逃げていく友人たち。

「えっ……!?」

もう視界から見えなくなってしまうた友人たち。そして背後からはキツイ視線を感じる。

こうなれば! と美炎は出来るだけ相手を刺激しないように話しかける。

「えっと……すいません、うちのものが……その制服鎌府だよね? 佩刀はいとうしてるって事は

代表の人かな？」

「違う。代表はアタシじゃなくてコイツの付き添……てっ！いつの間にかいねえし！」

誰かと一緒だったのか、周りを見渡すフードの少女。すると、近くの店からお饅頭の入った袋を持って出て来た鎌府の少女を見つける。

「ああー！いやがったな沙耶香！てめえ、何やってんだよ！」

「お腹空いたから買ってきた……呼吹も食べる？」

連れを見つけたフードの刀使は、鎌府の少女に近づき怒鳴る。

しかしその少女の方は特に慌てもせず、呑気に答え、饅頭を一つ差し出す。

「いるか！それと、勝手にうろちよろすんな！お前が迷子になったらアタシが叱られんだからな！」

そう言いながら、差し出された饅頭を貰い、一口かじるフードの少女。

「よし、今のうちに……」

何とかこちらへの注意は削がれたようなので、コツソリ離れようとしたその時――

「(えっ――)」

——美炎の目に、あるものが映った。

「あ、それとお前、アタシにガンくれたんなら覚悟が出来て——」

「ごめんなさい、またあとで！」

「なっ!?!お、おい！」

「呼吹、アレ友達？」

「違うわっ!!」

後ろからフードの少女が何か言ってる気がするが、美炎はそれどころではなかった。

「(うそ……もしかして……)」

「あっ！美炎く！ごめんね、さつきは——」

「ごめん！みんな先に行つてて！」

「えっ、ちよっ……美炎っ!？」

人混みをかき分け、見失わないように急ぐ。

けど一瞬だったので正直分らない。

もしかすると人違いか、見間違いかもしれない。

いや、見間違うはずが無い。

だが、確認せずにはいられなかった。

何故ならそれは、ずっと探していた――

◇◇◇◇◇

鎌倉市街 とあるお茶屋

ふうく…と、縁側の席でお茶をすする長身の青年。

だが、その格好はまるで平安時代からタイムスリップしてきたような青い着物を着ており、どこか浮世絵離れをした雰囲気を感じさせる。

しかも、かなりの美形ときた。

そのためか、もう一つある縁側の席には誰も座ろうとせず、彼の目の前を通る人々は彼の姿を見て、少し驚いたり、通り過ぎた後にヒソヒソ話している。

何かのコスプレ？

モデルさんか何か？

そんな類いのものばかり。中には、なにか勘違いして彼に話しかけ、写真を一緒に撮る。

だが、当人はまるで気にせず、優雅にお茶やお団子を楽しむ。

「ん〜……時代が変わろうと、団子と茶の味は変わらず美味い……」

「三日月」

そこに、青のフード付のジャージを着た高校生ほどの少年が彼の前に立つ。

「おー、富田！お前もどうだ一緒に。残念ながら、お前の好物の鮭大根は無いが、この三色団子も中々美味いぞ？」

「………いらない」

それだけ言い着物の青年、三日月の隣に同じ零課の仲間、富田義勇が座った。無表情でこの冷たい態度、普通の人なら印象を悪くする。

しかしそれは義勇の言葉が足りないだけ。

そして三日月は、その義勇の言葉を通訳が出来る数少ない人物。

なので先ほどの彼の言った事も実は――

「俺たちは遊びに来た訳じゃない。だが休憩も必要だからな、俺はみたらし団子を頼むから」いらぬい」

——こう言っていたのを分かっているの、気にせず彼の代わりにみたらし団子とお茶をもう一人分、注文する。

「【ところで三日月の任務は】終わったのか？」

「ああ、この街にある監視カメラの場所と交番、刀使の休憩所の位置の確認は出来た。逃走時に見つからない道は幾つかあったぞ。先ほどセイバーにその道のりをめぐるした」
「そうか」

「富田の方はどうだ？」

「【街中の警備状態は確認出来た。それなりの数はいるが、審神者が公安のツテを使って根回ししているから】問題ない」

「そうかそうか……ならば、我らはひとまず落ち着ける訳だな」

「【任務完了は大荒魂討伐、それまで気は抜けないから】まだ気は抜けない」

「お前もセイバーに負けないくらい真面目っぷりだな。少しは肩の力を抜けよ？」

ポンポン……と義勇の肩をたたく三日月。

そして、湯飲みを手にし残ったお茶を飲み干す。

彼らの前に御前試合の応援に来た刀使たちがスマホの地図を見ながら、会場へと向かっていった。

「……仕方ないことだが、刀使たちの力を借りられないものか。彼女たちがいれば、我らの任務も——」

「無理な話だ」

「珍しく即答だな」

「……………」

「確かに我らの任務は刀使たちのと似て非なる。だが、それでも我らが力を合わせ、相利共生していけば——」

「彼女たちは年端もいかない少女だ」

「ふむ……………」

「そして俺たちが思う以上に、か弱い……………そんな彼女たちとは、一生解り合えないし、共に戦うことは出来ない」

「（珍しく喋るな……………）」

「こんな彼は、審神者も見たことは無いだろう。そう思いながら団子を一つかじる。だから、任務の邪魔になるなら容赦なく俺は斬る」

「そう言い、義勇はお冷やを一気に喉に流し込む。」

「あ、流石に喋りすぎたか……………」

「おまたせしました〜」

ちようどそこに、注文した義勇の団子とお茶がきた。

義勇は静かに手を合わせ、団子を一口食べ――

「きゃあああーっ!?」

「荒魂だっ!!荒魂が出たぞー!!」

「に、逃げろー!!」

「……………」

「おや、食べないのか富田?」

歯が団子に触れる瞬間、遠くから聞こえる悲鳴。

それを聞いて、団子を食べるほど、義勇は呑気ではない。

「【必要無いかもしれないが、逃げ遅れてる人が居ないかちよつと様子を見に】行つてくる」

「団子はいいいのか？」

分かつてるくせに、変わらずの三日月の顔。

だが義勇に取つてもそれは慣れている。

「会計を頼む」

「承知した。ただし、目立つ事はするなよ？」

「分かつてる」

そうして、義勇は騒ぎが聞こえる方へと走つて行つた。

では、自分もそろそろ動くか……と席を立とうとした時

「あの、すいません！」

赤いグラデーションがかかった髪の少女が息を切らしながら、三日月に声をかけた。

美濃関学院の制服と御刀を所持しているところを見ると、彼女が刀使であることは明白。

「どうしたのかな、刀使のお嬢さん？」

恐らく、荒魂が出たから非難して下さいと、声をかけたのかと思つたが、少女はスマホを操作し、ある写真を三日月に見せる。

「こんな子、見かけませんか？」

「ふむ………」

少女が見せた写真には、剣道着を着、竹刀を持った小学生ぐらいの少年が写っていた。それは先ほども一緒にいた義勇に良く似ている……いや、凄く似ている。

断言出来ない理由は、この写真の少年は義勇のように髪を伸ばしておらず、カメラに向かつて無邪気な笑顔を見せている。

あの四六時中無表情の義勇とはまるで違う。だが

「……………この少年か分からないが、良く似た人を見かけたぞ」

「つ!?どこ、どこですか!」

「うむ、あちらの方向に向かつて行ったと思うぞ」

そう言い、義勇が向かった方向へと指を指した。

すると少女は三日月に礼を言いながら頭を下げ、悲鳴が上がる方へと走って行った。

「……………まあ、どうなるかな……………」

そして三日月は店員を呼び、義勇の団子をお持ち帰り用の袋に包んで貰い、店を後にした。



美炎 side

イケメンのお兄さんから、義勇くと似た人が荒魂が出た方向へと向かったと聞いて急いでいる。

もしホントに義勇くんだとしたら……

もし、荒魂に襲われでもしたら……

「なんだ、ずいぶん焦ってるみたいだな？」

「っ！あなたたちはさっきの……」

横を向くといつの間にかさっきの鎌府の2人が私の隣に追いついていた。

「多分、知り合いがこの先に居るかもしれないんです……！」

「ふくん、なら荒魂ちゃんはおアタシがもらおうぜ！それにしても鎌倉は折神家のお膝元

だってのに、荒魂出過ぎだろう!？」

「悪態はあと……荒魂は討伐する……」

「まあいいや。なんにせよ、荒魂ちゃんと遊べるならアタシはそれで満足だよ！」

「呼吹……任務は真面目に……」

「うるせえー、んなことどうでもいいんだよ！」

「なんか、変な人だな……」

「それよりも、早く荒魂の元に……」

「見えた！」

『……………』
『……………』

目の前には虫のような見た目なのに、人の半分くらい大きさの荒魂が数体、周りの電柱を倒しながら暴れていた。

小さいながらも荒魂だ。しかも数が多い……

「でも、荒魂を鎮めるのが刀使の使命！なせばなるっ!!」

「おっ！いい根性じゃねえか、美濃関の！名前は？」

「えっ……安桜美炎だけど……」

「よし安桜、行くぜ！」

「うんっ！」

すると荒魂の方もこちらに気付き、向かって来る。

鎌府の2人と一緒に私も愛刀『加州清光』を抜き、写シを張る。

「行くよ、清光っ！」

私の愛刀、清光は他の御刀とは少し違う。

刃先が少し欠けている。モデルになった刀剣も欠けているらしいけど、私の前の刀使が任務中に欠けてしまったらしい。

けどそれでも、私はこの御刀を気に入ってる。

自分だけの御刀の証のように思えるのだ。

そうしている間に、鎌府の人たちが荒魂を斬っていた。

「おらっ！もつと遊ぼうぜ、荒魂ちゃんよお！」

「……………」

フードをかぶった刀使は、二刀の小太刀と細やかな動きで荒魂を翻弄しその体に傷を刻んでいく。

もう一人の刀使は戦闘中はほとんど喋らないが、無駄な動きが一切見られない。

まるで機械のように荒魂を斬っている。

「(なんて、見とれてる場合じゃ無い！私も！)」

改めて御刀を構え直し、荒魂に向かって斬り掛かる。

二体ほど、私に気付いて襲い掛かってくるが、一体を避けながらももう一体をすれ違い様に斬る。

すると、荒魂はあっさり真つ二つになり、ドロドロのノロになる。

そしてもう一体がミサイルのように突進してくるので、突きの構えを取り、向かって来る荒魂を一刺し。

『……………!!』

断末魔のような声をあげ、もう一体もノロになった。

まず二体。鎌府の人たちのを合わせて四体。

けど、荒魂はまだいる。私たちから少し距離を取っている。

「はあ……はあ……これであと半分……」

「へえ、やるじゃねえか？」

「ありがとうございます、えつと……」

「鎌府中等部三年、『七之里呼吹』。あつちは同じく一年の『糸見沙耶香』だ。よろしくな」

「呼吹、先に行く……」

そう言うのと、糸見さんは私が挨拶を聞く間もなく行ってしまった。

てゆうか、早っ!?

「まあ、あんなヤツだからな。てな訳で、ここにいる荒魂ちゃんはアタシが全部ぶった斬る!……その前に1つ——」

そして七之里さんは私に向かって睨みつけて

「いいか、アタシは荒魂ちゃんを斬るのが愉しみ……勝手にアタシの獲物を斬ったら、許さねえからな!」

まさかだけど……七之里さんって、荒魂退治を楽しんでる? 荒魂のことを『ちゃん』付けで呼んでるし……

「そんなわけで……続けようか獲物ども! アイシテルぜ荒魂ちゃん!」

ああ、七之里さんも行っちゃった……てかアイシテルって……『愛してる』ってこと
!?

刀使っているいろいろいるんだね……

『……………!』

「おっと、私も戦わなくちゃ!」

早く、義勇くんを探さないと!

『……………!』

『……………!』

また二体がかかりで襲い掛かって来る。

だったら、さっきと同じやり方で倒すだけ!

「すれ違い様にまず一体——」

『……………!』

「えっ!？」

上からもう一体っ!?!やば——

ヒュンツ ガンツ!

『……………!?!』

上から襲ってきた荒魂に、どこからかお土産用の置物が飛んできて、荒魂にぶつかっ

た。

「(今っ!)」

体を捻らせ、回転するように三体の荒魂に斬り掛かる。

その内一体は斬れたが、残りはかすり傷を負わせた程度。

『—————!』

『—————!』

今度こそ、残りは二体。

数では負けているが、どちらも手傷を負わせているので、少しフラついている。

なら勝ち目はある。

『—————!!』

すると、また二体の荒魂がミサイルのように突っ込んで来た。

ただ突進して来るだけなら良かったが、それぞれバラバラに無規則に襲ってきた。

一体が右から来たと思ったら、もう一体は上から。

一体が左から来たと思ったら、もう一体は背後から。

なんとか御刀で防いでいるが、このままだと集中力が切れて、写シを解いてしまう。

でも—————

「なせばなるっ!だよー!」

『……………!!』

また一体が真つ正面から突つ込んで来た。もう一体は死角に入つて見えない。だが、気配から今度は斜め後ろから迫つて来てる。

だったら——！

「(ギリギリまで引き付けて……………)」

二体の荒魂がそれぞれ、私に向かって迫る。

「(もう少し……………)」

『……………!!』

「今つ!!」

迅移で二体の間をすり抜ける。

目標がギリギリで避けたので、荒魂たちはそのまま互いにぶつかった。そして、動きが鈍くなったところをすかさず――！

「はあっ!!」

ザッシュ！

『『……!!?』』

二体同時に斬り、荒魂たちは地面に落ちて、ノロへと変化した。

「はあ……はあ……そうだ、七之里さんたち！」

あの2人も苦戦してるだろうし、急がないと！

そういえばさっきの置物、何で飛んできたんだろう？

ちよつと不思議に思いながらも、私は2人が向かった方向へと走った。

ザッ…

「……………」

美炎 side out

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「はあ……はあ……待つててね……美炎ちゃん！」

鎌倉に着いてから、市街で荒魂が出現したと情報を聞き、現場へと向かう知恵。

その途中、美濃関の学生たちが「美炎大丈夫かな？」と話していたのが聞こえた。

彼女たちに聞くと、どうやら美炎が荒魂が出た方向へと向かったとき戻って来ていないらしい。

それを聞いて、知恵は直ぐさま市街へと向かった。

あの街に大切な幼馴染みがいるのだから。

もう――

二度と――

幼馴染みを――

失いたくない

◇
◇
◇
◇
◇

「糸見さん！七之里さん！」

「ん……なんだ、お前か……」

置いて行かれ荒魂たちと闘っていた美炎はようやく2人の元へと追いついた。彼女たちの目の前には、既に大量の荒魂たちがノロへと溶けていた。

原因は目の前の2人だと思うのに、呼吹の方は何故か不機嫌だった。

「えつと……どうかしたの？」

「どうかしたのじゃねえよ!!アタシの獲物がどこぞのヤツに盗られたんだよ!!」

「えっ?盗られた?この荒魂は2人が——」

倒したのでは?と聞こうとしたが、沙耶香が首を横に振る。

「もう終わってた」

「え?終わってた?」

「だ〜か〜ら〜、沙耶香が来る前にもうこの状況だったって話だよ!あ〜!!どこのどいつだよ、アタシの荒魂ちゃんを横取りしたのは〜!!」

グシャグシャと頭を掻きむしる呼吹。

しかし、溶けているノロの数見たところ二体や三体なんかでは無い。

少なく見積もっても10はある。

しかも、大きなノ口の塊も見える。つまり、大型の荒魂がいたということ。

「(それを全部倒したってこと? 一体誰が——)」

ガタツ!

「ツッ!」

近くの土産物屋から物音が。まだ荒魂が隠れているのか? そう思った矢先に

「おねえちゃんたち、だれ?」

幼稚園児ぐらいの少年が店から出て来た。

逃げ遅れだろう。美炎は納刀し、少年の元に駆け寄る。

「私たちは刀使だよ。君、大丈夫? もう荒魂はいないからね」

少年の頭を撫でて、直ぐさまここから離れようとした時

「あのおにいちゃんは?」

「お兄ちゃん? 兄弟がいるの?」

だとしたらその子も探さないと思ったが、少年が首を横に振る。

「あのねあのね、ぼくね、おかあさんときてただけど、はぐれちゃってね。そしたら、

こわいおぼけがでてきてね……」

おぼけ、恐らく荒魂のことだろう。そして、騒ぎのなかで母親と逸れたらしい。

「それでねそれでね、おぼけがぼくのほうにきてね、たべられると思ったたらね、しらない

おにいちゃんがたすけてくれたんだよ」

「知らないお兄ちゃん……」

少年を助けたその人物は、この土産物屋内に少年を隠れさせ、誰か大人が来るまで出て来るなど言い、少年を残して出て行ったらしい。

その後しばらくの間、外で激しい音を聞いたらしい。

まるで何かと何か戦っているようだ

「……………ねえ、そのおにいちゃんって、こんな子かな？」

そして美炎はスマホに保存しているある少年の写真を見せる。

「うくん……………おかおはよく見えなかったから、わかんない」

「そっか……………」

すると外の方から多数の足音が聞こえる。見ると機動隊が20人ほど到着したようだ。その中には

「あれ、ちい姉？」

「美炎ちゃん！」

何故か知恵の姿が。そして美炎の姿を見つけると知恵は美炎の元に駆け寄り、彼女を抱き締める。

「良かった……………無事で……………」

「うん。ありがとう、ちい姉」

「とにかく、あとは機動隊の人たちに任せて……」

そして、少年を連れて外に出ると隊長らしき人が美炎に敬礼をする。

「皆さんの迅速な行動のおかげで、被害は最小限に納めれました。あとは近辺敬語の刀使の到着を待ちます。手早い非難誘導と荒魂殲滅、ありがとうございました！近辺住民に代わり、感謝致します！」

そう言い、彼女たちに頭を深く下げる。

「いいえ！私たち以外にも荒魂殲滅に協力してくれた人がいたみたいで……」

「そうでしたか、その方はどちらに？」

「アタシらが来る前にどっか行っちゃまったよ」

「そうですか……では、あとは我々が引き継ぎます」

「はい、お願いします。あ、この子逃げ遅れたみたいで……」

「重ね重ね、ありがとうございます。その子も我々が保護し、親御さんを探します」

「ありがとうございます。それじゃ、ぼく。このお兄さんたちと一緒に避難してね」

「うん、ありがとう、おねえちゃん！」

バイバイと手を振る少年を見送る美炎。

「そんじゃ沙耶香、アタシらは御前試合の会場に行くぞ」

「うん」

そして美炎が呼び止める間もなく、また2人はあつという間に行ってしまった。

「美炎ちゃん、他にも荒魂と戦った刀使がいたの？」

「刀使……なのかな……」

「?まあ、それよりも私たちも会場に行こ、美炎ちゃん」

「そうだね……多分この様子だと、居ないかも……」

「え?誰が?」

「うん、実は——」

美炎は会場に向かいながら、知恵に幼馴染みらしき人物を見かけたことと、目撃情報について話した。

「それって、本当に義勇くんなの？」

「分かんない……見たのも一瞬だったし……小さい頃の写真に似ていたってで、確証は……」

「そっか……美炎ちゃん、御前試合が終わったあと、時間ある？」

「えっ……たぶん少しはあると思うよ……?」

「じゃあ、一緒に義勇くん探そう。美炎ちゃんが見たって言うなら、義勇くんは鎌倉に来

てる。2人で探せば見つけられるわよ」

「ちい姉……そうだね。見つけられるよね！なせば、なる！だよね！」

「フフ……そうね」

そうしていると、会場が身の前に見えた。

「それじゃ美炎ちゃん、またあとで連絡してね」

「うん、またねちい姉」

そうして美炎と知恵は別れ、それぞれの学園の応援席へと向かった。

「ああー！美炎おー！こっちこっち！」

応援席エリアで友人たちを探していたところ、向こうから見つけてくれて、ようやく彼女たちと合流する美炎。

「ごめん、遅くなっちゃって！可奈美と舞衣ちゃんは？」

「まだ宣誓が終わったばっか。これから第1試合が始まるどころ」

それから試合は続き、遂に準決勝。

対戦カードはまさかの可奈美と舞衣。美濃関同士のぶつかり合い。

結果は可奈美の勝利。

舞衣がとっておきの居合いで可奈美を仕留めたかと思いきや、可奈美は片手でそれを阻止。そのまま彼女にひと太刀入れ、勝負は決まった。

「ハア、ドキドキしたー！」

「舞衣って、居合いが出来たんだね〜！」

「凄い試合だったよ……」

そして、試合から戻ってきた舞衣が合流し、一行は決勝戦の会場へと移動した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

会場外

会場近くのタバコ販売店の前に立つ三日月の元に、富田がゆっくり歩いてきた。

「片付けたか、富田」

「ああ、荒魂は殲滅したし、逃げ遅れも無事だから」問題無い」

「もうすぐで決勝戦だ。そろそろ本来の任務だ」

「そうか」

それだけ言い、義勇は三日月の隣で腕を組みながら壁にもたれる。

「緊張してるか？」

「【してないと言ったら嘘になるが、体と心は落ち着いているから】問題無い」

「無理はするなよ。我らはあくまでさぼーとだからな」

「分かってる」

そして、2人の間に暫しの沈黙の時間が流れる。

その間、三日月は義勇の顔をチラチラと見ながらニヤついている。

何かあるのかと思つたが、今は任務に集中しようと無視する。

「（この様子だと……あの少女とは会つてはいないか……さてさて、どうなることやら……）」

「（そういえば、あの美濃関の刀使……どこかで）」



美濃関一行は決勝戦会場の応援席へと座り、試合開始まで待つていた。

「ついに決勝戦だね……まさか可奈美がここまで勝ち上がってくるなんて……」

「うんうん、でも私は可奈美と舞衣の決勝戦が見たかつたなくあ、ごめん舞衣……」

「ううん、気にしないで。しょうがないよ。今年は勝てなかつたけど、次は必ず決勝で可奈美ちゃんと戦うよ」

「舞衣にしては珍しい……でも、次に御前試合に出るのは私だよ！」

「はいはい、舞衣も美炎も、今は可奈美の応援だよ」

そこに、会場入りした可奈美が美炎たちの方に手を振る。

彼女たちも可奈美から声援を送る。

「ここまで来たら優勝だよ！」

「頑張つてね！」

「可奈美、勝つてね！」

「ありがとう、美炎ちゃん。みんなも……頑張るよ！」

その時

「見て、紫様よ！」

「御当主様だわ……」

「相変わらず凛々しくて素敵ね……」

試合場から真っ正面、貴賓の観覧席となる御殿の奥から折神家当主、折神紫が出て来たのだ。

二十年前、荒魂が引き起こしたある災厄を沈めた英雄の登場に会場内は静かに興奮を高めた。

「うわー！御当主様の前で試合するんだね、可奈美」

「ヤバい……すっごく緊張してきた……！」

「今さら、何言ってるの？」

「あれっ!？」

「これより決勝を始めます。選手は前へ！」

「はい」

定刻となり、審判の元、可奈美と姫和は会場の中心の試合場に立つ。

可奈美は今まで危ない勝ち方をしてきているように見えるが、咄嗟の判断力と反射神経で勝利をものにしてきた。

一方姫和は小回りの効いた動きと相手の隙を見逃さない観察眼で確実な勝ち方をしてきた。

「（この勝負、長引くかも……けど、絶対負けないつ！）」

「（ようやくここまで来た……）」

「お互いに、礼っ……構え……」

「……………」

お互いに頭を垂れて相手に向き、抜刀し、構える。

可奈美は真っ直ぐ姫和を見ているが、心なしか姫和の方は別の何かに意識を集中して

いるように感じる。

「写シ……」

写シを張る可奈美と平城代表の刀使。

美炎は決勝戦のドキドキと同時に、何故か妙な胸騒ぎを覚える。

「(なんだろう……ワクワクとは違う……)」

「始めっ!!」

審判の合図と同時に、姫和は重心を落とした『車の構え』をとる。

それに対し可奈美は、臨機応変を身上とする『無行の位』。

互いに古流とされる剣術の構えだが、あり方は真逆だ。

そして――

会場全てに衝撃が走る――

姫和の姿が試合場から――

消えた――

ガキンツ!!

「——それがお前の一つの太刀か？」

「——っ!?!」

次に姫和の姿を現した場所は折神紫の前。
彼女に刃を振るい、それを防がれていた。

「（ならば、もう一度——）」

「させんっ!」

ザシユツ!

「くっ……!?!」

もう一度、紫に斬り掛かろうとしたが、今度は背後から真希に斬られ、写シが消えてしまった。

そして今度は、自分が真希に斬られそうになり、目を閉じようとしたその時

ガキンツ!

「迅移っ!」

「……っ！」

可奈美が2人の間に割り込み、それを防いだ。

それと同時に、姫和は迅移でその場を離脱。可奈美も後に続いた。

夜見が後を追おうとするが

「構わん、追うな」

夜見、真希、寿々花は指示に従ったが、1人だけ違った。

「アハハ！」

「なっ!? 待て、結芽！」

結芽だけは、2人の背後から回り込み、2人の正面に立ち御刀を抜く。

「私とも遊ぼうよ?」

「(くそっ!)」

「(やるしか……!)」

戦うしか無い。そう判断しようとした時——

「どりゃあっ!!」

ドオー——ン!!

今度は別の何者かが3人の間に割り込むように刀を地面に叩き込んだ。すると、その衝撃で会場全てが土煙で覆われた。

「えっ何?どうなってるの!?!」

「可奈美ー!」

周囲が困惑する中、美炎は姿が見えなくなった可奈美を探す。

「いいから、逃げるぞっ!!」

「ま、待って!私もっ!」

すると何者かが姫を抱えて砂煙から飛び出し会場を抜け出した。

そして、何故か可奈美もそのあとを追って行った。

「え、えっ!?!なになに、ホントに何が起きてんの!?!」

友人が困惑するのも分かる。

だが状況は見たまんまだ。

平城代表の刀使が紫に襲い掛かろうとしたが失敗。

そして何者かによって会場から逃亡したこと。

その逃亡に何故か可奈美が協力したこと。

平城代表はともかく、可奈美が紫に刃を向ける理由は無いはず。

一体何が起きたのか、一番知りたいのは美炎の方だった。

「なんで……どうして……可奈美いー!!」

逃亡と追っ手

御前試合決勝戦、突如出場選手の十条姫和が折神紫に刃を向け、失敗。

対戦相手の衛藤可奈美と謎の第三者の介入により、会場の壁を飛び越え、逃亡した。

「なんで……どうして……可奈美いー!!」

応援席からその一連を見ていた美炎の叫びが会場中に響く。

「なになに!?!もしかして可奈美はあの平城黒髪ロングとグルだったの!?!」

「そんなわけないじゃん!!」

美炎が強く否定する。可奈美には折神紫を襲う理由が無い。ならば何故、十条姫和と

共に逃げるのか?

その答えを知るには、彼女たちの後を追うしかない。

「あー待って、美炎ちゃんっ!」

「美炎っ!」

舞衣や友人たちが止める間もなく、美炎は会場の出口へと向かって行った。

「うそ!? あれって、美炎ちゃん!」

同じ頃、長船女学院用の応援席から美炎が可奈美たちを追いかけようとしていたのが目に入った。

ここで美炎まで会場を飛び出したりしたら、彼女まであらぬ容疑をかけられる。

そうなる前に止めなくてはならない。

そして知恵も直ぐさま会場の出口へと向かって走って行き、なんとか出口前で追い付いた。

「ダメっ! 美炎ちゃんっ!」

「ちい姉!? そこを退いて! 早く可奈美を追いかけて話を聞かないと!」

「だからって……!」

そこに会場内の警護にまわっていた刀使たちが2人の元に駆け寄って来る。

「その君たち待ちなさい! 会場内の生徒は今の場所から動くなど命令が出るはずです!」

「もう警備が……!」

「ま、待てないよ!」

ここで捕まるわけにはいかない。そう思った美炎は彼女たちの隙をついて、迅移で会場を飛び出した。

「もう美炎ちゃんっ！待って、って言ってるのに！貴女まで行ったら余計に話がややこしくなるのに!!」

「ああ、ちよつと!？」

そして知恵も美炎を追うために、迅移で警護の者たちを振り払い、彼女の後を追った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

御前試合会場近く　タバコ販売店

店内から双眼鏡で会場を監視する三日月。その後ろでは小型の通信機器で内部に侵入している菊一文字から連絡を受けている。

つい先ほどセイバーたちが目標を確保し、会場から脱出したと報告が入った。

同じ頃三日月も、会場から十条姫和を抱えた和泉守と、セイバーと、何故か美濃関の刀使が飛び出した。

美濃関の刀使については菊一文字も分からないと。

ともかく、第1段階はクリアした。後は彼らの逃亡を支援して、別命があるまで待機

「おや？追っ手か？」

そんなとき、会場から飛び出す2人の刀使。

現在会場内から外への連絡はこちらが妨害電波を放っているの、外に出ている警護担当からの追っ手はしばし無い。

だから会場内から追っ手が放たれるのは解るが、制服からすると美濃関と長船の刀使。

会場やここ鎌倉の警護は練府が担当している。なので追っ手が練府なら何も疑問は無いが、何故か美濃関と長船がいち早く4人の後を追って行く。

「さてさて、ならば——」

「いや、俺が行く」

セイバーたちの後を追わせるわけにはいかない。そこで三日月が行こうとした時、義勇が代わりに動いた。

「【三日月の格好は目立つから、】（ここを頼む）」

「あい、分かった。気を付けてな」

「（コクン）」

そして義勇は刀を腰に差して、店を出た。

すると店の奥から、腰を曲げた老人が出て来る。

「ほや？お連れはどちらに？」

「うむ、どうやら急用が出来たらしい。なに、すぐに戻って来るゆえ、お氣になさらず……」

「おやおや、そうでしたか……お茶や菓子を出そうとしたが……」

「どうもすまない。我々を店内に入れてくれただけでなく菓子まで……」

「いやいや、お若い方々が肌寒い外で立っているのが耐え忍びなかつただけじゃ……」

よつこらしよと三日月の前に腰を下ろす老人。

「それに何やらお忍びで折神家様のお屋敷を眺めていたご様子……」

「……………」

「いや……深くは聞きますまい。その代わり……ひと勝負付き合つて貰えないか？」

そう言つてご老人は部屋の隅に寄せていた将棋盤を手元に寄せる。

「承知した、ならば本気でやろうか」

「ほっほっ……まだまだ若い人には負けませんか？」

「(俺の方が年寄りなのだがな……)」

そして三日月は義勇が戻るまで、老人と将棋盤の前から目を離さなかつた。



鎌倉市街

「はあ……はあ……ごめん、ちい姉……でも止めないで……可奈美の……真意を聞かなくちゃー!」

「美炎ちゃん! そんなこと言つたつて、逃げ切れるわけ無いでしょう! あの子たちや私たちだつて!」

「おい止まれ! 止まれと言つている! 止まらなければ、お前たちも反逆者として拘束するぞー!」

そこに会場の警護にまわつていた刀使たち数名が少し遅れて2人に追い付きそうになつていた。

さすがは折神家本邸の警護担当刀使たち。

「もう追い付かれた!? でも……うん! なせば、なる!」

「あぁー! もう、どうなつても知らないわよ!」

そして2人は御刀に手を伸ばし抜刀、彼女たちに刃を向けた。

「そつちがその気ならば……総員、抜刀!!」

隊長の指示により、警護の刀使たちは御刀を抜き、写シ張る。

「これより反逆者を斬り拘束、その後、十条姫和と衛藤可奈美を追うぞー!」

「はっ!!」

「っー！」

美炎と知恵、そして警護の刀使たち。互いに睨み合い、構える。数では警護側が有利。だが、ここで捕まるわけにはいかない。

「総員……かかれっ!!」

「っ!!」

隊長の指示で、刀使たちが一斉に2人に斬り掛か——

ヒュン——ザシユツ！ ザシユ！ ザシユ！

「えっ!?!」

「なっ!?!」

2人に向けられた刃は届かなかった。

「なっ……だ、だれ……!?!」

バタリッ！

隊長を含めた刀使たちは一瞬にして斬られ、写シを解かれた彼女たちは倒れていった。

そして立っていたのは、妙な格好の少年。

旧日本軍の軍服を思わせる服の上に、右半分が赤の無地、左半分は亀甲柄の羽織。顔は前髪のせいでよく見えない。そして彼の手には、刀が握られていた。

「あ、あなたは……？」

「……………」

チャキ…

「っ!!」

知恵がおそるおそる尋ねると、彼は黙って2人に刀を向ける。そして――

「っー」

ガキンツ!!

「くっ……………!?!」

「ちい姉!!」

あつという間に接近を許し、少年の刀が押し込まれる。

なんとか防いでいるが、思った以上に重い。

こちらは両手で御刀を持っているのに対し、少年は片手で刀を振り下ろし知恵を圧倒している。刀使でないのに、この力は一体？

「(あれ……………この子……………)」

「……………」

「ちい姉から離れろ！」

美炎は直ぐさま横から少年に刃を振り下ろすが、その前に知恵から離れる少年。

「大丈夫、ちい姉！」

「あ、ありがとう、美炎ちゃん……」

「私たち2人ならいける！なせば、なる！」

「そ、そうね。いくわよ、美炎ちゃん！」

気を取り直して、御刀を構え直す2人。

少年もただ黙って、片手から両手に持ち直し構えた。

「(ちいねえ……みほの……まさか……な……)」

「ねえ、あなたは誰なの？どうして私たちに襲いかかるの？」

「刀使でもなく、御刀でない刀……あなたは、先ほどの襲撃の件と何か関わりがあるのか

しら……」

「……………」

戦う前に、2人は少年に問うた。だがやはり、少年は何も答えない。ただ黙って2人

に刀を向けるだけ。

「だったら……あなたを倒して、それから可奈美を追わせてもらうよ！」

そして、美炎が先に迅移で一氣に距離を詰め、少年に斬り掛かる。

「……………」

少年の方は真つ向から受け止める体制を取り、美炎の一撃を受け止めた――

ガキンツ!

「えっ!?!」

「……………」

———と思いきや、あつさり弾き返された。更にその勢いで少年の刀が美炎を狙う。それを直ぐさま迅移で避ける美炎。

そして横から知恵が刀を下から上を振り上げるように斬り掛かるが、それを何事もなにかのように紙一重で躲され、逆に少年の蹴りを腹に受けてしまう。

「ぐっ……………」

「ちい姉!!」

知恵に氣を取られた一瞬、少年の刃は美炎へと矛先を向け、突いてきた。

「美炎ちゃんっ!!」

「やばっ!?!」

左肩を少し掠めたがなんとか体を捻るようにして避けようとしたので、致命傷は免れた。

だが、少年からの追撃は止まない。迅移無しに迅移を使う美炎に追い付き、斬撃を連続で繰り出す。しかもその一撃一撃が重く、鋭い。確実に美炎の急所を狙っている。

それをなんとか防いでいるが、いつまでもこの状態は続けられない。美炎は特定の剣術を持たない無型の剣。

型が無い分自由な戦いが出来るが、彼女自身はそこまで集中力を長くは保てないのだ。集中力が切れてしまうと、すぐに隙が生じそこを狙われる。

いや、その前に写シが解かれ戦闘続行が出来ない。

「美炎ちゃんっ!!」

「(フツ……)」

「っ!!」

押し込まれる美炎を助けようと、知恵が死角から斬り掛かるが、少年はクルツと回るようにそれを躲した。

そして、3人は再び睨み合うかたちになる。

「はあ……はあ……はあ……」

「はあ……っ、強い……」

格が違う。まさにその通りだった。構え、1つ1つの動きに、攻撃、隙が見えない。

あつたとしても、こちらの攻撃はまるで当たらない。目の前にいるはずなのに、手応

えを感じない。

まるで、水を斬っているかのように。

「こんな人……初めて……」

「ただ強いだけじゃないわ……彼、対人戦に相当慣れてる……」

「ホントに、この人一体……？」

「(さっき斬り掛かった時……一瞬だったけど……)」

「早くしないと、可奈美たちに追いつけない……こうなったら、2人同時に行くしかないよー」

「そ、そうね……」

すると、少年の方は刀の刃先を下へと下ろし、下段の構えをとる。美炎と知恵も対抗するように、構える。

「……………」

「……………」

ほんの数秒だったが、この3人にとっては長く感じさせた。そして――

「っ!!」

バツ!!と2人同時に迅移で少年に斬り込む。恐らくだが、今日一番の迅移ではないだろうか?これならそこの刀使や少年でさえも捕らえきれない――

「スウウウ……」

少年が深く深呼吸して動かない。こちらを捕らえてるようには見えない。こちらとは二方向からほぼ同時に少年を狙っている。美炎は少年の腹に峰打ちを、知恵は刀を持っている右手を。

「ヒュウウウ……」

呼吸音が口から漏れる。やはり動く気配は無い。

「(とつたつ!!)」

「(これなら……!)」

「(全集中……水の呼吸——)」

ザバアア——!!

その瞬間、美炎に水流が見えた。見間違えでもなく、本当に水流が一瞬、見えたのだ。

「(参の型——流流舞い)」

ザシユ……!

「(えっ……?)」

目の前にいた少年が見たことの無い流れるような動きで2人の僅かな隙間に入り込

み、波のように2人の体を斬った。

そして、写シを解かれ一気に力が抜けた2人はその場に倒れ込んだ。

倒れた2人を見下ろし、少年は静かに刀を納刀しその場を立ち去ろうとした時、ポケットに入れてた物の感触が無いことに気付く。

見るとポケットが少し斬られており、地面にペンダントが落ちており、蓋が開いていた。

「(あの時か……)」

少年は先ほどの知恵からの攻撃は完全に躲せていた。だが、美炎の方は咄嗟の判断か、それとも執念か、刀の動きを無理やり変え少年の動きについて行こうとした。

そのため、少年のポケットに掠めたのだ。

「……………まだ……………」

「っー！」

すると、美炎が弱々しくあるが、ゆっくりと動こうとしていた。だがやはり、ダメージのせいですぐに倒れてしまった。しかしそれでも無理に立ち上がろうとしていた。

「可奈美に……………話を……………聞くまでは……………」

「もう止めろ。それ以上は体が保たない」

少年が美炎に声をかけると、ピタッと動きを止めた。言うことを聞いたのか、そう

思ったが違う。

「その声って……………」

少年の声には聞き覚えがある。昔と比べると男らしい太い声になっていたが、聞き間違はずが無い。

そしてなにより、落ちていたペンダントの中には一枚の写真が。

それは、幼い頃の自分と知恵の写真。

そして今、少年を見上げるようになってるので、前髪に隠された顔が美炎の目に入る。
それは——

「義勇くん……………」

「つ!!何故…………俺の…………!!」

そこで少年はようやく目の前の刀使の顔にようやく気付いた。

人相を隠すための前髪のせいによく見ていなかったが、彼女の顔は成長しているが、

見間違うはずが無い。

「っ！お前は……………」

すると少年、いや義勇は直ぐさまペンダントを拾い、その場から走り去ってしまった。
「義勇くん……………どうして……………」

その後、美炎と知恵は他の警護の刀使に身柄を拘束されて刀剣類管理局本部へと連れていかれた。

御前試合 決勝戦会場

十・条・姫・和・と・衛・藤・可・奈・美・に・よ・る・折・神・紫・襲・撃・未・遂・か・ら・直・ぐ・、・会・場・内・の・出・入・り・は・全・て・封・鎖・さ・れ・、・誰・1・人・と・し・て・、・会・場・内・か・ら・出・入・り・す・る・事・が・出・来・な・く・な・っ・て・い・た・。

会場内は、先ほどの襲撃未遂の事で話がもちきりとなり、特に平城学館・美濃関学院の生徒たちはザワついていた。

その後すぐ折神紫により、美濃関学院・平城学館の両学長を緊急招集の命が出された。さらに結芽の情報により、両刀使たちの逃亡を協力したとされる身元不明の人物2人の調査も行われた。

会場内全ての監視カメラをチェックし、怪しい2人の動向を探ろうとしたが、おかし

なことに、その2人の姿がどのカメラにも写っていないかったのだ。

現在警備室では、全てのカメラの映像を血眼になる勢いで2人が写っている姿を探している。

さらに4人が簡単に逃亡を許した件についても、警備に不備があったのでは無いか？
と言うことで、警備状況の確認を徹底に行っている。

同時に、他の協力者がいないかスタッフ全員に事情聴取を行っている。

そのスタッフたちは、1つの大部屋に集められており、順番に聴取を待っている。

その中には、部屋の隅の長椅子に座る菊一文字の姿もあった。

そんな彼の隣に、赤みがかかった髪の青年が座る。

「アイツら無事に目標を保護と離脱出来たら嬉しいな」

「監視カメラの仕掛けもバッチリみたいですわね」

他のスタッフには気付かれず、聞こえない程度の小声で話す菊一文字と村正。

「後は刀剣類管理局がどう動くかだな？」

「先ほど平城学館、美濃関学院の学長が緊急招集されました」

「美濃関学院か……なんでそっちの刀使まで逃亡してんだ？」

「さあ、そこまでは……それと、富田さんたちかれ連絡が。会場から出た追っ手はひとまず片付けたと……」

「そこのお二人さん」

そんな2人に、1人のスタッフが声をかけた。

「飲み物でもどうだい？」

そう言いながら、2人にお茶のペットボトルを差し出す。

「おう、助かる」

「ありがとうございます、鶴丸さん」



逃亡グループSide

御前試合会場から抜け出し、姫和を小脇に抱え全力疾走する青年。

それについて行く可奈美は、会場からだいぶ離れた小さな神社の裏手に入った。

「……とりあえず、ここまで来れば良いか」

「はあ……はあ……あ、あの……あなたは……一体——」

「一体何者だ！いきなり人を攫い、小脇に抱えて——」

「うるせえ！だいたいお前があんな事しなきゃ、俺たちがこんな動く必要も無かったん

だよー！」

「私の襲撃を知っていたのか!? ますます分からない! ホントは折神紫のまわし者ではないのかっ!」

「んなわけねえだろうがっ!!」

「だいたい刀使でも無いのに、あの身体能力はなんだ!」

「こつちにもいろいろあんだよ!」

「それといい加減に下ろせっ!! いつまで私を抱えているつもりだ!」

「助けてやった恩人に礼の1つもねえのかよ!」

「貴様のような乱暴者にかける礼など無いっ!!」

「なんだとっ!」

「あの〜……」

「あんっ!!」

下手をすれば表通りにも聞こえそうなくらいの声で喧嘩をする2人。

さすがにマズいと思つた可奈美が声をかけるが、2人の怒りの矛先がこちらに向きそうな勢いだった。

「えつと……と、とりあえず彼女を下ろしてあげて……ください……あと、姫和ちゃんも1回落ち着こう……」

ね?と可奈美に言われ、和泉守は渋々姫和を下ろし、解放された姫和は一度呼吸を整える。

「ところで、なんでお前はついて来たんだ?」

「えっ……なんでって……決着がついてないから……かな?」

確かに、2人の決勝戦は姫和により中断となってしまうた。

「なら、今ここで決着をつけてやろう……」

そう言つて、姫和は御刀へと手を伸ばす。

「ええっ!?無理だよ!あんな凄い迅移使ったばかりで!」

姫和が折神紫相手に使用した迅移。通常のそれとは比べ物にならないくらいのもの。

つまり、霊力の消耗も相当のものになる。

そんな状態では、真面に写シも張れないだろう。

「そうだ、止めとけ十条姫和。今のお前相手なら、一回戦落ちした刀使でも勝てる。断言出来る」

「なら、お前とも1戦交えても構わないが……腰のソレは飾り物では無いだろう?」

そう言つて、和泉守の左腰に差してる刀に目を向ける。

だか**和泉守はその刀には手を伸ばさず**

「悪いが弱い者いじめは主義じゃ無いんでね」

「なんだと……!」

「アワワ……。(。D。 ; ≡ ;。D。)」

和泉守の『弱い者いじめ』と言う言葉に我慢の限界か、今にも御刀を抜きそうな勢いの姫和。

しかしそれを見ても、やはり刀に触れもしない和泉守を見て、姫和の堪忍袋の緒が切れそうだった。

一触即発の雰囲気にあタフタする可奈美。

「落ち着いて、2人とも」

そんな雰囲気、透き通るようで、同時に強い氣を感じさせる声。

その持ち主は、可奈美が御前試合会場で出会ったあの青年、セイバーであった。

「あなたは……」

「なんだ貴様は、貴様もコイツの仲間か……」

「その通りだよ、十条姫和さん。そして、僕らは敵では無い」

ギリッと睨みつける姫和に憶せず、真っ直ぐ彼女の前に立つセイバー。

「それを聞いて、はいそうですかと信じるほど、私は馬鹿では無い……」

「いやいや、あんな無謀なことをしておいて何言ってるんだ……」

「和泉守は黙ってて」

ハア……とため息をつくセイバー。確かに和泉守の言うことは間違つては無い。

だが今は彼女を刺激する必要は無い。

「こちらもすぐに信じてくるとは思つてはいない。なら、これで如何かな……『二十年前の大災厄』、『大荒魂』、『終 籒』」

「っ!?……何故、それを……」

「詳しくは言えないが、僕らはある組織に所属している。その指示で君の保護と、大荒魂討伐の命を受けている。君に危害を加えることは絶対しない。約束する……」

「これは、私の問題だ……私の使命だ……邪魔をするな……」

「先ほどのあの体たらくで何が出来る? 君1人で何とかなるなら僕らは最初つからこんな事はしない。だが、事は君1人でどうにか出来る問題では無い。それは君が一番よく分かっているはずだ」

こうハッキリ言われてしまい、姫和は黙つてしまう。

そしてセイバーは、可奈美の方へと振り向き

「衛藤可奈美さんだったね。君は大人しく帰りなさい。十条さんの言う通り、流石に君は無関係だ。これ以上関わることは君の為にならない」

「で、でも……」

確かにセイバーの言う通り、自分は何の関係も無い。

だが、 فقط ——

「やっぱりほつとけないよ！関係あるか無いかなんて、それこそ関係無いよ！目の前で困ってる人がいたら助ける、私のこの選択は決して、間違つて無いよ！」

「っ!!」

選択は間違つて無い、可奈美のその言葉はセイバーの記憶にある瞬間が蘇る。

『多くの人々が笑っていました。ならばきつと、間違いでは無いと思います』

そして彼女は剣を抜き、彼女は英雄となった。

「……………」

「えつと……………?」

「なんだ……………」

「どうした、セイバー?」

頭痛でもしたのか、突如頭を押さえるセイバー。

そんな今まで見たこと無い彼の様子に、和泉守も心配になるが、すぐに

「……ホントに……この年頃の少女は……」

「えっ？」

「この先どうなるか、分かってるのかい？」

「うん……大変なことになるだろうし……いろんな人に迷惑をかけちゃうかもだけど、私は姫和ちゃんとおなた達と一緒にいきます」

そう言う彼女の真っ直ぐな目を見るセイバー。

その覚悟を決めた目をセイバーはよく知っている。

それは彼がよく知る少女も、似たような目をしていたから。

「……………和泉守、彼女も連れて行こう」

「っ!?!本気かセイバー!?!」

「ああ、責任は僕が持つ」

そう言い切るセイバーを見て、和泉守は諦めることにした。こうなってしまうえば、セイバーはここで動かない、そう言う性格だと知ってるから。

「ハア……俺もたいがいだが……お前も相当頑固だよな？」

「ありがとう、和泉守」

ウ………ウ………

「っ!?!」

そこにパトカーのサイレンが4人の耳に入る。

まだ遠いが、このままジツツとしてる場合では無い。

「さあ、移動しようか——」

「待て……その前に、お前たちの本当の目的はなんだ？」

この際、彼らと行動を共にするのは仕方ない。だが、姫和にはコレだけは分からなかった。

彼らの本当の目的。折神紫の手のものとは思えない。

だが、それであつさり信用する事は出来なかつた。

「……先ほども言ったが、君と同じ大荒魂の討伐。そして、世界を護ること。それだけ」

「世界を……護る……？」

確かに大荒魂は世界を滅ぼしかねない存在。それは分かるが、それ以外の何かを感じさせる。

「衛藤さん、とりあえず君の同行は許します。ただし、こちらは十条姫和さんの身の安全を優先するので——」

「うん、もしもの時は私を見捨てても構わないよ」

「よし……十条さん、この神社に隠したものの回収を」

「っ!?知ってたのか……」

「申し訳ないが、君の昨日の動向は監視させて貰いました」

すまないと頭を下げられ、姫和も仕方ないと追及はしなかった。

そしてセイバーたちが周囲を警戒している間に、姫和神社の床下に隠していた巾着袋を回収した。

その巾着袋には、財布と非常食、一通の手紙が。

「(アイツらはこの手紙のことも知っているのだろうか……?)」

「あっ!そういうえば私、荷物置いて来ちゃった!」

「残念だが諦めろ。刀剣類管理局から支給された携帯だったら、GPSで居場所がバレるからな」

「うー、舞衣ちゃんのクツキー……(TOT)」

「それで、これからどうする気だ?」

姫和がそう尋ねると、セイバーは黙って、裏手に止まっているトラックに指を指す。
「ちよつと荷台に乗せて貰うよ」



刀剣類管理局 本部

現在、折神紫襲撃未遂事件の調査のために、『十条姫和』、『衛藤可奈美』の関係者全員に事情聴取を行っているが、特に進展は無かった。

全員が何故彼女たちがあんな事をしたのか、まるで分からなかった。

試合前日、当日共に変化無し。折神紫との関係性は全く見つからず、協力者の正体も未だ掴めず。

親衛隊第一席の真希は慙愧の念にとらわれていた。

やはりあの時、命令を無視してでも、彼女たちのあとを追うべきだった。

「(そうすれば今ごろ——)」

「恐い顔をしていますわよ」

舞衣の事情聴取を他に任せ、取調室を出た真希に、同じく取り調べを終えた寿々花が待っていた。

「柳瀬舞衣は何も知らないようだ」

「平城の岩倉さんも同じでしたわ」

「安桜美炎と瀬戸内知恵は？」

「兩名とも、『自分たちは衛藤可奈美に話を聞こうとしただけだ』と主張してばかり……」

本部の医務室で治療を受けてる美炎と知恵は、そのまま取り調べを受けている。しかしそうなると、やはり手がかりはゼロ。紫に申し訳なくなる。

彼女に御刀を抜かせてしまった。本来ならそれは親衛隊である自分たちの役目。

これでは何の為の親衛隊か……

「しかし何故紫様はお止めしたんだ……あのまま追つていれば……」

「何かお考えがお有りなのでしよう。紫様のなすことは、後々理由が必ず分かりますわ」
髪をイジリながら、ひょうひょうとしてゐる寿々花。

だが彼女だつて一刻も早く下手人を捕らえたいのだ。

「ところで今回の一件、例の組織が関わつてると思えます?」

「舞草か……」

『舞草』、度々刀剣類管理局のコンピューターにハッキング行為をしたり、管理局や折神家の事をコソコソ嗅ぎ回つてゐる謎の組織。

未確認であるが、刀使も所属しているとか

「それも分からない……だが個人的には舞草の仕業とは思えない」

「理由をお尋ねしても?」

「今までのやり方と違いすぎる。派手な事は避けるヤツらの犯行とは思えない」

「では、謎の協力者については?会場中の監視カメラにほとんど手がかりが残つて無い

ところを見ると、ハッキングして監視カメラに細工したしたのではありませんか？」

「……それが一番分らない。ハッキングされた形跡は無かった。だが監視カメラの方には妙な機械が取り付けられているのが分かった」

それを調べている途中だが、どうやらカメラにダミー映像を流し続ける機械らしい。

それだけでは無い。なんと会場の外で警備にあたっていた刀使や警官たちと一時連絡が取れなかった。

どうやら何者かが妨害電波を発していたらしい。

舞草の手の者の仕業か？と思ったが向こうはこちらの警備状況を知っていたかのようになり抜けている。

こちらだって警戒してなかった訳で無いのに、手際が良すぎる。

衛藤可奈美と十条姫和の事もそうだが、協力者の情報が全く掴めない。

まるで形が無い存在を追っているように思える。

「そんな手詰まりの真希さんに1つご報告がありますわ」

「なんだ、その様子だと今回の事とは別のようだが？」

「それはですね——」

「お疲れさまです、真希さん」

ヒョコツと、曲がり角から姿を現したのは、御前試合スタッフ用の制服ではなく、ラ

フな私服を着た少年。

朝、彼女たち親衛隊に差し入れを作ってくれた張本人。

「菊一!?! どうしてここに?」

アワワ! と慌てて身だしなみを整える真希。

そんな様子をクスクスと嗤う寿々花と菊一。

「僕みたいなバイトなんかの人たちは御前試合会場の一室で取り調べられてましてね」

「ああ、それは知ってるが……もしかして差し入れてくれたランチボックスの回収に来たのか?」

それなら、完食した後に夜見が返却に行ったはずだが

「いえ、あんな事がありましたからね。皆さん夕食を真面に取らないかと思ひましてね」

「うぐつ!」

「やっぱり……それで簡単ではありませんが用意させて貰ったんです。冷めても美味しく頂けるものを選んでんだんで」

そう言つて、菊一は真希に新しいランチボックスを手渡した。

「管理局の受付に『親衛隊の皆さんお届け物です』つて言つたら、寿々花さんが出迎えてくれたんですよ」

それを聞いて、ジロツと寿々花を一瞬睨みつける。自分だけズルいと。

「私はちようど取り調べが終わったところだったので」

「夜見さんと結芽は？」

「今は紫様のお側にいると思う」

「なるほど……とところで捜査は進んでいるのですか？折神紫様を襲おうとしたあの子たち……」

「すまない……幾ら君にでも詳しくは言えないんだ。けど、芳しくないと言っておくよ」
「そうですか……では、そろそろ僕はお暇します」

「あら、まだいらしても構いませんわよ？」

むしろもつと一緒に居たいと思ってるが、真希の手前、下手な事は言えない寿々花。

「すいません、これから別の仕事で……」

「またバイトか？君はホントに働き者だな？」

「真希さんたちもそうでしょう？……では、また」

「ああ、またな菊一」

「ご機嫌よう、菊一さん」

そして菊一はその場を後にし、来た道に戻って管理局を出た。

管理局の門をくぐる前に、4人がいる方を向き

「次に会うときは敵同士、か……恨まれても、文句は言えないな……けど、やらなきや

ならないんだ……」

「と悲しそうに呟き、自身の任務へと戻った菊一こと、公安零課の菊一文字宗則。」

逃避行と調査任務

逃亡組 s i d e

ブーン……

何事もなく街中を走り抜けるトラック。

まだチラホラだが、刀使や警官、パトカーが何台かその近くを走ったり、目の前に近付いて来たりするが、誰も荷台には目もくれなかった。

その中に居るとも知らずに。

現在可奈美たちは、セイバー曰くヒッチハイクしたトラックの荷台の中に入り込み、身を潜めている。

そしてトラックは高速道路へと入って行った。

「ふう〜……上手くいったね」

「ああ、無事に高速に入ったようだな」

「まずは一安心……だな、セイバー？」

「まずは、だけどね。このまま無事に都内に行ければ良いけど……」

そう言つて、こつそり荷台から外の様子を確かめるセイバー。

「そうだ！ 忘れるところだった……」

そう言つて和泉守は自分の後ろにある段ボールを開け、中を物色する。

「おい！ 勝手に他人の荷物を——」

「大丈夫大丈夫、問題ねえよ。ほら」

そして和泉守は可奈美と姫和に女物の私服と大きなギターケースを渡した。

「（予備の分入れておいて良かった……）制服だと目立つからな、それにでも着替えろ。安心しろ、外を見るからその間にサクツとやつてくれ。御刀はそのケースの中にも隠してくれ」

そう言つて和泉守はバレないように荷台から外の様子を見ていた。

セイバーも2人の方に向かないよう、スマホのような物に何かを打ち込んでいる。

それを確認してから2人は一応段ボールで壁をつくり、用意された服へと着替えた。

「（さて……）」

着替えながらも姫和はセイバーたちを警戒しながら、巾着袋の中を確認する。

こんな時のために用意しておいた普通のスマホに、非常食の乾パン、数万ほどのお金。

そして

「あれ、ソレってアナログのスペクトラル計?」

可奈美が姫和の荷物から、方位磁石のようなものを見つける。

『スペクトラル計』とは、荒魂を探知するアナログ計器。約5センチ程の強化ガラス球の中に、スポイト数滴分の荒魂化したノロが入った方位磁石のような形をしている。荒魂が引き合う性質を利用して、接近すると振動するようになってる。

現在は刀剣類管理局から支給される『スペクトラムファインダー』が使われてる。スペクトラム計を近代技術によりデジタル化したプログラムで、実物の荒魂を用いたスペクトラム計は危険ということで開発されたのだ。

そしてノロは折神家の元に全て回収されているそうだが……

「これって、誰の?もしかして、姫和ちゃんのお母さんも刀使だったの?」

「も?」

「うん。私のお母さんも刀使だったんだ。凄く強かったんだって……それでね、美濃関の学園長と同級生だったんだよ!」

「……名前は……」

「えっ?お母さんの?」

「いや……お前の……」

「え〜!? 酷いよ姫和ちゃん! 私の名前知らなかったの!」(TOT)

「十条、確かにそれは酷いぞ。ソイツは『衛藤可奈美』だ。それと衛藤、少しは静かにしろよ」

段ボールの壁の向こうから和泉守に注意され、可奈美はしぶしぶ黙ることにした。

そんな彼女たちの様子を見て、クスリと笑うセイバー。すると、手元の通信機から声が。

『ずいぶん楽しそうですね、セイバー殿』

「おっと、運転中に騒がしくしてすまない蜻蛉切」

『いえいえ、自分もこういう賑やかなのは好きなので』

通信相手は現在セイバーたちが乗っているトラックの運転手、公安零課の蜻蛉切である。

そもそもこのトラックや可奈美たちの服は零課が検問所が構築される前の足と、保護した十条姫和(十可奈美)に着替えさせるためにあらかじめ用意していたものなのだ(もちろん彼女たちは知らない)。

『ところで、この後はこのまま本丸へとお二人を送りますか?』

「いや、本丸へは最後の手段。今は折神紫や舞草、時間遡行軍がどんな動きをしてくるかわからない状況で、本丸の所在を明かされたくない」

『ではしばらくは……』

「少しばかり、様子見の逃避行かな……大丈夫、そう簡単に捕まるつもりは無いよ」
『もちろんです。そのために我らもいるのですから!』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

刀剣類管理局本部 ヘリポート

折神紫襲撃から数時間後、美濃関・平城の両学長がそれぞれ到着した。

この2人もそうだが、現任箇伝の学長たちは刀使の頃からの知り合いなのだ。

そのためヘリポートで顔を合わせた学長たちは再会に少し喜んだ。

そこに親衛隊の真希と寿々花が2人を出迎えた。

「お忙しいところ、ご足労いただきありがとうございます。紫様がお待ちです。どうぞ
……」

「獅童さん、その前に少しいいかしら?」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

本部 管理局局長用執務室

美濃関・平城の両学長が到着する少し前、紫はとある人物からの電話を受けていた。

この非常時に緊急以外は受けないが、紫への直通回線からの連絡だったので、安易に無視は出来なかった。

そして、その内容は――

「なるほどな……御前試合当日にわざわざ直通の回線で上申と言うから何かと思えばこういう事だったか……」

『はい、局長。もう10年以上も懸案事項になっている『赤羽刀』関連の件につきましては、調査本部設置と調査部隊の編成許可をいただきたく思いました』

『赤羽刀』とは荒魂が落とす事がある錆びた御刀。現状、御刀を新たに製造する事はできないため、この赤羽刀を再生する形で製造されている、と表上ではそういうことになっている。

だが――

『赤羽刀の存在については情報不足で足踏みを続け、我々人類は長らく後手に回り続けてきましたが、そろそろ片をつける時期かと……』

「人類が、後手に回り続けるか、面白いことを言うな『長船学長』。お前たち伍箇伝の見解は『自然現象』、だと意見を合わせていなかったか？」

『……………』

「その物言いだとまるで、誰かの手が介入しているような物言いだぞ、長船学長」

『……………その可能性も考慮している、と言うことだとお考え下さい。ただ海に沈んだ御刀を核としてノロが集まり、その結果荒魂が発生する。メカニズムとしては妥当に見えます。ですがその実、御刀が錆びる理由も、赤羽刀の荒魂が広範に発生する理由も、現象をつなぐ過程に明確な説明が出来ておりません』

御刀は通常の刀、金属では無い。海に沈むくらいで錆びるようなものでは無い。

確かにただある。その事を受け入れるのが人類が発展してきた科学の形。

しかしそれだけでは、対処療法以上の対策をとることや、終わらせることは、出来ない。

「なるほどな……………終わらせるか……………いいだろう、この件はそちらに一任する。良い報告を期待する」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

綾小路武芸学舎 学長執務室

美濃関・平城の両学長が本部に到着した頃、綾小路武芸学舎の学長『相楽 結月』長

船学長の真庭まにわ 紗南さなから折神紫との事を話していた。

「なるほど、それで伍箇伝の混成部隊を編成したいと……もつともらしい理由をつけてはいるが、本音は別にありそうだな、真庭学長？」

『と、言いますと……？』

「例えば……今、このタイミングでならなければならない理由でもあるとかかな？」

電話越しではあるが、この人の勘の鋭さは相変わらずだな……と思う真庭学長。相楽学長は刀使の頃から、折神紫がもつとも信頼し、敵に回したくないと言わせた人物。

『小烏丸と千鳥の使い手と謎の人物たちによる局長襲撃の件、ですか？そんなまさか……ただの偶然ですよ、結月先輩』

「……まあ、そういうことにしてやるよ、紗南。ともあれ、我が校からも刀使を派遣する。それから鎌府学長には私からそれとなく話しておこう。〃局長のお役に立てる〃、そういうえば彼女は何も言わない。寧ろ自分から首を突っ込んで来るはずだ」

『それは助かります。私から提案すれば『何故貴様如きが紫様の言葉を代弁するか！』って言ってくるのが目に見えてますから……』

確かにその光景は容易に想像出来てしまい、少し笑ってしまいそうになってしまいう相楽学長。

まあ自分から言っただとしても同じ反応をするだろうが、真庭学長から切り出されるよ

リマシになるだろうと考える。

「それで、美濃関と平城の学長には？」

現在2人は例の件で先ほど鎌倉に着いたと連絡がきた。

『私もまたは鎌倉にいるのでこちらから声をかけておきます。久々に2人の声を聞きたいと言うのもありますし』

それでは、と真庭学長が通話を切ろうとする前に相楽学長は止めた。

「その前に1つ聞きたい」

『はい』

「例の襲撃だが……協力者と思われる謎の存在についてだが……」

『未だに情報が全く無いと聞いています』

「率直に聞く。何者だと思う？」

『……私見ですが、伍箇伝や刀剣類管理局、ましてや舞草でもない、全く別の組織ではないかと思えます』

「その根拠は？」

『根拠はありません。ですが、工作の手際の良さ、行動の速さ、正体を全く掴ませないところから、舞草とは考えにくい……伍箇伝や刀剣類管理局内の反折神紫派にしては手際が良すぎる。そう考えると私たちが知らない全く別の組織が関与しているように思え

て……』

「そうだな……そして、その頭に誰がいるかでそれだけはイメージ出来るようには感じないか？」

『っ！では相楽学長も……』

「私も確証も証拠も無いがな……だが、そう感じられずはいられない……」

『ですよね……』

「ともかく、調査隊に送る人材は確保しておく。そちらも頼んだぞ」

『はい、では……』

そして、ガチャリと受話器を置き、椅子の背もたれに体を預ける。

「本当に貴方が関与しているのか……十条さん……」

15分後……

コンコン…

「綾小路武芸学舎、高等部2年……木寅ミルヤです」

「入れ」

失礼します、と入って来たのは銀髪で眼鏡をかけた女生徒。『木寅 ミルヤ』、綾小

路の特別祭祀機動隊長である。

「よく来たなミルヤ。用件は先ほど伝えたように、赤羽刀に関する調査。これに参加するため、すぐに鎌倉へ向かってほしい。現在の任を離れ、しばらくは学長直属となるが問題ないな?」

「はい、問題ありません」

「それと、君には調査任務以外でやってもらいたいことが2つある」

「なんででしょうか」

「まず1つ。刀剣類管理局、舞草以外に例の襲撃事件に関与している、動いている謎の組織について調べてほしい。これは、あくまで私個人がそう考えているだけだ。優先順位はそこまで高くない」

「分かりました。もう1つは?」

「ある御刀を探し、見つけて持ち帰ること。その御刀の銘は『南无薬師瑠璃光如来景光』」

それは、遙か昔に失われたはずの一振りである。



逃亡組 side

「ねえねえ、今どこかな？」

「高速をおりて、都内に入ったと思うが……」

鎌倉を脱出して数時間、トラック内で揺られてからずいぶん経つ。和泉守の許可をとり、少し外の様子を見る姫和と可奈美。

外はすっかり夕日の光でオレンジ色に染まりつつある。だが遠くには、巨大なタワーが見える。

そのタワーにあたる陽光から方角を推理すると、東京の東辺りだと思われる。

「それで、どこまで行くつもりだ？」

「まあ、待てよ。そろそろ……」

キキイ……

トラックが裏道の、道路脇へと止まった。そこで4人は荷台から降りた。

そしてセイバーは、姫和たちに怪しまれないように運転席の方へと向かう。

「じゃあ僕らは、このまま『隠れ家』に向かう。蜻蛉切は鎌倉に戻って主からの指示を待ってくれ」

「承知しました、お気をつけて」

そして、トラックは大通りへと向かい、セイバーたちの視界から消えた。

そこに可奈美がセイバーの元へと行き

「あの、えつと……セイバーさん？」

「『セイバー』でいいよ、衛藤さん」

「えつと、じゃあセイバー。和泉守さんが早く来いって……」

可奈美が指差す方向で、和泉守と姫和がまだかと言うような顔をしていた。

「おつと、運転手にお礼していて気付かなかった。ありがとう、衛藤さん」

「そんな、お礼なんて！ 寧ろ私の同行を許可してくれて……」

「それは君の覚悟を摘み取っただけ……さあ、せつかちさんたちの元に行こうか」

そして、セイバーの後ろを付いて、和泉守たちの元へ向かう可奈美。彼の背中を見ながら、可奈美は既視感を感じた。

「（なんだろう……やっぱり私、セイバーと前にどこかで……）」

それから一行は、出来るだけ一目を避けて、尚且つ目立たないように、セイバーたちが言う『隠れ家』へと向かった。

「（イイ）が……」

「『隠れ家』、か……」

一行が辿り着いたのは、何の変哲も無い、ただの小さな旅館。しかも古b……長い歴史を思わせるような雰囲気がある。

「そう。見た目はあれだけど……とにかく入ろうか」

「安心しろ。確かに見た目はあれだが、温泉はあるし、メシも美味いからな！」

セイバーと和泉守に言われ、仕方なく入る可奈美と姫和。

中に入ると、外とは違い内部は綺麗で、今風に合わせてあった。

可奈美たちが内部に見渡している間に、セイバーはフロントへと向かった。

受付には30ほどの男性が出迎えた。

「いらつしやいませ」

「『影の間』を予約していた『公零』^{こうれい}です」

そう言つてセイバーは懐からこつそり公安のバッチを受付に見せる。

それを確認した受付はニコリと笑い

「お待ちしておりました、公零様。お部屋までご案内させていただきます」

「あ、その前に。実は急ではありませんが、1人家族が増えまして……」

そう言つて、セイバーは可奈美の方へと視線を向ける。

「申し訳ありませんが……」

「はい、旦那様から話は聞いております。その準備は出来ております」

「感謝します」

「では、こちらへ……」

そして一行は受付の男性に案内され、部屋へと向かった。

部屋に着いた一行はようやく肩の荷が下りたのか、床へと座る。だが、姫和は警戒を解かず、部屋内を確認する。

セイバーたちに用意された部屋は5人家族用の広い部屋。

中央にテレビや大きな机が置かれた居間、隣に布団を敷くための部屋と押し入れ、出入り口近くにトイレとシャワールーム。部屋は和式だが出入り口はカードロック式。

全ての部屋を見て回ったが、特に不振な点は見られない。

「そうカリカリすんなよ、十条。小ジワが増えるぞ?」

「余計なお世話だ……」

一応出入り口に近い場所に座る姫和。やはりまだこちらを信用してはいないようだ。

まあそれは仕方がないが。

「さて、夕食は19時頃にこの部屋に運んで貰う。シャワールームはあるが、温泉は21時まで」

温泉っ！と可奈美は食いつくが、姫和にもしもの時に動けないからシャワーだ、と言われ渋々諦めることにした。

「それで、これからどうするつもりだ？」

「うん、まずは管理局の動きを見る。下手にあちこち逃げ回るより、落ち着いて、慎重に動こう」

「ずいぶん悠長な事を言うな」

「十条さんの言いたいことも分かる。だが、下手に動いて先回りされるより、行動を控えて気配を消せば、向こうだって見つけにくいだろう」

「……………」

セイバーの言うことは一理ある。だが使命がある以上、そうのんびりとしてはいられないが、今ここで彼らと別れるのは得策では無い。

「(ならばやはり、ここは大人しくコイツらに従うしかないか……)」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

管理局本部 医務室

可奈美たちを追っていたが、謎の人物によって阻止され管理局に連行された美炎と知

恵。

現在2人は謎の人物との戦闘による負傷の手当を受けながら、取り調べを受けていた。

知恵は美炎を止めるべく、会場を出た。

美炎は衛藤可奈美に事情を聞こうとしただけで証言したが、向こうは半信半疑だった。

謎の人物については、2人は共に知らないと答えた。

治療と取り調べがある程度終わり、医務室に残された2人。

念のため、部屋のドアの外には見張りの刀使がついている。医務室は1階だが、もちろん外は警備がいる。

部屋に残された2人は黙って、時が流れるのを感じる。

本当なら今すぐにでも、可奈美を追いかけたい。彼に会いたい。だが、そんなことをすれば、余計に自分の周りの人たちに迷惑をかける。そう考えると、体が動きそうになかった。

すると、チラッと部屋にある医療機器が目に入る。

メーカーを見ると、『富田カンパニー』とあった。

「義勇くんの家のだね……」

「そうね……」

それは、幼馴染みの実家のものだった。

『富田カンパニー』は医療機器の開発・販売で世界トップクラスに入る企業だ。

特に力を入れているのは、技手や義足の開発。

任務で手足を失った刀使たちに今後生活に支障をきたさぬよう、研究と開発を行い、刀使たちにデータを送る事を条件に、半額に近い値段で提供している。

「元氣、そうだったね……」

「そうね……」

「……………」

会話はあつという間に終わり、再び静寂が訪れる。

数分後、コンコンとノック音がし、1人の女性が入って来た。

「羽島、学長……?」

医務室に入って来た美濃関学長の羽島学長は険しい表情をしていた。

「あの、ご無沙汰しています羽島学長。私がついていながら美炎さんを……申し訳ありません」

元美濃関に在籍していた知恵がかつての学長に頭を下げる。すると羽島学長はふうく

……と一息つき

「……安桜さん、瀬戸内さん。まさか親衛隊直轄の刀使たちに御刀を向けるなんて……衛藤さん並にとんでもないことをしてくれたわね」

それを言われ、うつ……と美炎はガクツと項垂れる。

「衛藤さんたちがしたことは、もちろん大問題よ。けれどあなたたちがしたことも立派な反逆罪。本当なら御刀を取り上げらるだけじゃすまないわ」

「い、い、い、い、い……」

やっぱり少なくとも、御刀は没収される。そう覚悟する美炎。本来なら——

「あの羽島学長、うちの……長船の学長はなんど？」

「瀬戸内さん。紗南からあなたのことを頼まれているわ。だから今は、私の指示に従って下さい。でも、その前に——」

そう言って羽島学長は、2人の正面に立ち、目線を2人に合わせると

「これだけは正直に答えて。警護の刀使たちとあなたたちが出くわした人物に心当たりは？」

「……………」

「……………」

まっすぐ2人の目を見つめる羽島学長。

それに答えるように、2人も目線を外さず、彼女に口を開く。

「いえ、ありません」

「私も分かりません」

それだけ答えると、羽島学長はまた少しの間、2人の目を見つめると、またふうくと一息つき、立ち上がる。

「分かりました。では2人に辞令です。これから結成する『赤羽刀調査隊』の一員として、『安桜美炎』、『瀬戸内知恵』の両名を徴用します」

「はいっ！」

「あ、は、はい！……って、赤羽刀調査隊……？赤羽刀って確か……荒魂を斬った時にたまに出てくる、あの錆びた御刀ですか……？」

「そうよ美炎ちゃん。終戦直後にアメリカが日本から御刀を持ち出そうとしたの。その数は明確には分からないけど、5千〜1万とも言われているわ——」

しかしその途中、輸送船内部に侵入していた、未だにアメリカを恨む数名の日本海軍の人たちによって沈没。御刀は海底に散逸した。

当時は終戦直後ともあり、引き上げることが出来なかった。更に当時の海軍を含む日本軍は戦争を責任や裁判をかけられた。

そして日本復興に力を入れていたため、誰も御刀引き上げのことを後回しにした。

「——だけど近年、何故か倒滅した荒魂の体内から錆びた御刀、赤羽刀が出てくることがあるの。そうですね、羽島学長」

「さすがちい姉！物知りだな」

「あの、美炎ちゃん……一応授業で習うはずよ……？」

「安桜さん、実技だがじゃなくて学科もちやんと受けて下さいね？」

「す、すいません……」

「さておき、近年に関東を中心に荒魂の発生件数が増加しているのは知ってるわね？」

コクリと頷く、美炎と知恵。

「一部では、赤羽刀が原因ではないかと言われているわ。それで今回、伍箇伝が協力して学長直轄の特殊調査隊という形で、赤羽刀の調査隊を編成することになった……と言うわけ」

2人の罪を問われないためには、これに参加して貰うしかないのだ。

つまり2人に拒否権はほとんど無い。

「はい！」

「分かりました！……ところで羽島学長、そっちの子は誰ですか？」

美炎が、ドアの外側からチラチラと中を覗いている人物の方へと顔を向ける。

すると、ビクッ！と隠れてしまう。

「ああ、ごめんなさい、すっかり忘れていたわ。ほら、こっちにいらっしやい……」

羽島学長が手招きすると、シヨートカットで、ハチマチを頭に巻く平城学館の刀使がおそるおそる入って来た。

「こちらは平城学館の『六角^{むすみ} 清香^{きよか}』さん。平城学館の五條学長が調査隊に推薦した刀使の子よ」

「あ、あの……よ、よろしく……お願いします」

恥ずかしそうに、顔を俯きながら2人にペコリと頭を下げる清香。

「ちい姉……この子……なんか影が薄いつ!?ていうか、声が小さいっ!!」

「ダメよ美炎ちゃん!心で思っても口に出しちゃ!初対面の相手に失礼でしょ!たとえホントのことでも!」

「いや、ちい姉もたいがい酷いよ……てか、なんで通じ合ってるの!?!」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

本部 局長用執務室

「失礼します。遅くなり大変申し訳ありません、局長」

「構わない、座れ」

調査隊です件を話した後、羽島学長は直ぐさま紫のいる執務室へと向かった。

執務室では既に五條学長と紫が応対用のソファに座っていた。

「このたびは、我が美濃関の学生たちがご迷惑をおかけしまして、大変申し訳ありません」

「定型な謝罪は不要だ。衛藤可奈美のことはともかく、安桜美炎に関しては実際に私に刃を向けたわけじゃ無い」

さつそく紫は両学長に可奈美と姫和の潜伏先に心当たりは無いか聞くが、2人は首を横にふる。

「あの……うちの『柳瀬舞衣』は……?」

「柳瀬舞衣と岩倉早苗の両名は、今回の件とは無関係と判断し、拘束を解きました」

もう1人の両校代表の刀使たちや、他の代表生たちも取り調べを終え、各自別室にて待機をして貰っている。

「では質問を変える。平城学館学長、御刀『小烏丸』は現在適合者無しと管理局に届けていなかったか?」

「報告が遅れて申し訳ありません。代表決定戦前に、小烏丸があの子を選びました」

「小烏丸って……」

「『千鳥』は美濃関の衛藤可奈美……『小烏丸』は平城の十条姫和を適合者に選んだ……」

なんとも複雑な運命だな」

「そう、ですね……」

「それともう一つ、今回の件で協力者と思われる人物たちに心当たりは？」

「申し訳ありません。それもまったく……」

「うちもさっぱり……」

やはりか…、これ以上この2人に問い詰めても時間の無駄と考える紫。その後、両学長に2人に関する情報提供と、捜索の協力を命じた。



逃亡組 side

旅館の部屋で、今後の逃亡に必要な物を揃えて来ると言い、和泉守が部屋を出た後、可奈美はバツと手を上げる。

「あの……！ 私もちよつと外に出てもいいですか！」

「何を言ってる！ もし誰かにバレたらどうするんだ！」

姫和が直ぐさま咎めるが、セイバーがそれを止める。

「どいんこっ」

「えっと……ちよつと電話を……」

「……1階フロアの東側に、公衆電話が数台ある。それを使うといい」

「ありがとう！」

そして可奈美に幾らか小銭を渡すと、彼女は直ぐに部屋を出てセイバーの言われた場合へと向かった。

「おい、良いのか!?もしアイツが管理局に——」

「大丈夫、彼女はそんなことはしない。それに、たとえここが管理局にバレても直ぐ分かる」

セイバーに言われた通り、1階フロアの東側に行くと、数台公衆電話が一部屋ずつ並んであった。

その1つに入った可奈美は、舞衣の携帯の番号へと電話をかけた。

彼女は呼び出して直ぐに出た。

『もしもし……』

「もしもし、舞衣ちゃん？」

『かな……!可奈美ちゃんなの……?今どこに?』

「えっと……ごめん、それは言えない……いろいろ迷惑かけてゴメンね?私はとりあえ

「大丈夫だから……」

『大丈夫って……』

「ああ！小銭がそろそろ切れそう！えっと、悪いけど、私の荷物預かっというて！それじゃ！」

『待って、可奈——』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

管理局本部 入り口前

「もしもし？……もしもし可奈美ちゃん？」

「幾らか呼びかけても、切れてしまった通話先からは、もう親友の声は聞こえなかった。けど、それで諦めるような舞衣では無かった。直ぐに、柳瀬家に仕える執事に連絡をとった。」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

管理局本部近く 喫茶店

「では予定通りに、セイバーたちは『隠れ家』に着いたのだな？」

喫茶店の奥の席、5人の青年と少年たちが集まっていた。

机にはそれぞれ飲み物と、中央にはタブレット型の通信機器がある。

画面は三つに分かれており、1つはセイバーたちを都内まで送った蜻蛉切が。

1つは現在管理局内に潜伏している村正、鶴丸たちが。

最後に、彼らの主である審神者の顔が映っていた。

『はい、現在自分は鎌倉へと戻っている最中でありませう』

『そうか、ご苦労さま。道中気を付けて、蜻蛉切。鶴丸たちはどうかな？』

すると、画面は村正・鶴丸たちの方に移り

『おう、ついさつき、美濃関・平城両学長に捜索を協力するよう命令が出たぜ』

『ようやく本格的に動きそうになるな……鎌府の方もそろそろ動きを見せるだろう』

『そうか……こちらの素性については？』

それについては、こちらにいる菊一文字が一番に答えた。

「未だに情報が全く掴めていないようです。親衛隊の見解では、舞草では無いと思っ
ているようですが、こちらには一切気付いていません」

『一文字の言う通りだ、管理局でも、組織かそうでないかで少し揉めてるところもあるぞ』

『なるほど……ありがとう、3人とも』

『それともう一つ、長船の学長の進言で、伍箇伝協力の下、赤羽刀の調査隊が編成されるらしいぞっ。』

村正からの情報に、飲み物のストローを弄んでいた善逸が口を挟む。

「はあく、赤羽刀の？なんでこの時期に？」

「黄瀬よ、落ち着け」

「そうだと、黄瀬。それに大きな声を出すと、他のお客さんに失礼だぞ！」

「『炎定が一番うるさい』」

「よもや!?!」

『えつと……村正の言う通り、現在美濃関と長船、平城から刀使が集まっているようにだぜ、主』

『編成メンバーは分かるか？』

ちよつと待てよ……と村正が懐から手帳を出し、分かっている刀使の名前をあげている。

『鎌府の方はまだだが……えつと……綾小路からは、『木寅ミルヤ』が。美濃関学院からは『安桜美炎』、長船女学院は『瀬戸内知恵』、平城学館から『六角清香』が選ばれてるな。伍箇伝それぞれから刀使を徵用しているようだ』

『六角清香』の名前が出た時、杏寿郎がよもや!と驚く。

「おや、知り合いかな、炎定よ?」

「ああ、三日月よ。彼女とは俺が中学時代に通っていた道場の後輩でな……そうか、刀使になつていたか……」

それと、メンバーの名前に反応したのは彼だけでは無い。美炎、知恵の名前が出た時、ピクリと義勇が僅かに反応した。

だが、それに気付いたのは審神者と三日月だけ。

『……富田は、安桜美炎と瀬戸内知恵のことを知っているのか?』

「なにっ!? お前も刀使に知り合いがいるのか!?! ズルいぞ!!」

『おい黄瀬、ツッコむところが違うだろう……』

ムキー!と悔しがる善逸に呆れる村正。その間も義勇は何も喋らなかつた。

『そう言えば、衛藤可奈美を追つて、美濃関の刀使が追いかけたそうだけど……富田、まさか顔を見られたりは……』

『……』

『そして、それが安桜美炎だったのかな?』

『……』

やはり何も答えない義勇。

画面の中や外から義勇に鋭い視線が向けられる。

『…………まあもし顔を見られたら、管理局に動きがあるはず。無いのなら、顔を見られてないだろう』

審神者がそう言うのと、心の中でホツとする義勇。だが

『けど、もしもの可能性がある。富田義勇、炎定杏寿郎、黄瀬善逸、三日月宗近。君たちに新たな指令を出す。赤羽刀調査隊の動向を監視し、我々の任務の障害になるようなら……コレを排除せよ』

「っ!!」

「承知しました」

「ハア、分かりましたよ」

「了解です、審神者様！」

『菊一文字は村正たちと合流、管理局の動きを探れ』

「分かりました」

『はいよ』

『了解だぜ主』

『蜻蛉切は鎌倉に戻り次第、薬研と合流。舞草が動き始めた、監視を』

『はっ!』

そして、ブツンと通話が終了し、画面が消える。

菊一文字は直ぐさま、席を立ち、村正たちの元へと向かい、席には義勇たちが残った。

「それにしても良いよなく、富田や炎定は可愛い刀使の知り合いがいてよう。やっぱり顔か？顔なのかチクショー!!」

勝手にやけっぱちになり、善逸は残った飲み物を喉に流し込み、店員におかわりを注文した。

「いやいや、知り合いと言つてもほんの中3の頃から1年ぐらい稽古に付き合つたぐらいだぞ?」

「それでも女の子と知り合えるなんて羨ましいよ、チクショー!!」

「富田は、そうでもないようだが?」

「……………」

結局、義勇は最後まで何も答えず、飲み物にも手をつけなかった。

隠れ家

セイバーたちが用意していた「隠れ家」に来てから2時間ほど経った。

1階フロアに大浴場があるのだが、姫和が断固として室内のシャワールームにすると
言ってきたので、各自順番にシャワーを浴びた。

「ふうく、サツパリした〜」

「前から思ってたけど、和泉守は髪が長いから大変だろうか？」

「そうですね。和泉守さんって、男の人なのにつっこう伸ばしてますよね」

「中々格好いいだろう？なあ、十条」

「別に……（私よりツヤが良い……なんか悔しい）」

その後、部屋に運び込まれた夕食をいただいた。昨日の折神家の旅館ほど豪華ではないが、量も味も申し分なかった。

「うん、美味しいね、姫和ちゃん！」

「食事くらい落ち着いて食べろ」

「なあセイバー、沢庵くれ」

「和泉守、結局みんなから沢庵貰うの?」

食器をさげて貰った後、姫和は御刀を抜き、精神を集中させる。

スウウー………

「どうだ、十条?」

「ああ……まだそう長くはないが、写シくらいは張れそうだ」

「あ! その御刀、鋒の胸側にも刃があるね」

〃元〃 対戦相手だった可奈美は御前試合ではよく見えなかったが、姫和の御刀が普通のものとは違うことに気付いた。

姫和の御刀である小烏丸は『鋒きつぎ両刃造』、別名『小烏丸造り』と呼ばれている。

「へえ……それであの時、突き技だったんだね」

「あの時?」

「ほら、御当主様に止められたあの技だよ」

「っ!!」

可奈美は特に深い意味で言ったわけではないが、姫和やセイバー、和泉守は違った。

「……衛藤さん、君はあの技が見えていたのか?」

「っ！まさかお前たちも……!?」

「えつと……?なんとか?」

「……へえ、普通の人なのに、あの技がねえ……」

参つたな……と何やら冷や汗をかいているような和泉守と、何か考え込むセイバー。

しかし可奈美の方は、姫和の剣術のことを思い出したのか、テンションをあげていき「もちろんあの突き技も凄かったよ。あんな早い迅移見たことないよ！あと、他の新當流の技も見たかったな。特に金髪の子との試合で使ったのつて——!!」

目をキラキラと輝かせ話す可奈美。和泉守は少しその勢いに引いているが、姫和はホントに何者なんだと、彼女を見ていた。

それはセイバーも同じであった。

「(衛藤可奈美……か、少し調べてみる必要があるな……)」



刀剣類管理局本部

既に日は落ち、外は暗くなった時間帯。しかし本部内はまだ局員たちはあちらこちらにいる。

清掃員も、彼らの邪魔にならないように端からモップをかけている。

「それにしても、手荒な事せんで欲しいなあ……」

「そうですね……」

本部の中央階段を降りながら、羽島学長と五條学長は先ほどまでの紫との会話を思い出していた。

つい先ほど、衛藤可奈美と十条姫和の両名を確保ため、美濃関、平城の両学長は管理局本部にて、その協力を命じられたのだ。

つまり、しばらく学院には戻れず、ここにいる事になったのだ。

「そういえば、鎌府女学院が協力を申し出ているようです」

羽島学長がそう言うと、五條学長は更に頭を痛める。

「ハア……：雪那ちゃんが絡むとなると、余計にややこしなるな……」

どうなることやら……と本部の入り口を出た瞬間

「羽島学長！」

「柳瀬さん？」

2人の前に、舞衣が待ち構えていた。

「あなた、もう取り調べは終わったんじや——」

「お願いがあります」

「?」

綺麗にお辞儀をする舞衣。一体何を?と思ったとき

「私に、衛藤さんの搜索の許可を下さい!」

「へえ〜……」

そして、3人の様子を本部内からガラス越しでこっそり眺める清掃員が1人。

「これは驚いたな……やるじゃねえか、あの子」

これはあとで報告しないと、そう思いながら怪しまれないように清掃を続ける鶴丸であった。



「ハア〜……何が悲しくてこんなむさ苦しい野郎どもと同室で寝なきやならないのかな」

「はっ、はっ、は!たまにはよいではないか。同じ任務についた者たち、交流を深める意味で」

「そうだな!たまにはこういうのも悪くないな!」

「暑苦しい奴と爺さん、それと無口の奴じゃなかったらな」

「……………」

ブツブツ文句を言う善逸と、カラカラと笑う三日月、ワツハツハ！と笑う杏寿郎。そして相変わらず無表情の義勇。

現在彼らは赤羽刀調査隊監視のため、刀剣類管理局に少し近く小さな宿泊施設の一室にいる。

セイバーたちの「隠れ家」と違い、男4人には少し狭い部屋で、シャワーは部屋の中のものだけで、食事は自力で、というホントに軽い宿泊施設にいる。

「あぁー！なんで俺たちはこんなところで泊まることになったんだよ!? 審神者が用意してくれた「隠れ家」は!？」

「それは言ったであろう善逸。我らが本来泊まる予定だった隠れ家は、たまたま改装工事中。主も全く知らなかったの、責めるのも御門違い。そうなれば、我々が自力でどうにかするしかない」

「そうして見つけたのがここだったと言うわけだ！なに、野宿よりマシだろう?」

「うう………確かに……………」

「(付け加えるなら、俺たち全員、全然金を持っていなかったのもあるが……………それは言わないでおこう……………)」

「ん、どうかしたか富田？」

「何でもない」

その後、義勇が買ってきたコンビニ弁当の取り合いで、また部屋の中は騒がしくなつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『舞衣お嬢様、先ほど送っていただいた音声データの解析が終わりました』

管理局本部近くに留めてある車の車内で、舞衣は実家にいる執事に先ほどの可奈美との通話記録を送り、発信元を調べて貰った。

『端的に申しますと、相手は我々が思う以上の者たちかもしれません』

『どういうことですか？』

『回線が海外のものを幾つも経由しており、ダミーも幾つかありました。ここまで周到な手を、衛藤様がするとは思えません』

執事の言う通りなら、確かに可奈美の仕業ではない。となると十条姫和か、もしくは

『ですが、なんとか都内のある範囲までは特定出来ました。その範囲内で隠れられる施

設は五カ所』

それから執事からそれぞれの場所の住所を聞き、更に父親のツテから警視庁の人間を数名、協力して貰うことになった。

執事との通話を切り、舞衣は運転手に五カ所のうち一カ所の住所を伝え、車を向かわせた。

「(可奈美ちゃん……待ってて……)」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

セイバーたち宿泊の『隠れ家』

時刻はもうすぐ22時を迎えようとしていた頃、セイバーや可奈美たちは布団を敷き眠ろうとしていた。

ただし、年頃の少女がいるのでセイバーと和泉守はテレビがある方の部屋で。可奈美と姫和は隣の部屋に布団を敷き部屋の電気を消した。

零課組の方は直ぐに静かになったので、もう寝てしまったのだろうか。

刀使組は布団には入っているが、未だに夢の中には入っていないかった。

目を閉じてはいるが、まだ起きている。ただ黙っているだけ。

そんな時、姫和が口を開く。

「……………ホントに何も聞かないんだな」

「何もって……………」

「私が折神紫の命を狙った理由」

「それが、姫和ちゃんのやり遂げなきやならないこと……………」

「そうだ」

そっか…、可奈美はそれだけしか答ええない。姫和としては、そうペラペラ喋りたい訳ではないので、それはそれでありがたいが少し調子が狂う。

「姫和ちゃんが話したいとき、話してくれば私はそれで良いよ」

「あの2人以上に、お前も変なヤツだな……………」

そして、ようやく2人は完全に目を閉じ、寝静まった。

「……………確かに、俺たち以上に変なヤツだな、衛藤は」

可奈美たちが寝ている隣の部屋、セイバーたちの方は布団は敷いているが、その上に座り、タブレットの明かりだけで、今日の報告書を作成していた。

「そうだね。けど、彼女のような人間が1人くらいいた方が、楽しい」

彼女が起きないように、声を小さくして話す2人。

隣の彼女たちに気付かれないように静かに報告書を作りながら、2人は明日は如何するかを相談しようとした時

「っ!!」

部屋の扉の外に気配を感じる。和泉守は刀を手にし、可奈美たちが眠る部屋の前にサツと移動し部屋を守る。

セイバーはゆっくり扉の前に立ち、覗き窓から外を見る。そこには旅館の従業員が部屋の前に立って、ノックをしようとしていた。

コンコン…

「夜分遅くにすいません、お客様。少し宜しいでしょうか……?」

「……………」

セイバーは和泉守に視線で問題無いか?と、尋ねると和泉守は可奈美たちの部屋の襖に耳を当てる。そして、コクリと頷く。

どうやら彼女たちは起きていないようだった。

それを確認したセイバーは静かにドアを開ける。

「どうした?」

「はい、この施設を逆探知しようとした者がいたので警告を」

従業員の言葉にハッと、布団を敷く前に鶴丸からの報告を思い出す。

可奈美と同級生の『柳瀬舞衣』が可奈美搜索を学長に頼んでいたことを。恐らく彼女の仕業だろう。

「……………この場所がバレたか？」

「いえ、それは無いかと……………ですが、ある程度範囲は絞り込まれたかと……………」

となると、明日にはここに来る可能性は高い。だが、ここに宿泊していることは絶対にバレない。

だが、もうここには居られないだろう。元々この『隠れ家』には長くは居るつもりはなかった。逆に丁度良い。

「分かった、明日にはここを発つ。一応『抜け道』を使わせて貰う。朝食は早めを持ってきてくれ」

「承知しました。もし追っ手が来ましたら、時間稼ぎいたしますので、その間に脱出を」
「助かる」

では……………と従業員が部屋を去った後、セイバーは扉を閉め、和泉守にも話した。

「なるほどなあ、それにしても柳瀬舞衣の動きが早くないか？短時間で場所の特定はされていないが、範囲を絞り込まれてるし……………」

「逆探知……………電話……………衛藤さんか……………」

ここに着いてから、彼女はこここの公衆電話を使っている。かけた先はその柳瀬舞衣に

間違いない。

可奈美はこの正確な場所は知らない。舞衣が管理局に教えて、特定したのか。

それなら管理局に潜入している鶴丸や村正から『管理局に特定された』と一報があるはず。ならば彼女が自力で特定したのか――

「ん、柳瀬舞衣……柳瀬……柳瀬グループの人間か……」

「柳瀬グループって、あの大企業の柳瀬グループか？なるほど、確かにあそこなら納得がいく」

柳瀬グループは国内で一二を争うトップ企業の一つ。家電製品や車に日常品の開発や販売、ノロの研究等様々な分野に精通している。更に、警察や政治家にも少しではあるが独自のツテを持っているらしい。

「富田の実家より少し厄介なところの人間がいたもんだな」

「衛藤さんの友人となると、多分彼女が目的だろう。友人を見つけて連れて帰りたいとか……」

「なら、衛藤だけでも連れて帰って貰うか？」

「……………」

確かに良い機会かもしれない。これで彼女を今回の件から遠ざけることが出来る。

だが――

「それを決めるのは、衛藤さん本人だ」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

公安零課本部 『本丸』

「……………」

本丸内で他より少し広く西洋風の部屋で1人、パソコンを眺める男性。

零課の指揮官で、セイバーたちの主『審神者』。

彼が眺めるのは、パソコンに写し出されている1枚の写真。1人の黒い制服を着た女生徒中心に、同じ制服を着た女生徒と、美濃関の男子用学生服を着た男子生徒とスーツ姿の若い青年、3人を無理矢理引き込み写真を撮ろうとしている写真。審神者がとても大事にしている1枚だ。

男子生徒はノリノリで女生徒の肩を組んでいる。もう1人の女生徒とスーツ姿の青年は鬱陶しそうに、困惑しながら引き込まれようとしていた。

審神者は中央の女生徒と隣の男子生徒の顔を見る。

「美奈都さん、貴女の娘さんはずいぶん貴女に似てきましたね。貴女に負けないくらい

の剣術バカで、優しく強い……」

そして今度は、スーツ姿の青年の隣に写っている女生徒をアップする。

「……大丈夫、必ずあの子は守ります。何があろうと、僕の命にかけて、絶対。だから……どうか見守って下さい、篝さん」

パソコンに写し出されている女生徒の顔を優しく撫で、ギョツと拳を握り締める。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

翌朝 〃隠れ家〃

キキイー……と隠れ家の前に1台の車が止まる。中から2人の男性と舞衣が出て来た。

「他の宿泊施設には対象はいなかったようです」

「特定した範囲内で残っているのはここだけです」

分かりました、と返事する舞衣。他が空振りとなると可奈美たちはここにいる。そう信じて隠れ家に入る。

「いらつしやいませ、ご宿泊ですか？」

「いえ、人を探しているんです。『衛藤可奈美』と『十条姫和』はこちらに泊まっていますよね？」

そう言つて、管理局発行の身分証明書を見せる毎日。これは刀使が持つ言わば警察手帳のような役割を持っている。

『衛藤可奈美』と『十条姫和』ですか……」

受付は宿泊客の名簿をペラペラとめくり探す。そして

「そのようなお客様はお泊まりになっていませんね」

「そんなはずはありません。ちよつと名簿を宜しいでしょうか？」

「はい……」

そして舞衣は受付から半ば奪うように名簿を受け取り、2人の名前を探す。だが、確かに2人の名前は無い。

「……では、昨日の防犯カメラの映像を見せて貰えませんか？」

「は、はあ……」

どうぞ……と受付に案内され事務室へと向かう。

部屋に入ってから昨日の受付の映像のビデオを提出して貰い、可奈美たちの姿を探す。しかし、何度見返しても2人の姿が映っていなかった。

「どういふこと……？ じゃあ可奈美ちゃんはどこに……？」

すると、ハツと先ほどの宿泊客の名簿を見返す。

その中に『影の間』という部屋に宿泊している『公零』という名前に引つ掛かる。兄

2人と妹2人の兄妹4人で宿泊している客たち。

御前試合で逃亡したのは可奈美と姫和、そして身元不明の人物2人の計4人。

「すみません、この影の間に宿泊している方々ですが——」

「こちらが『影の間』になります」

受付の人に案内されて来たのは、施設の一番奥の部屋。

コンコンとノックをすると、中から「はあゝい」と男性の声か。

「失礼致します、お客様。旅館の者ですが、少々宜しいでしょうか?」

「はいはゝい……」

「失礼っ!」

「ちよっ!?なんだ!?!」

ガチャリと、ドアが少し開いたのを確認した舞衣は、連れ添っている柳瀬グループの2人にドアをこじ開けて貰い、中へと入る。

ドアを開けた青年が「何なんだよ!?!」と、受付たちに怒鳴るが、舞衣はまっすぐ居間の方へと向かい、襖がガラッと開ける。

「可奈美ちゃんっ!!」

「うわっ!びっくりした!?!」

「ちよつ、誰ですか、あなた!？」

「えつ……?？」

部屋にいたのは、大学生ぐらいの女性2人。それと隣の部屋から寝起きなのか、寝癖がついたままの別の男性が出て来た。

「ん?どうしたの?？」

「ちよつとこの子がいきなり入って来たのよ!」

「えつと、どちら様ですか?」

「あの……すいません、人を探していて……!」

直ぐさま舞衣たちは宿泊客たちに頭を下げ、事情を話す。向こうもびっくりしていたが、とくに咎めもせず、今度からは気を付けろよな?と注意され舞衣たちは部屋を出た。

「あの、もう宜しいでしょうか……?」

「はい、すいません、ありがとうございます……!」

そして、受付の人も仕事へと戻って行った。

「舞衣お嬢様、もしや衛藤さままたは別の宿泊施設にいますのでは?」

「でも特定した範囲内にもう宿泊施設は無いぞ?」

お付きの人たちも訳が分からなかった。

とにかく他のお客の迷惑になるので、舞衣たちは施設を出て、街の方へと搜索に掛

かった。

「行かれましたか？」

「ああ、行つたぞ」

舞衣たちが出た後、影の間にいた段階の1人が、受付に声をかける。

「お前たちもご苦労だったな」

「いえ……」

そう言つて彼らは寝間着から従業員用の服に着替え、持ち場に戻つた。

「悪く思わんでくれよ、お嬢ちゃん」

舞衣たちが到着する数十分前

「ごちそうさまでした。朝食も美味しかったね、姫和ちゃん」

「まあ……」

「ふう、食つた食つた」

「さて、朝食が済んだところ悪いが、直ぐに身支度をして欲しい」

箸を置き、切り出すセイバー。何事かと思う刀使2人に、ありのままを話す。

「衛藤さんの友人、柳瀬舞衣さんがもうすぐここに来る」

「えっ、舞衣ちゃんか！」

「管理局にここがバレたのか!？」

「いや、管理局にはバレていない。それにあくまでこの辺り一帯の範囲を特定された。だから今、柳瀬さんは此処らの宿泊施設を片っ端から回っている」

「ならば直ぐにここを出ないと！」

「落ち着け十条。もちろん直ぐにここを出るぜ。だがその前に——」

「衛藤さん、君はどうする？」

「えっ……?？」

いきなりのことで、一瞬ポカンとなる可奈美。だが、セイバーは続けた。

「最後のチャンスだ。我々と共に来るか、このまま柳瀬さんと一緒に帰るか」

このまま逃亡者となり逃げるか、今回の件から手を引くか。普通なら後者を選ぶだろう。だが

「帰らないよ。私がみんなの足手まといになるかもしれないけど、それでもやっぱり姫和ちゃんをほっとけない。セイバーたちの手助けをしたいの！」

「……この先、命の危機にさらされても?？」

「大丈夫！私けっこう強いから！」

フーン！と胸を張る可奈美。そして改めてセイバーの方へと向き直り

「お願いします、私も連れてつてください」

「……了解した」

姫和も流石にここまで言われては、帰れ、と言いにくくなってしまった。

さて、そろそろ舞衣がここに着く頃だろう。

「さあ、脱出の準備だ！」

それから可奈美と姫和は寝間着から制服に着替え、上にパーカーを着る。セイバーたちも既に服を着替えており、2人を待っていた。

「それで、旅館の裏口から出るのか？」

「いや、『抜け道』を使わせてもらう。和泉守」

「おうー！」

そして和泉守は布団が仕舞ってある押し入れを開け、下の段の壁際に手探りで何かを探す。

「何をしてるんだ？」

「まあ、見せて」

「えーと……確かこの辺りに……あつた！」

壁の一部がパカッと開き、レバーのようなものが見える。和泉守はそれを下に引く

と、押し入れの隣の壁がスライドし、地下へと続く階段が現れた。

「すごいっ！」

「おい、ここはただの旅館じゃないのか!？」

「申し訳ないが説明は後回し。和泉守、君が先に行ってくれ。2人とも、彼について行って」

セイバーに急かされ、姫和は渋々和泉守の後に続き、可奈美は驚きこそしたが、アトラクションみたいとワクワクしながら階段を降りていった。

2人が階段を降りた後、部屋に旅館の従業員が入って来る。

「状況は？」

「はい、先ほど管理局の刀使が到着しました。現在受付で時間を稼いでいます」

「では、後処理をお願いします」

「はい、道中お気をつけて」

そしてセイバーも、階段を降りていき、従業員がレバーを元に戻すと扉は再び閉まり、ただの壁になった。

数分後

「けど、ごめんね……私のせいで……」

「衛藤が謝ることはねえよ。どちらにしろ、あそこには長くはいられないからな」

「それにしても、あの旅館はなんだ？何故あんな仕掛けがある？」

「今言えるのは、あそこは僕たちの組織につながる施設つてことだけだよ」

階段を降り、そこから長い一本道を歩いて数分。一応蛍光灯がついており暗くはないが、ただひたすらまっすぐの一本道が続いていた。

それから歩き続けることまた数分後、目の前にエレベーターが見えてきた。

「よし、これで地上に出るぞ」

「一体どこに繋がっているんだ？」

「それは見てのお楽しみだよ、十条さん」

一行がエレベーターに乗り、和泉守がボタンを押すと、エレベーターは静かに上へと上がる。

チーン……と到着音がなり扉が開かれると、今度は短い廊下が。その先には別の扉が見える。

和泉守が先に扉に向かい、扉を少し開け、外の様子を見る。

「……………よし、いいぞ」

和泉守が手招きし外に出ると、そこはどこかのデパートの駐車場だった。

「それじゃあ僕は少し用事があるから、和泉守と行動してくれ」

「はい」

「用事ってなんだ？」

「ちよつと情報収集さ——」

セイバーと分かれた後、和泉守がさてと…とスマホの地図アプリを起動させる。

「とりあえず移動するぞ。えつと、この辺りで人が多い場所と言えば……」

「あ、それなら私知ってるよ！」

可奈美が任せて！意気込むので、とりあえず可奈美に任せて、彼女が知る場所へと向かった。



とある喫茶店

チャリン…

「いらつしやいませ。お一人様ですか？」

「いえ、連れが……あ、いた」

一方、少しレトロな喫茶店に入ったセイバー。店内をぐるりと見渡し、目的の人物を見つける。

カウンターの一番端の席、紅茶を飲む白髪で白いスーツ姿の青年。彼の隣に座り、コーヒーを注文する。

店内はまだ午前中の早い時間なので人はあまりいない。だが、コーヒー豆の香りやレコードの音色でいっぱいになっている。

そして、セイバーの前にコーヒーが置かれた時、隣の青年が口を開く

「驚いたぜ、思ってたより賑やかなようだな？」

「僕も驚いたよ。まさか決勝戦の対戦相手まで連れて行くことになるなんて」

「だよな、と紅茶を一口飲む白髪の青年、鶴丸。」

「柳瀬舞衣は？」

「車で移動しながら探してるよ。安心しろ、車に発信機は付けてる」

「そう言いながら、鶴丸のスマホの画面には舞衣の乗る車の位置情報が表示されている。」

「現在和泉守たちが居る場所とは反対方向にいる。だが、いつこちらに来るか分からない。」

「次の『隠れ家』の準備は？」

「主が手配中だ。昼前には確保出来るはずだぜ。それともう2つ」
「？」

「まず1つ、練府が動く」

「捜索隊を出したのか。数は？」

「いや、1人。学長様のお気に入りが」

練府学長のお気に入り、それは御前試合にも出ていた。その名は

『糸見沙耶香』か……」

「正解。今、村正の爺さんが見張ってる」

「もう一つは？」

「主からだ。『衛藤可奈美』も『十条姫和』同様に保護し護衛せよ。だとさ」

「衛藤さんも？何故……」

「主は、いざれ話すつてさ」

うくん……と少し引つ掛かるが、命令ならば仕方ないと了承するセイバー。

それからそれぞれ飲み物を飲み終えたので、2人は喫茶店を出た。



「衛藤……まあ確かに人は多いが……」

「お前な……観光に来たわけじゃないんだぞ！」

「えく？だって、私が知ってるのここだけだったから……」

姫和が叫んでいるのは、都内の有名な繁華街。確かに人が多く身を隠すには丁度良いかもしれないが。しかも今日は日曜日。よく見ると、可奈美や姫和ぐらいの年頃の少女や、学生たちもそれなりにいるので、目立つことは――

「あ、あの……もしかしてモデルの方ですか？」

「え、おれ？」

「うわー、スツゴク格好いい！」

「もしかして、俳優さん!？」

「すいません、写真良いですか？」

「いや、参っちゃうな〜」

キヤーキヤーと、和泉守の周りに集まる女性たち。

「……えつと……姫和ちゃん？」

「……………アイツが一番目立ってどうする……（―――#）」

和泉守を引つ張り、一行は自然に振る舞うためあちこちを見て回り、いつの間にか普

通に楽しんでいた。

だが姫和だけは、周囲の警戒を解かなかつたが

「あれは……!?!」

「どうしたの、姫和ちゃん?」

「なんかあつたか?」

姫和が足を止めた先には、アイスクリーム店が。鹿も何やらキャンペーンをしているらしく、限定味のアイスを出しているようだ。

「なんだ、アイス食いたいのか?」

「べ、別にそんなんじや……」

「そんじや、行くか——」

「いや、寄っていこう! 今後の話をする必要もあるから。是非とも寄っていこう!」

「は……はい……」

姫和の謎の勢いで一行はアイスクリーム店によりそれぞれアイスを購入（和泉守の奢り）し、近くのベンチで並んで座って食べる。

可奈美はオレンジ味、和泉守と姫和は期間限定の抹茶オーレ味と——

「へえ、姫和ちゃんチョコミント味好きなの?」

「そ、そうだな……比較的、口に合うほうだな……」

可奈美に指摘され、ちよつと恥ずかしがる姫和。

「けどな、チョココミントって正直言つて、歯みが——」

「歯磨き粉ではない!!」

ドカツ!! (右ストレート)

「ぐほっ!!」

和泉守が言い切る前に、姫和の右ストレートが和泉守の頬に綺麗に入り、和泉守はベ
ンチから吹つ飛ばされた(アイスは無事)。

「チョココミントこそ至高! それがあるか無いかで人生の全てが変わると言つても過言で
はない!!」

「ひ……姫和ちゃん……?」

「てめえー!! その前に俺が『歯磨き粉』って言う前に『歯磨き粉』って言うことは、お前
も薄々歯磨き粉の味だつて思つてる証拠だろうが!!」

「歯磨き粉ではない!! そもそも、チョココミントからミントを抜くなど、アイスコーヒーか
らコーヒーを抜くようなものなのだ!!」

「やかましい!!」

いてて……とベンチに座り直り、死守したアイスを舐める和泉守。

「たくつ…… (こういうところ、ホントそっくりだな……)」

それから1時間ほど経ち…

天気が曇り、雨が降りそうに。そこに和泉守はセイバーと連絡をとり、目立たない場所で合流し、用意された新たな「隠れ家」へと向かうことになった。

「それで、これからどうする？」

「また昨日みたいなところに泊まるの？」

「そうなるな。そろそろ——」

セイバーとの合流時間のはず、とそこに突如

キイーーーーー……

「な、なに!？」

「十条!」

「ああ!」

和泉守に言われ、姫和は直ぐさまスペクトラム計を出す。すると中のノロが強く北西の方向を差していた。

「反応してる……もしかして荒魂が?」

「この反応だと近いな……」

「ああ、数は分からないが、そう多くは無さそうだな……」

よし！と！可奈美はスペクトラム計が指す方向へと向かうとしたが、姫和だけは違つた。

「あれ、姫和ちゃん行かないの？」

「いや、放っておこう。今はそんなことしている場合じゃない」

「なに……？」

「ええ!?ダメだよ、直ぐに退治しないと被害が……!」

「管轄の刀使たちがもう捕捉しているかもしれない。もし鉢合わせでもしたらマズい」

「でも……」

「彼女たちにはスペクトラムファインダーがある。発見にはそう時間は掛からない。それに私たちだけでは退治出来てもノロは回収出来ない。散らすだけだ」

「それはそうだけど……」

姫和の言うことも一理ある。散らすだけでは、いずれ他のノロと結合してまた荒魂化するか、他の荒魂に吸収されてもっと強い荒魂になるかもしれない。

それに逃亡の身である自分たちが下手に動く必要も無い。だが、それでも可奈美は納得は出来ない。そしてそれは、彼も同じ。

「おい、十条」

「っ!？」

突如、今まで聞いたことない和泉守の太く低い声。そして全身を凍り付かせるほどの殺気。

「放っておこう? そんなことしている場合じゃない、だど?」

「……………!!」

静かに言葉を発する和泉守だが、一言毎に、殺気が増していくのを感じる。可奈美や姫和は、何も言えないどころか、体が動けずにいた。

「てめえ、それでも刀使か! それでも、剣士かつ!! 戦うための刃を持っておいて何もしねえだど? ふざけるのも大概にしろ!! 確かに捕まったら元も子もねえよ。けどな、それで人が傷付くの見過ごす理由にはならねえだろうが!!」

「そ……それは——」

「敵を目の前にして、刃を錆び付かせるのは臆病者がすることだ。ましてや、それを知っててなお、刀を抜くつもりがねえなら、剣士を名乗る資格も無い! 俺が今ここで、御刀を叩き折る!!」

姫和の目の前で拳を握り締める和泉守。その目は脅しでもなく、本気で姫和の御刀を叩き折る気満々だった。

だが、次の瞬間フツと和泉守から殺気が消え

「それに俺はお前らの護衛が任務だ。もし追っ手と鉢合わせても俺がキツチリ守ってやるよ！それと……お前の刀と、お前の本心も、ホントは違うだろうか？」

「……………私は……………」

「姫和ちゃん」

「衛藤……………」

「行こう！」

「……………ああ！」

そして同じ頃、街中で可奈美たちを搜索していた舞衣も荒魂の存在を感知し、現場へと向かった。

剣士の誓い

『!!』

「荒魂だっ!？」

「に、逃げろおー!!」

「きやああー!!」

「は、早く刀使を呼べっ!？」

機械音のような虫型の荒魂の咆哮が、上空から鳴り響く。それにより人々は我先にと逃げていく。

「落ち着いて、慌てず避難しろ!ほら、あんた大丈夫か?」

「す、すみません……」

和泉守がなんとか避難誘導してくれているので、可奈美と姫和はパーカーを脱ぎ捨て、御刀を抜刀、写しを張る。

「わたしが仕掛けるから、姫和ちゃんは追い込んで!」

「了解した!」

迅移で一氣に荒魂との距離を詰めながら、刃を振り下ろす。だがそれはあっさり躲され上空へと逃げる。

そして、構えて動かない姫和へと矛先を向け、下降しながら突進してきた。しかし姫和は動じない。ここまでは想定通り。

「ふっー！」

ガキンツ！

『!!』

スレスレを狙い、荒魂を斬りつける。それによりバランスを崩れたところにもう一撃を加える。それでも荒魂はもう一度上空へと逃げようとする。だがそれを見逃すわけにはいかない。

「可奈美っー！」

「うんっー！」

逃げようとする荒魂も背後を迅移で迫り、八幡力で身体能力を向上させ、荒魂の頸を

ボコツ……

「えっ——」

『!!』

地面が盛り上がり、そこからモグラにクマが融合したような荒魂が出現した。

「地面から荒魂がつ!!?可奈美つ!!」

「しまった!?!」

可奈美は地面が盛り上がって出来た段差に止まることが出来ず、躓いて転んでしま
う。

「マズい!」

『———!』

「く……クソツッ!」

直ぐに援護しようとするが、虫型荒魂が姫和に向かって再び突進してきた。なんとかそれは躲せるが、可奈美の元には行けない。

虫型荒魂も、姫和を向かわせないようにしているのか、長い脚と尻尾で姫和に襲い掛かる。

そうしている間に、モグラ型の荒魂は鋭利な爪を振り上げ、可奈美に狙いを定める。

可奈美の方は、まだ起き上がれずにいた。

「可奈美、逃———!?!」

姫和の叫びは荒魂の咆哮で掻き消される。そして、その爪は可奈美一直線に振り下ろされる。

「あ——」

荒魂の爪が真つ直ぐ自分に向かってくる。

ほんの一瞬のはずなのに、まるで時間の流れが緩やかになったように感じる。

ならば直ぐに動こう、そうしようにも、やはり体もゆっくり動く。

もう、間に合わない。

自分は、ここまで——

「ハッ!!」

ザシユツ!!

『!?!』

「えっ……っ?」

「……良かった、間に合って」

可奈美に向かつて振り下ろされるべき荒魂の爪は、その右腕の肘の部分ごと斬り飛ばされていた。

そして、それを為しえた人物は

「せ……セイバー……さん？」

「大丈夫かい、衛藤さん？」

ニコツと笑いかけるのは、セイバーであった。だが、その格好はスーツ姿ではなく、蒼と銀に包まれた騎士甲冑で、彼の手には何か握られていた。

斬り飛ばした、ということは剣状のものなのは確かかもしれない。だが、それは見えない。

透明な何かで隠されているようだった。

「アイツ……荒魂を……斬ったのか？」

「遅えぞ、セイバー!!」

そこに和泉守が姫和の隣に立つ。彼もスーツ姿ではなく、紅い袴の上に浅葱色の羽織をマントのように羽織っていた。

「お前……その格好は？」

「説明は後だ。それより何してた、セイバー！」

「すまない、少し道に迷ってしまったね。この失態は、この荒魂を討つことで返上する」
 「そうか……なら俺たちはコイツを仕留めるぞ、十条!!」

「仕留めるって……刀使で無ければ荒魂は——」

「十条、良いこと教えてやるよ……世の中には、自分が知ることが全てじゃあねえんだよ
 !」

スチャ……と腰に差している刀を抜く。やはりそれは御刀ではないが、業物であることは確か。そして姫和はその刀身を見て気付く。

「兼定の刀……しかもそれは——!？」

「ほら、よそ見してる場合か？」

上空を見上げると、虫型荒魂が再びこちらに目掛けて突進する体制をとる。

「よおーし、いっちゃやってやろうじゃねえか！」

『!!』

和泉守に呼応するように虫型荒魂が彼に目掛けて突進してくる。そして和泉守はそれを迎え撃つように構え、荒魂のまっ正面から

「そらよっ！」

ガキンツ!

『!？』

刀を思いつきりに振り上げる。そして、荒魂の左脚3本が斬り飛ばした。左脚を失い、完全にバランスを崩した荒魂はフラフラと空中をふらつく。

「なっ——!?!」

「十条!!」

あり得ない光景で、一瞬呆けてしまうが和泉守の声で、意識を集中させ、ふらつく荒魂片翼を斬り落とした。飛行能力を無くした虫型荒魂は地面へと落下していく。

和泉守はそこに狙いを定め

「切って殺すのは——」

「!?!」

ザシュツ!!

「——お手の物!」

和泉守が刃を振るうと、荒魂の頸が空中へと飛び、そのまま地面に転がった。

「——!」

モグラ型荒魂は、セイバーに対し後ずさりする。

突如現れ腕を斬り飛ばされたせいとか、それとも別の理由か。どちらにせよ、セイバーに対して脅えていた。まるで、天敵にでも遭遇したかのように。

「衛藤さん」

そんな荒魂の心境を知っているのか、そうでないのかはともかく、セイバーはいつもと変わらない態度で可奈美に声をかける。

「ここは僕が引き受ける。君は下がって」

そう言つてまた一步、荒魂に歩を進める。だが、その背中は先日見た背中とは違う。まるで、寂しいひとりぼっちの……

「うん、大丈夫だよセイバー。私は、戦えるよ！」

パンパン……と足についた埃を払いながら立ち上がり、彼の隣で御刀を構える。

「そうか……ならば、死力を尽くしていこうか！」

「うんっ!!」

『!!』

モグラ型荒魂は、逃げられないと判断したのか、それともやけになったか。どちらにせよ、残った片腕で2人に襲い掛かる。

「いくぞー！」

「うん！」

セイバーはまっ正面から荒魂の爪を不可視の剣で受け止める。その隙に可奈美は背後に回り込む。

だがモグラ型荒魂は、セイバーを振り払い、片脚を後ろに向けて蹴り上げる。「ふんっ!!」

だが可奈美はその脚を足場にして、空中へと飛び上がる。しかしモグラ型荒魂は今度こそは、と爪で空中の可奈美に向かって突き出そうとする。

「ヤバッ!?!」

「風よっ!」

セイバーが可奈美に向かって、剣を振るうと、可奈美の周囲に風が舞い上がり、彼女を更に上空へと舞い上げる。それにより、荒魂の攻撃は空振りに終わる。

「風王^{ストライク}ッ!」

セイバーの不可視の剣による不可視の斬撃が荒魂を斬り割く。だがまだ荒魂は最後の力を振り絞り、動こうとする。だが、ここまでだ。

「決める、可奈美っ!」

「っ!……うん!」

自由落下とセイバーの風により、勢いが増した可奈美の一刀はモグラ型荒魂を縦に真つ二つに斬り割いた。

「ハア……ハア……勝った……勝ったよ、セイバー!」

「ああ、見事な一撃だった」

頑張ったね、と肩で息をする可奈美に労いの言葉をかけながら、彼女の頭を撫でる。ちよつと恥ずかしいが、嬉しく思う可奈美。そして同時に感じる、懐かしい感覚に。

「あれ……この撫で方……前にどこかで……」

「おーいつ、セイバー、衛藤！」

そこに和泉守と姫和が2人の元に駆け寄る。ただ、姫和の目はセイバーと和泉守を怪しむ最初の頃の目つきになっていた。

「何なんだお前たちは……何故、荒魂を倒せる。それにお前たちの剣は——」

「まあまあ姫和ちゃん、折角荒魂を討伐出来たんだし、それでヨシとしようよ？」

「そうだぜ十条。若いうちにあれこれ細かいことを気にしていると小ジワが増えるぞ？」

「やかましいっ！」

「ハハハ……さあ、早く移動しよう。さもないと——」

「可奈美ちゃんっ！」

「……遅かったか」

セイバーが向く先には、ハア……ハア……と息切れをした舞衣が。

「舞衣ちゃん!？」

「美濃関の追っ手か……」

「(おいおい……鶴丸は何してんだよ……?)」

舞衣は可奈美の無事を確認すると、姫和たちに御刀を向ける。そして、姫和も對抗するように御刀に手を伸ばす。だが、セイバーがそれを止めた。

「十条さん、ここは僕が」

「……分かった」

「セイバー!?!」

「大丈夫だ、衛藤。アイツにはアイツなりの考えがあるんだろう……（そうだろう、セイバー?）」

そして、3人を守るように舞衣の前に立ち塞がる。

「……民間人の避難誘導、並びに荒魂討伐へのご協力、ありがとうございます……」

「それなのに君は、我らに剣を向けるのか?」

「私は刀使であると同時に、可奈美ちゃんの親友です。ですから、可奈美ちゃんだけでも返してもらいます!」

そして、迅移で一気にセイバーに迫るが、ガキンツ!とセイバーは何事もないかのようには不可視の剣で受け止める。

「っ!?!」

「この程度か?」

舞衣をあつさり押し返し、逆に彼女を攻める。

不可視の剣相手に、しかも剣術の型が無いセイバーの攻撃を舞衣はただひたすら防御するしかなかった。

そしてなにより、セイバーの実力は親友を遙かに凌ぐ实力を感じさせる。まさに歴戦の英雄を相手にしているかのように。

ガキンツ!!

「くっ……!?!」

「君の親友への想いはその程度か?」

「なんですって!」

「親友を助ける……君の行動は確かに素晴らしいことだ。だが、それを為しえるほどの力が君にあるのか?」

ガキンツ!! ガキンツ!! ガキンツ!!

一撃一撃、セイバーの攻撃は重く、鋭い。なにより、舞衣が持たない何かを感じさせる。

「それでも……私はっ!!」

ガキンツ!!

一瞬の間を狙ってセイバーの胸を狙う。だが、それはあっさり止められる。

「負けられないんです……羽島学長が約束してくれたんです……」

もし、可奈美を連れて帰れば、彼女の減刑を全力を尽くすと。無罪とはいかないが、それでも可奈美の為を思えば。

「だから、私は——!!」

ガキンツ!!

ガシャン……

次の瞬間、舞衣の御刀は彼女の手から離れ、地面に転がっていた。セイバーが彼女の御刀だけを弾き飛ばしたのだ。

「そんな……」

「……君に負けれない理由があるように、僕にも譲れない理由があるんだよ。そして僕には、それを為しえる力と覚悟がある」

「覚悟……」

「申し訳ないが、衛藤さんの身柄はこちらで保護することになっている。刀剣類管理局には渡せない」

「保護って……あなたたちは一体……」

「舞衣ちゃん!」

我慢出来なくなったのか、可奈美が2人の元へと駆け寄る。

「ごめん舞衣ちゃん。私も、まだ帰るわけにはいかないの!」

「どうして……」

「私見たんだよ！御前試合で、御当主様が姫和ちゃんの技を受けた時、何も無い空間から御刀を取り出して……その後ろに良くないものが……」

「良くない……もの……？」

「やはり、君にも見えていたんだね？」

セイバーの問いにコクリと頷く可奈美。だが、正直に言つて今でも信じられないが、確かに可奈美は見た。

「一瞬だったけど……あれは、荒魂だった」

「そんな!?だって、紫さまは……折神家の御当主で、大荒魂討伐の英雄——」

「違うっ!!」

舞衣の言葉を姫和は強く否定した。よく見ると、彼女の手はプルプル震えている。

「ヤツは英雄なんかじゃない……ヤツは、折神紫の姿をした大荒魂だ！」

そんな……とショックを受ける舞衣。それもそのはず、その大荒魂は折神紫によつて倒されたと聞いている。だが実際はその折神紫が大荒魂だとすると、一体どれほどの人が騙されているのか。

そうなると、折神家だけではない。刀剣類管理局や伍箇伝も荒魂が支配していることになる。

だがそれを真つ正直に信じられるわけがないが、可奈美と姫和、そしてセイバーたちの

様子を見れば、それが嘘ではないと感じる。

「我々は、その事を以前から知っていた。けれど、物的証拠も無ければ、討伐するための力も足りなかった。けれど今は違う。我々は大荒魂を討伐し、このまま世界をあるべき姿に戻す！」

セイバーの目からは強い意思を感じさせる。言葉だけではない、確かな何かを彼らは持っている。それは、自分では到底及ばないほどに。

「そして今の刀剣類管理局に、十条さんと衛藤さんの身柄を渡すことは危険だ。だから柳瀬舞衣さん、衛藤可奈美さんは我々が責任を持って保護します」

「それに私も、姫和ちゃんやセイバー……この人たちを放っておけない！だから……お願い、舞衣ちゃん!!」

そう言って、舞衣に深く頭を下げる可奈美。

「……本気、なんだね……」

舞衣のその問いに強く頷く可奈美。ここまで必死に頼み込むことなど、以前に期末試験前に勉強を教えてくれ！と頼み込んだ時以来……

彼女の必死さと、純粋な願いに舞衣はいつも押し負けていた。そしてなにより、こうなった親友を止められた試しが無い。

「……セイバーさん、でしたね」

「ええ」

「約束してくれませんか、私の親友を、必ず守るって」

「……必ずあなたの親友を全霊をもって守ってみせます。もし、彼女の身に何かあれば、この命で償います」

「本当、ですネ……？」

「騎士王の名にかけて、必ず」

少し間をおき、ふうと肩の力を抜く舞衣。そして写しを解き、御刀を納刀した。

「舞衣ちゃん……」

「分かってるよ。可奈美ちゃんのする事は、いつも本気だってこと。それと、決めたことは絶対に曲げないってことも」

そして舞衣は可奈美の元に行き、懐から彼女の“忘れ物”を渡す。

「これ……舞衣ちゃんのクッキー……」

それは、御前試合前に渡された彼女お手製のクッキー。しかも量が先日より増えているので、改めて彼女が補填してくれたのだろう。

さすがに他の私物は押収されたみたいだが、コレだけは渡したかった。

「ありがとう、舞衣ちゃん……」

「またね、可奈美ちゃん……セイバーさん、可奈美ちゃんをお願いします」

「お任せを」

そうして、可奈美はセイバーたちと共に、舞衣と分かれその場を後にした。

舞衣は可奈美が見えなくなるまで、ずっとその場で彼女たちを見送った。

「気を付けてね、可奈美ちゃん」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ピピッ…ピッ

物陰に隠れていた鶴丸は、舞衣が可奈美たちを見送った後、ノ口回収部隊を要請している間に、通信機で連絡をとる。

「これで良かったのか、セイバー？」

『ああ、すまない鶴丸』

「別に構わねえよ。しかし…お前にしてはずいぶん必死だったな？なんでそこまで彼女可奈美に入れ込む？」

『……主からの命令でもあったからね』

「それだけか？」

『……………柳瀬舞衣の監視を頼む』

それだけ言い、セイバーは通信を切った。やれやれ…と思いなながらも、鶴丸は舞衣の監視を続行することにした。

「ま、俺も人のことは言えないかな……」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

1時間後…

雨が本格的に降り始めたので、舞衣と分かれた一行はとある廃工場の中に身を潜めていた。

その中で可奈美は、渡されたクツキーの袋を開け、1つ口に入れる。

「……美味しいよ、舞衣ちゃん」

「……さて、そろそろ話してくれないか。何故お前たちは荒魂を討伐出来るのか？」

入り口近くで外を見張っている和泉守と、その近くで腰をかけているセイバーに声をかける。

「さつきも言っただろう。『世の中には自分が知ることが全てじゃあねえ』って。荒魂を倒せるのは刀使だけじゃ無い。刀使以外にも倒せる存在がこの世にはあるってことだ」

「お前たちの刀が御刀でも無いのか？ 御刀には『珠鋼』たまはがねが含まれ、それで神性を帯びて

荒魂を祓える。だがお前たちのはただの刀だろうか？」

しかも、和泉守が使う刀はただの刀ではない。兼定の中でも名刀であり、とある人物が愛用した刀。

『和泉守兼定』……何故お前が持っている。それは京都の『霊山資料館』に保管されているはずだぞ」

もし、彼が持っているのが御刀の『和泉守兼定』なら納得しよう。だが和泉守が持っているのは本物の『和泉守兼定』。それには珠鋼は使われていないはず。

「別に珠鋼無しでも、神性を纏うことはあるんだぜ？ただ、その方法は現代では決して出来ないがな」

「なら……セイバーもそうなのか？」

彼の持つ剣も、御刀でなく何らかの名刀なのか。しかしそれなら何故視認出来ないのか。

「僕のはまた違う理由でね。僕のは力が強すぎるんだよ。だからいつも封印を施してる」

「封印？」

「だからこそ、僕の剣は見えない。その時が来るまで」

一体何の事やらサッパリだ。セイバーたちは『まだ話せないが、いつか必ず話す』と

言うだけ。

姫和の方は納得していないが、可奈美が自分の話を待つてくれているように、自分も大人しく待つ事にした。

「はい、姫和ちゃん」

そこに、可奈美がクツキーを一つ、姫和に差し出した。可奈美が舞衣から貰ったものだから断ろうとしたが、可奈美が『いいから』と、言うのでありがたく貰う事にした。

そして、和泉守にもクツキーを一つ渡し、セイバーには

「あれ、2つ?」

「うん、さっき助けてくれたのと、舞衣ちゃんを説得してくれたお礼」

「……僕は任務で君の身柄を渡すわけにはいかなかったし、荒魂討伐も僕らの組織の任務でもあるから」

「それでも、ありがとう……セイバー」

「……………」

『ありがとう』

その純粋なお礼の言葉を久しぶりに聞いた気がする。たった一言なのに、こんなにも

心が嬉しく感じるのは何百年以来なのか。

「どういたしまして、衛藤さん」

『可奈美』で、いいよ。さつきもそう呼んでくれたから」

さつきと言うのは、荒魂討伐の時か。セイバーは呼んだ覚えが無い。意識していなかったがいつの間にか呼んでいたのだろう。

「分かった……クツキー、ありがたくいただくよ可奈美」

「うん。……あれ？」

「どうした？」

セイバーにクツキーを渡した後、袋の奥にクツキーとは別のものが入っていた。恐らくクツキーを補填した時に舞衣が入れたのか。

取り出すと、メモ書きが1枚。

『もし困ったら、ここに連絡してください。』

○○○—○○○○○—○○○○

◇ ◇ ◇ ◇

刀剣類管理局 指令室

『逃走中の『衛藤可奈美』と『十条姫和』、その協力者の追跡中、渋谷区代々木神園町にて荒魂と遭遇。彼女らの協力を得て民間人を避難及び、荒魂を鎮圧。しかし、確保には至らず、逃げられてしまいました。申し訳ありません』

つい1時間前に、捜索にあたっていた舞衣から、逃亡者を見つけたことと、荒魂と戦闘になった連絡が届いた。

荒魂の方は無事に討伐。ノロも先ほど滞りなく回収されたと別の警官隊からの報告があがった。しかし、感じんの逃亡者たちの確保には失敗したらしい。

『それと代々木公園でも荒魂が発生したらしく、そちらは『赤羽刀調査隊』が倒滅しました。そちらは先ほど全てのノロの回収が終わったそうです』

「ありがとう柳瀬さん。居場所を特定出来ただけでもお手柄よ。ところで、その協力者の素性は確認出来たかしら？」

『申し訳ありません……マスクやサングラスで顔を隠しており、素性も……しかし、体格と声からすると、若い男性ということだけは確認出来ました』

「そう、ご苦労さま。あなたは報告もかねて、こちらに戻って来て『了解しました』

舞衣との通信が切れ、ふうくと椅子にもたれる羽島学長。感じんの確保には至らなかったが、荒魂による被害はゼロ。舞衣も怪我は無いと分かり、ひと安心したのだろう。

「それにしても、わたくし 私たち親衛隊に出撃許可が降りていましたら、こうはなりませんでしたわ」

「それは仕方ないだろう……事件発生から30時間、現在この件にはかん口令を敷いています。会場スタッフ、並びに御前試合出場者も調べましたが、共謀者はなく、おそらく逃亡者4名だけの犯行と思われます」

これだと、一体幾つの罪状がつくのか、想像するだけでも頭を痛くする美濃関と平城の学長たち。

更にそこに頭を痛くする人物が、指令室のドアをドンツ！と押し開け入って来た。

「一体何をやっている親衛隊っ！」

「雪那（ちゃん）」

入って来たのは、赤いスーツ姿で目つきが鋭い女性。鎌府女学院学長『高津雪那』たかつゆきなである。

「反逆者の潜伏先が分かっているのに、何故機動隊を派遣しない!!」

「お言葉ですが鎌府学長。中等部とはいえ、戦闘訓練を受けた御刀を持つ刀使が2名。更に未だ身元は分かかっておりませんが、試合会場から脱出した際の手際の良さと高い身体能力を持つ者が2名。所轄では——」

「ならば、お前たち親衛隊が動けばいいだろう！一体何の為の親衛隊か!」

彼女に言われなくても、自分たちだつて出撃したい。だが、折神紫の警護任務を、紫本人から出ている以上、無闇に彼女の元を離れる訳にはいかないのだ。

それを説明すると、くっ……と歯ぎしりをし、逃亡者たちが消失地点付近の防犯カメラ映像を要求し、高津学長は指令室を出て行こうとした時、最後に両学長に

「学生とは言え、紫さまに御刀を向けた逆賊を育てた罪は重いぞ。覚悟しておけ」
それだけ言い残し、高津学長は指令室を出て行った。

「あゝあゝ、昔は『先輩、先輩！』って言つて可愛かつたのに……」

「いや、いろはさん確か結構雪那にセクハラしてましたよね？」

「そうやつけ〜？」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

指令室を出て行った高津学長に、部屋の外で待機していた銀髪の刀使が出迎えた。

「いいか、沙耶香。お前はこれから東京に向かい、潜伏中の逆賊共を討ち取るのよ」

「はい……」

そして高津学長は、彼女の頬に手を伸ばし、彼女の耳元でささやく。

「御前試合では敗れはしたが、あなたの評価は変わってないわ」

そう言いながら、優しくまるで洗脳するかのようにつける。

「あなたこそ我が鎌府女学院の最高の刀使。親衛隊のような試作品とは違うのよ」
「……………はっ」

そしてその様子を、天井裏からこっそり監視する刀鍛冶の存在がいることを2人が気付くことは無かった。

◇ ◇ ◇ ◇
???

薄暗い部屋。大きな長方形の机に審神者と堀川。そして向かいに誰かが座っていた。審神者の方はセイバーからの報告を受けていた。

「そうか、柳瀬さんが君に……………」

『申し訳ありません。僕の独断で、彼女と接触しました。しかし、彼女は可奈……………衛藤さんの信頼に置ける人物と判断し、我々の素性を隠したうえで、彼女の保護を伝える必要があったのです』

「分かっている。菊一文字からも、柳瀬舞衣が君たちのことは未だ伏せているそうだからね。彼女の口から我々のことが漏れる可能性は低い。だが鶴丸の監視はまだ必要だ

ろうね」

『はい……それともう一つ。舞草からの接触がありました』

「ようやくか……」

『手紙と電話だけですが、どうやら我々を匿いたいと言っているようです。現在指定されたデパートの人気のない場所で彼女たちの近くに隠れ警戒にあたっています』

「そうか……罍である可能性はほとんど無いが、警戒を続けてくれ。もし舞草の者と無事接触し、潜伏先へと向かったらその場所の位置情報を送ってくれ」

『了解しました』

ピツ……と通話が切れ、審神者は携帯を懐にしまう。

そして向かいに座っている人物へと向き直り

「失礼した。部下からの定時連絡で……」

「別に構わねえよ。相変わらず元気になっているようだな、お前の刀剣男子たちは」

「おかげさまで」

「堀川のボウズも、元気にやってるか？」

「はい、元気に兼さんの助手をしています」

「そうか」

まるで親戚のおじさんのように話しかける人物。声からすると、男性で歳もそれなり

にいつているか…

ガチャ…

「失礼、遅くなった」

そこにもう一人、若い男性が部屋に入り、審神者たちの向かい側に座る。

「防衛省の方はどうですか？」

「鎌府女学院からの要請がうるさいよ。『逆賊共を捕らえるのに人員をよこせー』つて。とりあえず、それなりに協力はするが、基本こちらは手を出さないようにするさ」

「感謝します」

「警視庁はそうもいかないなく。副總監の派閥は刀剣類管理局の息が掛かっている。下手に押さえ込もうとすると、こっちがヤバイ」

「今は出来るだけ情報共有を。準備が出来るまで、副總監たちを泳がせてください」

「わかつてるよ、審神者のボウズ」

「ははは…：相変わらず『ボウズ』扱いですか…：」

「何言つてやがる、俺たちから見たら、お前や『いろは』、伍箇伝の学長たちはまだまだ青二才よ」

ははは…と笑う審神者の隣の堀川は少し驚いていた。自分たちの主だけでなく、伍箇伝の学長たちを青二才呼びするなんて。

「さすが、警察庁長官だな……」

「はい、おしゃべりはそこまで。それでは、これからついてだ」

「先ほど、『衛藤可奈美』と『十条姫和』を保護した部下から連絡がありました。舞草から接触があったと」

「ようやく動き出したか、あの嬢ちゃん」

「では……」

「はい。本格的に大荒魂こと『タギツヒメ』討伐の準備を始めるとしましょうか」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

とあるデパート

可奈美たちは、舞衣から渡されたクッキーの袋に入っていた電話番号に連絡すると若い女性の声で

『これから言う場所で待ってて。なんとかこっそり迎えに行くから』

そう言われ、可奈美と姫和は指定された場所で待っている。セイバーと和泉守は念のため、近くで身を潜め、万が一には自分たちが殿役となり2人を逃がす手筈になっている。

それから数分……未だに相手が来る気配はない。

「(場所はここで合ってる……でも誰だろう?メモの字は舞衣ちゃんのじゃないし……電話の相手も聞き覚えなし……)」

「(セイバーたちも知らないとなると、やはり罠か……とにかく、いつでも御刀を抜けるようにしておかないと……)」

と、そこに袋を持った眼鏡をかけた女性が2人の元に近付く。

「えっと……あ、いたいた!あなたたちが『可奈美ちゃん』と『姫和ちゃん』?私は『恩田おんだ累るい』、宜しくね。あれ?他にも居るって聞いたけど……」

「動くな」

「うわっ、びつくりした!」

いつの間にか背後に立つ和泉守。そして恩田と名乗る女性だけ見えるように刀を見せる。

そこにセイバーも、可奈美たちを守るように彼女の前に立つ。

「失礼、少し身体検査を」

「別に危ないものは持ってないよ?」

そう言いながらも、恩田はセイバーたちの身体検査を受けてくれた。軽く調べたが、

確かに妙なものは持っていないようだ。

持っていた袋も、中身は人数分マクド○ルドのバーガーやポテト、ジュースが入っていた。

「確かに、危ないものは持っていないようですね」

「警戒し過ぎだつて、それより君たち……結構格好良いね……」

「おい、セイバー……この人、良い人だぜ！」

「和泉守、ちよつと褒められたぐらいで調子にのるな」

「ハイハイ、早くしないと怪しまれるから、みんな私の車に乗つて！」

恩田に言われ、セイバーと姫和は警戒を解かず、彼女の車へと乗り込み、一行はそのままその場を後にした。

』
だがその様子を、黒い瘴気に包まれた異形の存在が静かに見ていた。

ブーン……と走り出してから数分……

可奈美はもしかしてと思い、恩田に聞いた。

「えっと……羽島学長のお知り合いですか？」

「そだよ。私、美濃関の出身だからね。言わばあなたの先輩だよ。学長には昔から良くして貰ってね。電話であなたたちのことをお願いされたの」

そうになると、あのメモ書きは舞衣ではなく、羽島学長のものと言うことになる。彼女も2人には捕まっつて欲しくないようだ。

「僕らのことも、ですか？」

「そうそう。あ、大丈夫。あなたたちのことは詳しくは聞かないでって、羽島学長から言われてるから」

それから数分後……

車は大きなマンションへと到着し、一行はそのままエレベーターへと乗り、恩田の部屋へと向かった。

「うわ……大きいですね……」

「でしょでしょ？あ、もうすぐ着くからね」

チーン……と到着音が鳴り、エレベーターを出た一行は恩田の部屋の前へと着く。そこでふと、セイバーは隣の部屋を見る。そこには他と違い、表札が無かった。

「……………」

「おい、セイバー。部屋開いたぞ」

「ああ、今行く」

部屋に入ると、中は1人暮らしには少し広いLDK。たがところどころ、ゴミ袋が置いたままになっている。

「美濃閑出身とおっしゃっていましたが、あなたは……」

「うん、〃元〃刀使だよ。けど御刀はとつくの昔に返納してるけどね」

「まさか、刀剣類管理局の——！」

すぐに御刀を構えようとする姫和を、和泉守が止めた。

「落ち着け十条。もし刀剣類管理局の人間なら、俺たちはとつくに管理局の檻の中だ。わざわざ自宅まで連れて来る必要は無い。それに、ザツと見渡したが、監視カメラや盗聴されてる様子もねえよ」

「凄いな、あなた。彼の言う通りだよ姫和ちゃん。私は今は管理局と折神家とは一切関わり無いから」

それを言われてハイそうですか、と納得するわけない姫和。だがセイバーたちが止める、と視線を送るので、とりあえず警戒を緩めることにした。

「ありがとう。それじゃ刀使組は先にお風呂入っちゃって。その間に着替え、用意して

おくから」

恩田に言われ、可奈美と姫和は既に炊かかっていたお風呂で今日の疲れを取ることにした。

「可奈美、御刀は持っていけよ」

「え!?!流石に御刀も持って行くのは……」

「幾らアイツらが大丈夫だと言っても、警戒は怠るな。私は、持って行くぞー!」

「ええ……?」

その間セイバーたちは、恩田の部屋の間にあるゴミ袋を一カ所にまとめていた。

「幾らー人暮らしとは言え、これは流石にないですよ。和泉守だって、ここまで散らかし

ませんよ?」

「ハハハ……ごめんなさいm()m」

「オイコラ、どういう意味だ?」

やれやれ……と言いながら、セイバーはゴミ袋を片付けながら、スマホでこのマンションの位置情報を審神者に送った。

「ギヤアアアアア!?!せ、セイバー!!」

「っ!?!どうした、和泉守っ!」

「ご……ゴキ〇リがああー!?」

「あ、最近掃除してなかったからな……」

「……………可奈美たちが出る前に、軽く掃除しましょうか……………」

調査隊、始動

可奈美やセイバーたちが「隠れ家」で休んでいる頃……羽島学長から赤羽刀調査隊に参加を命じられ、美炎と知恵、そして新たに清香の3人。

彼女たちは羽島学長と分かれ、管理局本部を出て、鎌府女学院へと向かった。そこで合流したのは昼前に共に荒魂退治した練府の刀使『七之里呼吹』であった。

そして、遅れて綾小路武芸学舎から『木寅ミルヤ』が加わった。

練府で多少ゴタゴタがあつたが、互いに顔合わせが出来、ようやく赤羽刀調査隊のメンバーが揃った。

それから夜が明け、いよいよ調査隊が出発した。

「瀬戸内知恵さん、確認になりますか……調査の目的は荒魂発生の一因とされる『赤羽刀』の出所を探ること。これで間違いありませんか？」

「ええ、そうよ木寅さん。だからまずは東京方面へ向かうのはどうかしら？ 目的地は別

として」

「あん？だつたらまずはこの鎌倉からでいいじゃねえかよ。アメ公が御刀ぶんどって持って行こうとした時、アイツらの船が沈んだのはこっちのほうだろ？」

呼吹の言う通り、終戦直後にアメリカが日本から御刀を運びだそうとした時、浦賀沖に沈んだのは確かだ。

ところがどういうことか、伍箇伝の調査では浦賀沖からは御刀が一本も発見されていないことになっている。

「え？ちい姉、それで何で東京なの？」

「そうですね……安桜美炎さんもご存じと思いますが、荒魂はノ口が集まり結合することです」

流石にそれは美炎も知っている。そもそも授業で習っている（それくらいの成績はある……らしい）。

「本来ノ口は無機物との結合こそしませんが、御刀は例外です。いえ、正しくは結合こそ出来ませんが、何故かノ口は御刀を取り込むとしたがります」

だが、実際に御刀を取り込むことは無い。取り込むのは錆びた御刀だけ。それが『赤羽刀』なのだ。

だがそこで疑問点が出てくる。そもそも錆びも刃こぼれもしないはずの御刀が、何故

錆びつき、荒魂に取り込まれるのか？

そもそも、取り込まれて錆びるのか、錆びてから取り込まれるのか。それすらも分からない。不自然なことが多すぎるのだ。

「う〜ん……わたしの御刀、『加州清光』は先端が欠けてるけどな……」

「それは……！非常に興味深いですね……いえ、それはさておき。そう言った理由から伍箇伝は、赤羽刀は人為的に加工され、誰かがばら撒いてる可能性がある。そう言う見解なのです」

「とにかく、今の私たちには情報が少な過ぎるの。だからまずは赤羽刀を喰^はんだ荒魂が多く出現する東京へ向かうのが得策だということ。分かったかしら？」

「なるほど……それで、東京のどこに向かうの？」

「は？荒魂ちゃんブツ倒しに行くんだろ？」

「血気盛んなのはいいですが、それが目的ではありません。まずは特祭隊の支部に赴き、近年の資料を請求して——」

「ええー！?! つつまんね〜！」

ブーブーと、文句を言うが、他に手がかりが無い以上、ミルヤの指示に従うしかないのだ。

「そうだよ、七之里さん。つまなくても、それがわたしたちの任務だよ！ね、六角さん

「？」

「……原宿」

「六角さん？」

「あん？何だよ？」

「は、原宿……いい、行きたい……です」

「ああ、原宿！良いよね、原宿……って、ええ!？」

「ばっかじゃねえの!？」

「そうですね……六角清香さん、あなたと同じ関西組として気持ちは分かりますが……
私たちは遊びに行くわけではないのです」

「そうよ、清香ちゃん。大人系女子が行くなら、原宿よりも渋谷よ！」

「そっちかい!!」

「ちい姉、違うでしょ……」

「ハア……行きたいなあ……」

「どうして六角さんは、そんなに原宿に行きたいの？」

美炎にとって、何気ない一言だったが、それが清香の何かのスイッチを入れた。

「だって原宿ですよ!?!は・ら・じゅ・く!!」

「は……はい……」

「お洒落で可愛いお店がたくさんあるし、クレープも食べたいし、もしかしたら芸能人も会えるかも！」

目をキラキラと輝かせる清香に対し、くだらねえ…と呼吹は聞く気ゼロだが、美炎も清香の話でなんとなく良いな…と思ってしまう。

「確かにクレープって美味しいよね……なんか何でも良いから甘いものが食べたくなっちゃった……」

「やっぱり原宿行きたいですよ、安桜さんも!!」

「え、なに、この子……昨日と全然違うんだけど……」

任務前だが、年相応の姿を見せる美炎と清香を見て、クスクス…と笑ってしまう知恵。なんだかんだで、彼女たちはまだ子どもなのだ。

「なんだか、見てるとホツとするわね……」

彼女たちは刀使である前に、1人の少女。戦いだけが全てではない。そんなのは、悲しいだけだ。

そして、2人の姿を見てみると、かつての光景を思い出す。

「昔はあそこに居たのよね……義勇くん……」

今、彼はどこに居るのだろうか……



「ハツハツハツ！ どうやら清香は相変わらずのようだな！ だが、それでなにより！」
「炎定、うるせえ！」

「黄瀬も静かにせよ。折角の隠密任務が台無しだぞ？」

「いや、俺が悪かった！ すまなかつたな、黄瀬よ！」

「いや、だから声がデカイ」

「(眠い……………)() () ()」

尋ね人は意外と近くに居たりする。

調査隊から少し離れた場所、定食屋で朝食を食べながら双眼鏡で彼女たちを見張る義勇たち。

「ハア……………可愛い美少女たちを尾行出来るのは良いけど、何でこのメンバーかな……………」

「まあ、そう言うな黄瀬よ。他の者たちにはそれぞれ任務がある。なにより主が我らを信じてこの任務を与えて下さったのだぞ」

ポンポン…と善逸の肩を叩きながら、焼き魚定食を食べる三日月。その善逸の方は生姜焼き定食、杏寿郎は最初は三日月と同じ焼き魚定食だったが、完食後、新たに肉じゃ

が定食を注文。義勇は鮭大根定食を眠たそうになりながらも、口に運ぶ。「ところで義勇は何故そんなに眠たそうなんだよ?」

「いや、【炎定が寝相が悪すぎて何度も蹴り起こされ、黄瀬の寝言がうるさかくて全然眠れなかったが、任務に支障が出ないよう努力するから】問題ない」

「ハハハ…富田、お前は本当に優しいな」

「え?どこが?」

「(寧ろ何故三日月は寝れたんだ……?)」

この刀剣男士は相変わらずよく分からん、と思いつながら双眼鏡で調査隊の様子を見る。とくに、先日再会した幼馴染みを。

「……美炎」



数時間後——原宿

ザワザワ…

「うわ〜…ここが原宿なんですね!みんなオシヤレですね!お店もいっぱい!ホントに凄いですね、ミルヤ先輩!」

「はい、原宿は実に良い街ですね」

「……………」

テンションMAXの清香と、特に変わらず平然とするミルヤ、そして状況が掴めないその他……

「え、何コレ？何で原宿来てんのわたしたち？」

「ごめんなさい、お姉さんには全く分らないわ」

「んだよ……結局荒魂んとこ行くんじゃないのかよ！」

「呼吹さんはちよつと黙ってて……えつと確か——」

・
・
・
・

数時間前

「六角清香さん、もう一度確認しますが、遊びに行くわけではありません。行き先が原宿だというだけならともかく、目的が遊びに行くなど……………原宿？」

何か引つかかったのか、しばらく黙り込むミルヤ。そして

「いえ……………良いですね原宿。あそこには確か『青砥館』あおとかんと言う刀剣商があつたはずですよ。」

そうですね、確かに一刻を争う任務でもありませんし、六角清香さんの言う通りでとりあえず原宿に向かう。ということではいかがですか？」

「えっ……………」

それから美炎たちに有無もいわさず、サツサと鎌倉駅へと向かいあつという間に原宿へと向かつて行つた。

・ ・ ・ ・ ・

そして、現在

「ま、まあ……………来ちゃつたからには楽しまないと損は損、だよな？」

「いや、それはそうなだけで……………」

「ちい姉？」

何か気になることでもあるのか、ちよつと歯切れが悪い知恵。しかし何か聞いても、言葉を濁すだけ。

「まあ、わたしたち西日本組は、東京なんて滅多に来られないんだから。楽しまないと損よな」

「美濃関は中部地方だよ、ちい姉。あ、アイス！アイス食べようよちい姉！あのお店すつ

「ごい並んでるよー！」

「ハア〜……面倒くせ〜……」

呼吹だけは、年頃の少女のノリに乗れず、適当にぶらつくついでに、荒魂でも探そうと、別行動を取った。

「ねえねえ、ちい姉は何味にする？わたし、メロンシャーベット！」

今朝の任務へのやる気はどこに行ったのやら、すっかり甘い物に夢中の美炎。

彼女のこんな姿を見るのは久しぶりだった。最後に見たのは、知恵がまだ美濃関に在籍していた頃。幼馴染み3人で一緒にいた頃——

「ちい姉？」

「あ、ごめんなさい！それじゃあ私は、コットンキャンデー味で」

「こつとん……きやんでい……？」

「綿菓子のことよ」

そして財布に握り締め、アイス屋へと向かう美炎。そこに清香とミルヤが合流して

「あの、あつちのお店でお洋服見てきて良いですか？大好きなブランドのお店なんです

！あ、あつちのブーツも可愛い!!」

「つて言ってるけど、ミルヤさんはどう？」

「そうですね……分かりました。では、私は六角清香さんと行動します。瀬戸内知恵さ

んは安桜美炎さんと一緒に行動してください」

「じゃあ行きましょう！ミルヤさんって背が高いから、なんでも似合うと思うんですね！」

そう言つてミルヤを羨ましがる清香。確かにミルヤは年上の知恵に近いくらい背が高い。モデル体型と言ふのだろうか。

しかし、こうしていると皆が（一人除いて）普通の少女のようだ。とても荒魂と戦う刀使とは思えない。

「もしかして清香ちゃんに影響されてる、のかしら？」

だとすれば、それはそれで嬉しいことだ。ならば自分もしっかり楽しまなければ。そう思い、美炎の元へと向かった。



「わっしょい!!わっしょい!!」

「うるせえー!!」

「お前がうるさい」

「そうだぞ黄瀬。折角の尾行がバレてしまう」

調査隊から少し離れた場所、スイーツ店で彼女たちを見張る義勇たち。彼女たちが原宿に向かうと分かり、慌てて交通費を皆で用意して、ここまで付いて来た。

そして彼らも何かと原宿を満喫している。

「わっしょい!! わっしょい!!」

両手いっぱいのスウィーツポテトを持つ杏寿郎と

「ふむふむ……現代の菓子も中々良いな……」

揚げドーナッツを頬張る三日月

「(カステラ……美味い……(???)」

ミニカステラを口いっぱい頬張る義勇。そして

「あ、お姉さくん ちよつとあなたの心の奥まで尾行しても良いですか?」

「お巡りさくん、変態でくす」

「いや、俺も一応お巡りさんんだけど!」

4人目のナンパに失敗する善逸。

「てか、俺たち任務は!」

「……………大丈夫、忘れてない」

「その間はなんだ!」

「すまないが、この、”どーなつつ”とやらのお代わりを頼——」

「頼むな三日月!!」

「わっしょい!! わっしょい!!」

「お前は、いい加減黙れ!!」



ピピピッ!

ピピピッ!

ピピピッ!

「っ!」

アイス店で並んでいた美炎と知恵のスペクトラムファインダーからアラーム音が鳴り響く。

「荒魂が近くに!?! えっと、場所は……代々木公園……そこから来てるみたい! ちい姉、早くみんなと合流して迎え撃たないと!」

「ええ!」

列から離れ、急いで他のメンバーの元へと向かう美炎と知恵。

街の人たちも何か異変を感じてはいるが、まだ詳細は分からないようだった。そこに街頭放送が街中に広がる。

『緊急放送、緊急放送……現在、竹下通りで荒魂が発生しています。機動隊が到着するまで現場には近付かず、警察、刀使の誘導に従い、迅速に避難してください。繰り返し。繰り返します——』

その放送を聞き、最初こそ慌てる人々だったが、誰かが避難誘導に協力してくれているのか、次第にスムーズに避難しはじめた。

美炎たちも、他のメンバーと合流し、荒魂の方へと向かう。

現場には、小型であるが、顔だけ大きい数体の荒魂が電柱や乗り捨てられた車に齧り付き、破壊していた。

「放送が……管轄の刀使の人たちが動き出してくれたんだね！」

「でも、今ここには、私たちしかないから！」

「へー！狩り放題じゃねえか！コイツらはアタシが全部狩り尽くしてやんよ！」

そう言い、呼吹は御刀を抜き、1人先走り荒魂との戦闘を始める。

「待て、七之里呼吹！突出するな！荒魂をそちらに追い込んで民間に被害が出る！」

ミルヤが叫ぶが、喧噪の中にある呼吹の耳には届かなかった。

「（どうするべきか……？ここは安桜美炎に呼びに行かせる……いや、おそらく彼女では七之里呼吹を呼び戻すことは出来ない。戦術としては下の下ですが一度……いや、それで本当に大丈夫だろうか……？）」

『木寅さんはなんでもかんでも難しく考えすぎだよ?』

「(っ!!)」

『あなたが迷っちゃ、部隊のみんながケガしちゃうよ。迷うくらいなら、1番手つ取り早く、真っ先に思いついたことを試すのも良いんじゃないかな?』

こんなとき、頭の中に綾小路のとある後輩の言葉が蘇る。いつも狐のお面を頭に着けている、1つ下の後輩の言葉。

そこまで言うのなら、そうさせて貰うことにしよう。

「瀬戸内知恵さん、こちらはお願います!七之里呼吹を呼び戻すまで持ちこたえてください!」

「えっ、ミルヤ!?!」

知恵が止める間もなく、ミルヤや呼吹の元へと目指し走って行った。

「あのーわ、私は……私はどうすれば……」

オロオロと、自分だけどうすれば分からず、御刀も抜かずにいると、荒魂たちが清香

にターゲットを絞った。

』

』

「えっ、きやあつ!？」

「清香ちゃん！」

「ちい姉は六角さんを守って！私一人でどれくらい持つかわからないけど……頑張つて敵を引き付けておくから！」

「美炎ちゃん……直ぐに戻るからね！」

そう言つて、知恵は直ぐさま清香の元へと走る。そして美炎は宣言通り、知恵の後を追おうとする荒魂たちの前に立ち塞ぐ。

「ここから先には、行かせないよ！」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「……………」

「おい、富田！ぼおーとしてないで、避難誘導手伝えよ！」

街頭放送で荒魂が発生したと聞き、義勇たちは任務を一時中断、避難誘導を手伝うこ

とに。

そんな中、義勇は何かを感じ取った。

「富田、どうしたんだ？」

「……………三日月」

「うん」

「頼んで良いか……………」

「……………ああ、承知した」

「はあ!?こんなときに何を——」

「まあまあ黄瀬よ、ほとんど避難誘導も終えている。逃げ遅れがないか確認に行くだ

けだろうか?」

「……………ああ」

「だからなんだよ、その間は!」

「では富田、俺も同行するでしょう! 2人いれば効率も良いだろう!」

「……………行くぞ」

そして三日月と善逸に後を任せ、義勇は杏寿郎と共に荒魂が発生したとされる現場へと向かった。



「清香ちゃん！ぼおーとしてないで！荒魂がそっちに行つたわ！」

「あ、ご……ごめんなさい！わ、わたし……きやあつ！」

『！』

なんとか清香の元に駆け寄ろうとするが、荒魂の方が早い。直ぐに清香に避けるように言うが、恐怖でか、足が思うように動けないのか、その場に転んでしまった。

チャンスとばかりに、荒魂が清香に目掛けて突撃してくる。

「清香ちゃんっ！」

「させないっ！！」

ザシュツ！！

『！？』

迅移で清香に目掛けて突撃していた荒魂をすれ違いさまに斬り割く美炎。

それにより荒魂は悲鳴をあげ、ドロドロのノロになつていく。

そして、清香を狙おうとしていた荒魂たちを引き付ける美炎。その間に、清香を守るように彼女の前に立つ知恵。清香は頭を抱え込み、地面にうずくまっていた。

「いや……いや……助けて……助けて……」

ブルブル震える清香。御刀にも手を伸ばそうともしなかった。

「(分かつてはいたけど……もしかして六角さん、刀使なのに戦うのが怖い……?)」

刀使には呼吹のような刀使はいるが、清香のような刀使は初めて見た。何故刀使になつたのか分からない。

「(私は清香ちゃんを守るので手一杯! 美炎ちゃんだつてそんなに長くはもたない……)」

状況はあまり良くない。このままでは負傷者が出る可能性がある。

誰か

せめて誰かあと一人

ミルヤたちが戻るまで保たせられたら――

「ヒュウウウ……」

「フウウウ……!」

「「っ!」」

突如、聞いたことのある呼吸音と、初めて聞く呼吸音、そして何者かが走って来る足音。

それがだんだんと近付いて行き――

「水の呼吸……肆ノ型……」

ザバアアアー!!

「炎の呼吸……肆ノ型っ!!」

ボオオオオー!!

「打ち潮」

「盛炎のうねりいー!!」

淀みない水流の斬撃が、美炎の前にいる荒魂たちを次々と斬り裂き。燃え上がる炎の障壁が、知恵と清香を狙う荒魂たちを薙ぎ払う。

『——!!』

瞬く間に荒魂たちはノロへと溶けた。美炎たちは、何がどうなっているかまるで分からなかった。

だが1つだけ分かるのは、彼らが美炎たちを守ってくれたと。

水のような蒼い刀身の刀、見たことがある左右非対称の羽織。もう1人は見たことない白い羽織に炎のように紅い刀身の刀。

顔は美炎たちとは逆方向に向いているし、帽子のようなものを被っているので、顔は見えない。

だが、その内の1人は分かる。それは

「ぎゃ、ぎゃゆ——」

バツ！

「ま、待ってっ!!」

美炎が声をかけようとしたが、その前に彼らは一気に建物の上へと飛び上がり、何処かへ行ってしまった。

それを何も言えず見送ってしまおう美炎。

「美炎ちゃん……」

「うん……来てたんだね……」

「そうね……それじゃ私は、清香ちゃん見てくるから」

「分かった」

そして知恵は未だにうずくまっっている清香の元へと駆け寄った。

「清香ちゃん、もう大丈夫よ」

「……………はい……………す、すいませんでした……………」

知恵に手を差し伸べられ、その手を掴み立ち上がる清香。そして周りのノロへと化した荒魂たちを見渡す。

「あの、コレって……………」

「ごめんなさい清香ちゃん、ちよつと話を合わせてくれないかしら?」

「は、はい……………」

それから知恵に言われ、この荒魂たちは救援に来てくれた付近の刀使たちと協力して自分たちが討伐した、と言う事になった。

何故そんな嘘をつくのか気になったが、清香は大人しく従うことにした。

「そういえば……………」

「ん？どうかした？」

「い、いえ！なんでも……」

そして知恵が美炎を呼びに行っている間、清香は先ほどの声を思い出す。

地面にうずくまっついて、顔や姿は見ていないが、声だけは聞こえていた。

まるで炎のように熱い声。その声の主も、まるで炎を擬人化したような人だった。

「もしかして……師匠……？」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

美炎たちを手助けした後、義勇と杏寿郎は人気のない裏道に入り込む。

そして杏寿郎は近くの電柱へと手を伸ばし思いつきり——

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

——頭をぶつけた。

「情けないな！いくら後輩のピンチだつたとは言え、迂闊に対象に姿を見せ、あまつさえ呼吸法の技を見せるなど！この炎定杏寿郎、まだまだ未熟！」

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

何度も未熟！未熟！と電柱に頭をぶつける。何度もぶつけるうちに、電柱に赤いシミが出来はじめた。そこに義勇が止める。

「炎定、止めろ」

「富田、お前を止めることも出来なかった！本当にすまない！」

「いや、俺が先に考え無しに刀を抜いた。俺の責任だ。だからもう止めろ」

「しかし……………」

「それと、電柱が折れそうだから止めろ」

見ると、杏寿郎がぶつけたところから、電柱全体にヒビがはしっていた。

「それに…………アイツらは俺たちのことを話さない」

「それは何故だ？」

「……………美炎は話さない」

全然説明になっていない義勇。だが、彼がここまで言うのは珍しい。ならばここは――

「分かった！富田がそこまで言うのなら、俺も信じてみよう！」

「……………すまない」

そして2人は、三日月たちの元へと合流に向かった。



「木寅さん、七之里さん！よかった、無事で……」

「こちらをお任せして申し訳ありませんでした。木寅ミルヤと七之里呼吹、これより調査隊に合流します」

ようやく呼吹を連れ戻し、ミルヤが美炎たちの元に戻って来た。

そして、調査隊の指揮権をミルヤに戻し、ようやく真面な調査隊に戻った。

「ちっ……おい！ちんたら話してねえで、早く親玉荒魂ちゃんと遊ばせてくれる約束だろうが！だから帰って来てやったんだぞ！」

「そうでしたね……こちらの荒魂は？」

「えつと……この辺りの管轄の刀使の方々の協力を得て、なんとか討伐出来ました……」
知恵が打ち合わせ通りに話し、ミルヤが周囲を見渡す。確かに彼女たちと分かれる前にいた荒魂は全て倒された後だった。

「（この数を彼女たちが……？）こちらが不在の間、ありがとうございます。それで、その刀使はどちらに？」

「あつ！それが、まだやることがあるって言って、何処かに……」

「そうですか……」

「なんだよーアタシの荒魂ちゃん倒しまったのかよ!? あくあく、それならもつと遊んどきやよかつたぜ……」

不満そうにブツブツ文句を言う呼吹。そんな彼女を放つて、ミルヤがノロ回収部隊に連絡した。しかし、別の場所でも荒魂が出現したらしく、回収部隊は少し遅れるようだ。近くの警官隊に現場を引き継がせても良いとあったので、調査隊はもうしばらくその場に待機し、やって来た警官隊に後を任せ、青砥館へと向かった。

それから30分後：

入り口に刀を飾っている店の前に、調査隊一行が着いた。

『あおとかん青砥館』、刀の鞘や柄の制作、刀の手入れや鑑定に売却、刀の販売から取り寄せまで出来る。

刀使の多くは刀剣類管理局から支給される鞘を使うが、人によつては青砥館のような店に頼む者もいる。

それこそ、鞘や柄の柄巻きだけでなく、鐔の目抜きから縁に至るまで刀身以外の全てをオーダーメイドする者もいる。

「——そんな刀使たちにとって、この青砥館は言わずとしいれた名店であり憧れなのです！」

そう力説するミルヤ。彼女がここまで語るのは初めてであった。

「学内で拵こしらえに関する職人を積極的に養成していて、元々、拵に工夫をこらす者の多い美濃関の生徒でさえもここを鼻ひいき戻もどしている方も多いのです！」

「な、なるほど………」

「もっとも、安桜美炎さんは美濃関の方ですから、知っていると思いますが」

「うぐつ!?………すいません、全く知りませんでした………」

「そのお話よく分かります！御刀にとって白鞆しろたきやはあくまで普段着！拵一式は女子の勝負コーデみたいなのなのです！」

「その例えはどうなんだろう……?」

確かに分からないこともない。

だが御刀は人々を守るためのもの。

刀使にとつてはかけがえのない相棒。

少なくとも美炎はそう考えていた。

「いえ、美炎さんは分かっています！良いですか?『勝負コーデ』と言うのは、つまり

『デート服』みたいなものなのです！女子にとつては戦闘服と同じものなのです！」

「フント！と強く語る清香。とても先ほどまで腰を抜かしていた少女とは思えない。

「てゆうか、えっ!?六角さん、で、でででデートしたことあるの!?!」

「この子、進んでる！なんて恐ろしい子っ!!」

と、改めて感心すると

「///あ、ありません……」

「えっ、なんて?」

「///そ……その、本とか読んで………憧れてるだけで………実際は………」

「なんじゃそりゃ!!（ベシツ!）」

「……そろそろ良いですか?店の前で立ち話でもなんですので、まずは店主にご挨拶を

———

「それには及ばないぜ」

店の中から声がし、振り返ると和服を着た少し年老いた男性が店から出て来た。

「いらっしやい、俺がこの店の主、『青砥あおと 陽司ようじ』だ。可愛いお嬢様方が5人も。より取

り見取りじやねえか?」

店から出て、美炎たちをぐるっと見渡す青砥館店主。制服がみな違う彼女たちは、彼

にとつてはちよつとしたお花畑のようだった。

「か、可愛い……」

「お嬢様……」

「／＼やだ、神がかつた別嬪さんだなんて……（ポツ）」

「いや、そこまで言つてねえよ？」

「何か言つたかしら、七之里さくん？」

「イエ、ナンデアリマセン」

「ハア……申し訳ありません、騒がしい者たちばかりで……」

ミルヤは店主に頭を下げるが、店主は良いの良いの！と笑つて答えた。

「若い子はこれくらい元気があつて丁度良いんだよ！それより、刀身以外なら何でも相談にのるぜ？もちろん、サービスもしとくぜ！」

バシンツ！

そこに店主の背後から彼の頭を誰かが叩いた。

「ちよいとおとん！お客さんに色目使うのいい加減やめてよ！恥ずかしいつたらありやしないー！」

そう言つて背後から出て来たのは練府の制服を着た少女。

青砥館の一人娘の『青砥 陽菜』である。御前試合に合わせて現在里帰りという名の手伝い。試合後には、多くの刀使たちがこの店を訪れるのだ。

「そうだ！あなたたち今日と明日、お店手伝ってくれない？ご飯とお布団なら幾らでもあるからさー！もちろん、格安で御刀の調子も見ますよ？」

「いえ、我々には任務が……」

「ほら陽菜、お客さんをいつまで店の前に立たせるつもりだ。さっさと中に入れてやれ」「なっ?!元々はおとんが——」

口喧嘩をしながら店内へと入っていく青砥親子。

結局調査隊一行は、青砥館でそのまま一泊する事となった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、その様子を監視する公安零課の三日月たち。

「ふむ……青砥館に入って行ったか……」

「どうする、このまま青砥館に張るか？あそこって確か、舞草と繋がりがあるんだらう？」

「して……如何する、富田？」

「……審神者から、先ほど近くに宿を手配したと連絡があった」

「あの店には公安の別の課が見張りをしてくれそうさ。我々はその間、宿でゆっくり体を休めるとしよう！」

「よっしゃー！ やつと真面な宿にありつける！」

「では、向かうとするか」

「ああ……………」

「因みに主には、彼女たちに呼吸法の技を見せたことは？」

「……………まだ」

「……………後でちゃんと報告しろよ？」



無想の剣 VS 刀鍛冶

羽島学長の知り合い『恩田 累』により、彼女のマンションへとやって来た可奈美たち一行。

シャワーを浴び、食事を済ませ、テレビをつけてニュース番組を見る。

ニュースには、今日芸能人が一日駅長したことや、動物園からサルが逃げ出した等が流れ、最後に御前試合に関するニュースが流れた。

可奈美や姫和は、緊張しながら見るが、彼女たちが折神紫を襲撃したことは一切報道されなかった。まるで何事無かったかのように。

とりあえず一安心していいのか分からないが、可奈美はテレビのチャンネルを変えて、他のニュース番組をチェックする。しかし、やはり何処のニュース番組も2人のことは報道されていないかった。

「警察発表はされていないみたいだね」

「……………あなたは何を、どこまで知っていますか？」

累が缶ビール片手に話しかける。そこに未だに御刀を片手に持つ姫和が尋ねた。

「一応羽島学長から一通り。まさかあの英雄の折神紫に御刀を向けるなんて。まあ、余計な詮索はしないけど。学長からも言われてるしね。もちろん、あなたたち^{セイバーたち}のことも」
「聞く必要がない、の間違いでは？」

「……ノーコメントで」

そして累は明日、仕事が早いということで、先に自室へと行った。留守の間は、この部屋は好きに使って良いとも言つて。

「……さっきのはどういう意味だ？」

「さて、君たちも寝なさい。僕ら2人は交代で外を見張ってるから」

「え、寝ないの？」

「2人は気にせず、ゆっくり休んでくれ」

「げっ!? またかよ……」

「当たり前だ（いつ時間遡行軍が介入してくるか分からないからね）」

「了解……（それもそうだな）」

セイバーたちもリビングに用意された布団の上に座り、まずセイバーがカーテンの間から、外の警戒にあたり、和泉守が先に仮眠を取った。

可奈美もセイバーの言葉に甘え、彼女たちに用意された和室に向かおうとした時

「可奈美、少しいいか……?」

「?」

和室に入ってから、姫和は可奈美に彼女が見たと言う折神紫の背後のものについて聞いてきた。

「えつと……一瞬だったからよく分からなかったけど……姫和ちゃんを睨んでるように見えたの」

「睨む? 荒魂が……? それはどんな形だった?」

「うん……形と言うか、なんというか……ギョロツとした目がある感じで……」

「目、それは確かか?」

「うん、それは確かに」

「何故言い切れる」

「そりゃ刀使だから!」

「……………一瞬と言ったな。気配が消えたと言うことか?」

「ううん。なんて言うか……刀使が写シを張る時の感じに似てたかも。えつと、かくりよ隠世? つてとこに潜った感じかな? ご当主様が御刀を抜いた時に見えたから……」

「隠世から取り出した……!」

姫和が紫に刃を向けた時、紫が使った御刀は『大典太光世』と『鬼切安綱』。どちらも

名高い名刀、オリジナルは折神家が保管していると聞く。しかしその御刀の存在は聞いたことがない。もしかすると、隠世に保管しそこから取り出したと言うことになるのか。

「(だとしたら、他にも名高い名刀を持っているのか……?)」

「ねえ、セイバーたちと協力して、みんなにご当主様のことを話して、みんなで倒せないかな?」

「それが出来たら既にやっている。刀剣類管理局や特別祭祀機動隊は既に折神紫が完全に掌握している。揉み消されて終わりだ。しかも、警察組織とも繋がりがあるから、警察も当てに出来ない」

「うう……ダメか」

どうするべきか……そう考えてた時、ふと可奈美が聞いた。

「ねえ……姫和ちゃんはやっぱりもう一度ご当主様に挑むつもりなの?」

「ああ。2度目は無いと思っていたが、この命がある限り、必ず大荒魂を折神紫ごと倒す」

「…………それは無理だと思う」

「なに?」

「なんとなくだけど……ご当主様の实力は桁が違いすぎる。姫和ちゃんがもう一度挑ん

でも、たぶん同じになると思う」

「……………」

そんなこと、言われずとも姫和が一番分かっている。分かっているが、挑むしかなかったのだ。

それが姫和の使命であり、彼女の生きる理由なのだから。

「(それに…………)」

ふと、部屋の外にいるセイバーたちのことを思う可奈美。

荒魂を倒せる彼ら。その実力は自分たちを遙かに凌ぐ。そしてあの時、彼らは本気ではなかつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

チクタク…

暗い部屋の中、時計が静かに音をならす。

そしてカーテンの隙間から月日が僅かに入り込んでいる。その光を頼りに、セイバーはスマホに届いた審神者からの連絡を見ていた。

「(練府が本格的に…………遂に我慢の限界らしいな…………折神紫と親衛隊は未だに本部から

動く気配無しか……)」

「Z z …… Z z ……」

隣ではぐつすりと眠る和泉守。そろそろ交代だが、もう少し寝かせようと思うセイバー。

「(村正は配置完了……これで準備は良いな……)」

そして、可奈美たちが寝ている部屋の方へと向く。

「とりあえず、今のところはこちらも問題なしと……」

ポチツと返信を送ったセイバー。ふう〜と一息を入れてキッチンへと向かい、コップに水を入れひと飲み。

「それにしても、可奈美がああの迅移を見せていたとは……」

姫和が見せた迅移を超えた迅移。それを捕らえることが出来たのは、あの会場内で、零課でも練度が高いセイバーと和泉守、菊一文字ぐらいかと思っていたが、まだ少女の可奈美も目で捕らえていた。

「流石、『藤原美奈都』さんの娘か……それとも……」

それから少しして、和泉守と見張りを交代し、眠りについた。



? ? ?

「相手が小手狙いで来たら後詰めに持ち込んで……引いて上段で来たら、合い掛けに仕掛ける——」

白い霧でほとんど周囲が見えない空間。

僅かに大きな鳥居と、長い階段が見える。

その階段に腰掛け、ひたすらイメージトレーニングをするある御刀を持った黒い学生服を着た少女が一人。

「じゃあ下段で来たら……えつと……」

「くねり切りで良いんじゃないかな?」

そこに、下から可奈美がやって来た。すると学生服の少女は待つてました!と言わんばかりに立ち上がり

「来たね、いやあく退屈でホント死ぬかと思ったよ?」

「ははは……(本当はもう死んでるけど……)」

「そんじゃ、いつものやりますか! って……どしたの、元気無いじゃん?」

一目で悩みがあることを見抜く学生服の少女。流石だなく……と思い、ここ最近のこと

を彼女に話した可奈美。

「そつかく……そりや、大変なことになってるねえ……」

「うん……私の勝手に、舞衣ちゃんに迷惑かけてるし、美炎ちゃんや羽島学長、美濃関のみんなに心配かけちゃって……」

「けど、可奈美のその行動で、もう1人の友達を助けられたんでしよう？可奈美の行動は確かに可奈美らしいと思うよ。だから、友達も何も言わずに送り出してくれた。心配をかけた人たちには、全部終わったらちゃんと謝ればいい」

「そう……かな？」

「そうだよ！それに、可奈美は1人じゃない。そのセイバーって言う人たちも可奈美の行動を認めてくれてるんでしょ？」

彼女の言う通り、セイバーは可奈美の意志を尊重してくれた。可奈美の行動を支持し、迷えば導いてくれる。

そんな彼の行動こそ、褒められたものだと思う。そしてそんな彼の背中には誇らしく、どこか寂しさを感じさせる。

「ねえ……もし、誰にも言えないくらい重いものを背負ってる人が目の前にいたら……どうすれば良いと思う？」

「うくん……それは……」

「それは？」

すると、学生服の少女はニコツと笑いかけ

「可奈美、それはもうあなた自身が分かっていると思うよ」

「えっ、それって——」

「さあ！揃っ立ち会いしよっか、立ち会い！」

「ええ〜!? 教えてよ〜！」

「それじゃ、私に勝ったら教えてあげるよ！」

「よし、今日こそ私が勝つよお母さん！」

「かかっておいで、私の可愛^可い弟子^{奈美}！」



翌日 鎌倉

「可奈美、まだ見つからないのかな〜？」

「舞衣も残るって言うし……」

「美炎もなんか任務で行っちゃおうし……」

「一体どうなるのかな……」

ようやく御前試合に来ていたそれぞれの学院の生徒たちは解放され、それぞれの学園に戻ることにあった。

ただし、今回の事件は他言無用、口外はするなど命令を受けて。

そして、美濃関の仲間たちが高速バスに乗り込む様子を離れた場所から見送る舞衣。

「みんな、ごめんね……ん？」

ふと、隣に止まっている車を見ると、銀髪の刀使が車に乗り込んでいた。その顔には見覚えがある。

「あの子……確か練府の代表選手の——」

「Hay、Ladyヤナセ！」

突如、英国とカタコトの日本語で声をかけられ、振り向くそこにはまるでこれからバカンスにでも行くのかと思うような各国をした2人組。

彼女たち顔も見覚えがある。

「あなたたちは長船の……」

「YES！ 『古波蔵エレン』 デース！ こっちはカオル」

「『益子薫』だ……」

「任務ご苦労さまデシタ！お友達のこと心配だけど、落ち込まないで下サーイー！」

「は、はあ……」

初対面の相手を慰めてくれるいい人なのだろうが、ちよつと調子が狂うような相手だな……と思う舞衣。

「ご挨拶出来て良かったデース！ワタシの両親とアナタのDaddyはお仕事のパートナーデースからね！」

「えつ、父と？」

舞衣の父親、即ち柳瀬グループとエレンの両親は仕事で繋がりでもあるのか。そう思ってた時、隣の薫が面倒くさそうな顔をして

「おい、エレン……早くしろよ……」

「そう言えばそう格好、これからどこへ？」

「ワタシたち、やつと自由にナリマシタ！なのでこれからVacationデース！」

「絶好の海日よりだからな！」

『ネー！』

ヒョコツと薫の頭から出て来たのは、リスのように小さいが、明らかにリスとは違う生き物。

「それって！荒魂じゃあ？！」

「違う、オレのペットだ。名前は『ねね』」

「ねねはカオルの友達デース」

『ネネー!』

よろしく!と鳴く荒魂こと、ねね。すると、その視線は舞衣の顔から下の方へと下がっていき

「?どうかした?」

胸「キラキラ?」

『ね、ね、ね……ねねー!』

何か目つきがいやらしくなり、ピヨンと舞衣の胸へと飛び込んで――

ガシッ!

「やめろ、エロ荒魂」

『ねねっ!』

「こんなことしてねえで、サツサと行くぞ」

『ねね……(涙)』

「では、また会いましょう! See you, マイマイ!」

バイバイ!と手を振る彼女たちに、とりあえず手を振り見送る舞衣。最後まで、彼女たちのペースに飲まれてしまった。

「え、『マイマイ』って私のこと？」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

刀剣類管理局本部 休憩所

「お疲れーつす」

「お疲れさん」

「なあ、今日飲みに行こうぜ？」

「いいねー」

事件はまだ片付いていないが、休憩所にはそこそこの局員たちがくつろいでいた。

その中には、局員の制服を着た鶴丸が紛れ込んでおり、スマホを眺めていた。

「（えーと……長船は岡山に向かって先ほど出発。薬研と蜻蛉切が追跡を開始と……まあ、舞草の本拠地だからなあそこは……）」

ピコン♪と、また通知が表示され、今度は村正からだった。

「（セイバーたちのマンションに到着、これから2人のサポートにまわる、ね……あの爺さん、珍しく張り切ってるな……）」

そして、スマホをポケットに入れ、飲み干したコーヒーをゴミ箱に放り投げる。

「さて、俺も仕事しますか！」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
累のマンション

ポオオ……

朝になり、累は既に出掛けた後、姫和は御刀を抜き精神を集中させ、状態を確かめる。
「……………よし、完全に回復した」

これでまた全力を振るえる。だが、それでこれからどうするのか。

セイバーは朝早くにゴミ袋を持って累と同じぐらに出掛けた、と和泉守が言っていた。つまり今この部屋には、姫和と可奈美、和泉守の3人が残っていることになる。

すると、隣の居間でガチャガチャと音がした。何事かと思えば、可奈美が昨日セイバーたちが片付けたゴミ袋をまとめようとしていた……………のだが

「さつきより散らかってないか？」

「うう……………お世話になったから、せめて掃除しようと思ったのに……………(T—T)」

「……………和泉守はどうした？」

「冷蔵庫がほとんど空っぽだったから買い物に行く……………」

つまり、この散らかった部屋を彼女たちだけでなんとかするしかないようだ。

「(〜)〜(〜)……」

「ふ〜ふ〜ふ〜ん〜♪」

「これは燃えるゴミ……こつちは……」

それから数時間……姫和の指示であつという間に片付いていき、昼頃には掃除だけでなく、溜まつていた洗濯物や洗い物全部片付いていた。

「だいたいこんなもんかな？」

「スゲえな、帰って来たら昨日と全然違う……」

あまりの部屋の片付き具合に、危うくパンパンの買い物袋を落としそうになる和泉守。

それほどまでに、あのゴ〇ブリが出てくるような部屋が綺麗になつていたのだ。

「凄いでしょ！凄いでしょ！ま、ほとんど姫和ちゃんのおかげだけだね！（ドヤ顔）」

「何故お前が威張る……それにしても、ホントに凄いな十条」

「別にこのくらい……」

なんてことない、と言うかのようにキッチンで和泉守が買ってきた食材を冷蔵庫にしまし、

「いやいや、実際に凄いだらう。俺とセイバーじゃ、こうはならなかったぜ。月並みだが、お前は良い嫁になれるぜ。その相手が羨ましいぜ」

「……………そうか」

そう言い、姫和は冷蔵庫に和泉守が買ってきた食材を入れる。和泉守は可奈美を手伝い、ゴミ袋をまとめ玄関の方へと運んだ。

そしてその時、和泉守は気付かなかった。姫和の耳が少し赤くなっていたことを。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

管理局本部 指令室前

「ハア……………」

指令室で報告を終えた舞衣の表情は暗かった。練府学長の高津学長にこつぴどく叱られた後だからだ。

「何故逆賊を捕らえなかった!？」

「ノロの回収など後回しにしろ！」

「討伐など……まさか逃亡を手助けした訳ではあるまいな!？」

確かに舞衣の任務は可奈美たちを捕らえること。だがそれ以前に彼女は刀使。目の前の荒魂を放置する事こそ如何かと思う。

だから舞衣は、その事を高津学長に言った。

「わ……私は刀使、です……荒魂から人々を守るために、私たちがいるのでは、ないので
すか？」

「なんだと、貴様っ!!」

「っ!!」

流石に言い過ぎたと、後から思った。高津学長の怒りが高まっていることを、離れた場所にいる舞衣にも十分伝わるほどに。

そして、高津学長が舞衣の元にズカズカ近付こうとしたが、親衛隊の真希がそれを止めた。

「高津学長、彼女の言うことは確かです。それを咎める理由はありません」

「貴様っ！紫さまの親衛隊のくせに！」

「親衛隊である前に、自分も彼女と同じ『刀使』です。あなたもかつてはそうだったでしょう？」

「……………ふん！」

その後、真希に言われ舞衣は指令室を後にしたのだ。

部屋を出た後、彼女の手は汗だらけで震えていた。

分かってはいる。自分のしたことは命令違反であることを。あんなことは言い訳に過ぎないと。

けれど——

「柳瀬さん」

「っ……………羽島学長……………」

声をかけられ、振り向くと羽島学長が舞衣の元にやって来た。

「大丈夫、柳瀬さん？」

「すいません、羽島学長……………この重大さは分かっています。でも！私は可奈美ちゃんを信じて——」

「柳瀬さん」

ニコツと笑いかける羽島学長。そして舞衣の耳元に近づき、周りに聞こえないように呟く。

「衛藤さんたちなら、大丈夫よ」

「えっ、それって……?」

何故彼女がそんなことを言えるのか?そして、歩き出した羽島学長の後について行くとうとした時

「ねえねえ、せつかく見つけたのに逃げられたってホント?」

今度は誰かと思ったら、これまた予想外の人物だった。

親衛隊の制服を着た、小柄の少女。

「親衛隊第4席の……!」

「(ニヤツ)」

ヒュンツ!

「……!?!」

「アハハッ!弱い弱い〜!」

一瞬だった。一瞬の迅移で間合いに入られ、御刀の刃先が舞衣の頸元を捕らえた。

舞衣に全く反応させず。あまりにも自然に、また鮮やかに。

「そもそもお姉さんじゃ、あの人たちには勝てないよ？」

「っ！」

「燕さん、御刀を納めない」

羽島学長に言われ、はあーい、と大人しく御刀を鞘に戻す結芽。そしてもう興味を無くしたのか、舞衣たちの元から去って行った。

「やっぱりあのお姉さんたちじゃないとダメだなく……あのお姉さんたちを倒せば……菊兄に追いつける……！」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

累マンション近くの公園

無邪気に遊ぶ子どもたちや、会話を楽しむ老人たちでいっぱい公園。その中のベンチの1つに腰をかけるセイバー。

鬼ごっこをして楽しむ子どもたちを見ながら、少し和んでいる彼に、背後から気配を感じる。

「……………任務、ご苦勞さまです」

「いえ、仕事ですから……………」

背後には、黒スーツを着た男性。男性は誰にも見られないようにセイバーの隣の席に小さな封筒を置く。

セイバーは封筒をあけ、中を確認する。

中には管理局に潜入している鶴丸と菊一文字、赤羽刀調査隊の監視をしている義勇たちの状況を記したものだっただけだ。

「では、私はこれで」

フツと、気配が消える。どうやら行ってしまったらしい。だかセイバーは気にせず、中身を読む。

「（長船が行動開始、薬研と蜻蛉切が追跡中……………赤羽刀調査隊は原宿の青砥館にて情報収集……………そして——）」

その先には、セイバーがずっと気になっていたことが書かれていた。

「（ここ）最近、次元の歪みを頻繁に観測……………か」

そろそろ、本格的に事が進むかもしれないことを、感じ取るセイバー。

そして、報告書を封筒に戻し封のせんをなぞると

ポオッ！

一瞬で封筒が燃え、灰になった。

「そろそろ、戻るか……」



累の部屋

グツグツ…ジュウ…

キッチンから姫和の作る煮物の美味しそうな香りが、部屋中に広がりつつあった。

その隣では、和泉守がフライパンで豚肉を豪快に焼いている。

「うわ〜！ 姫和ちゃんと和泉守さん、料理上手だね！」

「料理上手の知り合いたちから少し教わってな、まだ難しいものは出来ないが、これくらいは出来るぜ？」

和泉守の記憶に、台所に立つ2人の刀剣男士の姿が浮かび上がる。

「私は以前、母親によく作っていたからな。最近は滅多にしくなくなったが……」

それでも、体は覚えているものだなと思う姫和。

「お母さんに？」

「ああ……私の母も元刀使だったんだが、長患いで去年、亡くなった……」

「………そっか、姫和ちゃんのお母さんも………」

「………」

隣で聞く和泉守は、2人のその辺りの事情は知っていた。だが、やはり良い気分なものでは無い。

「ん………」

「な、なんだ?!」

すると、和泉守はワシヤワシヤ…と姫和の頭を撫でた。

「いや………なんとなく………」

「?」

一体何なのだ?と思う姫和だったが、僅かに感じる和泉守の温もりと優しいさを感じとり、それ以上は何も言わなかった。

そんな光景をフッフ…と笑う可奈美であった。

ガチャ…

「ただいま〜」

と、そこにセイバーが戻って来た。

「あ、お帰りセイバー」

料理中の2人に代わって、可奈美が玄関でセイバーを出迎えた。
「あれ、それどうしたの？」

帰って来たセイバーの手に、ビニール袋が握られていた。買い物なら、和泉守が行っていたはずだが。

「ああ、コレはね——」

ガサゴソ…とセイバーが袋から取り出したのは、パックに入った真っ白な大福餅であつた。

「うわー、大福餅！」

「食後のデザートにね」

やった！と喜ぶ可奈美の見て、良かったと思うセイバー。

それから、可奈美とセイバーで食器類を準備し、姫和と和泉守が作った料理をリビングのテーブルに広げる。

そこにタイミング良く、累が帰って来た。

彼女は、まるで引越した時のように綺麗になっている部屋と、食欲がそそられる料理を目の前に驚きを隠せずにいた。

「うわー！どうしたの、これ!？」

「えへへ……お世話になっているお礼に、私たちでお部屋のお掃除と料理を作りました！」

「ありがとう〜！凄く嬉しいよ！」

累の喜んだ笑顔で、やったね！と姫和たちに振り向く可奈美。セイバーや和泉守はやったね！と笑い返してくれるが、姫和の方は、別にこれくらい……と言いたそうだった。だが、僅かに照れていたことを可奈美は黙ってあげた。

その後、食卓について累は早速、和泉守の生姜焼きに箸を伸ばす。

「モグモグ……うん、タレの味が効いてて肉汁も溢れてくる〜！」

「ま、格好いいだけが取り柄じゃないんでね！」

「あれ、そうだったけ？」

「喧嘩売ってんのかセイバー?！」

男2人は放っておいて、次に累は姫和の煮物を口に入れる。

「う〜ん！こつちも中までしつかり味が染みこんでて美味しく！姫和ちゃん、意外と女子力あるね？」

「／／／／べ、別にそんなことは……」

普段は強気な姫和は、一日にこう何度も褒められるのは慣れていないのか、また少し顔を赤める。

「姫和ちゃんいいな、私はあんまり料理得意じゃないし……」

可奈美がそう呟くと、セイバーが

「別に料理が出来るか出来ないかが女性の全てじゃない。可奈美だって、他の人には負けない魅力があるよ。困ってる人がいれば、真っ先に助けてあげる、その優しさや色々。だから可奈美だって他の人に負けない魅力があるんだよ」

「セイバー……ありがとう！」

セイバーに言われ、エヘッ……と少し照れながらも笑いかける可奈美。
すると累は、何故か目元を押さえる。

「つゝゝゝ!!私にもあったな……こんな青春時代が……!」

「?」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

刀剣類管理局 指令室

「場所をようやく特定したわ。部屋の持ち主は『恩田累』。元美濃関の刀使で御刀は返納済み、現在は『八幡電子株式会社』に勤務——」

通信で捜索に向かわせた刀使に、反逆者の潜伏先の情報を送る高津学長。

とある情報源からもたらされた情報でようやく可奈美たちの潜伏先を掴み、表情には出ていないが、声には少し興奮しているように感じる。

「良いわね、沙耶香。必ず仕留めない。我が練府の真の実力、反逆者どもに見せ付けてやりなさい？」

『了解……これより任務を開始する』



累の自室

『夕食の片付けが済んだら、見せたいものがあるの』

食事中にそう言った累。なんだろう？と可奈美たちは思いながらも、食事を続けデザートにセイバーがお土産で持って帰ってきた大福を食べた。

「うくん！この大福スツゴく美味しいっ！」

「モグモグ……うん、甘さも丁度良い……」

「セイバーくん、これどこで買ってきたの？」

「いえ、貰ってきたんですよ、知り合いからね」

それから食器類を片付け、現在累の自室に案内された可奈美たち。

部屋はシンプルにベットや本棚やタンスがあり、そして机のうえには幾つもの画面があるパソコンがあつた。

姫和は累に言われるがまま、椅子に座りパソコンを操作し、チャットアプリを開く。するとそこには既にメッセージが送られており、可奈美がそれを読み上げる。

「えつと……『ようこそグラデイのご友人たち、我々は君たちを歓迎する』……グラデイって言うのは？」

「私のこと。姫和ちゃん、好きに返信して」

そう言われ姫和は早速思うままに入力した。

『あなたは？』

『A-I-I-Y.』

A-I-I-Y^{味方}と答える相手。更に続いてこう答えてきた。

『たった2人の謀反者たち』

『手紙はちゃんと持っているか?』

「っ!？」

姫和の持つ『手紙』のことを知っている。つまりこの手紙を姫和に送った人物なのかと推理する姫和に、更に相手から

『立ち向かう覚悟は出来ているかい?』

『YES／NO』

「……………」

まだ何者か分からない。もしかして、セイバーたちとは違う組織かもしれない。故に、安易に『YES』と答えるのは早計だと判断した姫和。

「……………」これはお前たちの仲間か?」

姫和がセイバーたちの方へと振り返り問うた。そして2人は揃って首を横に振った。

「十条さん、少し良いかな?」

そして姫和はセイバーに席を譲り、セイバーが代わりに入力した。

『お話の最中に失礼します。公安零課のセイバーです』

『始めまして、世界を守りし守護者』

「なにつ！公安だとっ!!」

「えっ? こうあん?」

セイバーが入力したことに驚く姫和と、何の事かさつぱりの可奈美。

「公安って言うのは、要するに警察の中の警察ってところか? 通常の警察より色々出来る警察みたいなもんか?」

「ドラマに出て来る秘密警察みたいなもの?」

「そんなところだな」

「でも『世界を守りし守護者』って?」

「あゝ……それはだなく……」

後ろで和泉守と可奈美の会話が聞こえるが、セイバーは気にせずチャットを続ける。

『始めまして。それよりも、何故彼女たちを巻き込む必要があるのですか？』

『十条姫和が、開戦の烽火のろしをあげたからだよ』

『元々はあなた方が彼女に手紙を送ったのが原因なのでは？』

『痛いところをつく』

『ただ知って欲しかったのだ。あの大災厄の真実を』

『なにせよ、そのやり方を認める訳にはいきません。ですが、大荒魂討伐には戦力が多い方が良いでしょう。前々からそちらが申し込んできた協力関係について、我らの主より前向きに検討すると伝言を預かっております』

『ありがたい。あなた方がいれば百人力だ』

『しかし、彼女たちに関しては彼女たちの意思に任せます。宜しいですね？』

『Of course.』

『では、十条さんに変わります』

そして、セイバーは姫和に席を返す。ただその際に

「しっかり考えて答えて欲しい。もちろん、君の覚悟を尊重はする」

そして、姫和は再び席につく。画面にはセイバーたちの会話の後にまた

『立ち向かう覚悟は出来ているかい?』

『YES／NO』

と入力されていた。そして姫和は覚悟を決めて『YES』と返信する。

『Excellent! 今日という日は完璧になった!』

『以下の場所へと向かってくれ』

そして、とある場所が表示された時――

ガキンツ！

「っ!?!」

「なんだっ!?!」

ガキンツ！ ガキンツ！

突如、外から剣戟音が鳴り響く。次第に遠くなっていくが、音が鳴り止むことは無かった。

一体何事かと、警戒する可奈美や姫和たちだったが、セイバーたちの方は落ち着いていた。

「ほお、意外と早かったな」

「そうだね、練府の仕事ぶりには頭が下がるよ」

「練府だと？ お前たち、一体何が起きてる!?!」

「安心しろ十条。ただ練府からの刺客が来て、俺たちの仲間が迎撃してるだけだ」

和泉守は、なんてこと無いように言っているが、練府からの刺客と言い、セイバーたちの仲間と言い、状況が全然読み込めない姫和たち。

「僕らの情報では、練府が独自に動いていることは分かっていたんだ。だからいつ襲撃が来ても対処出来るように応援を待機させていたんだ。丁度恩田さんの隣の部屋が空き室になっていたから、そこにね」

「じゃあ、今外で戦ってるのが、練府からの追っ手で、それをセイバーたちの仲間が戦ってるの?」

「ああ、中々腕の立つ刀鍛冶がね」



数分前 累マンション前

本部からの情報でマンション前に辿り着いた、練府の刀使『糸見 沙耶香』。

「……………」

キュイイーン——

御刀を抜き意識を集中させ、写シを張る。すると、彼女の瞳に妖しい光が灯り、写シが重ね姿のようになった。

そして、目標の部屋へと一気にジャンプし、窓を切り裂こうと——

「させるかよ」

ガキンツ!!

「っ!」

突如、横から何者かが沙耶香に斬りかかり、奇襲を防がれた。それだけでなく、そのまま地面に落下しながらも、沙耶香と互角以上の剣戟を交わす。

シユタツと地面に着地した沙耶香は、ようやく相手の姿を視認する。

黒いライトアーマーの上に白色の羽織をマントのように肩にかけて、赤みがかつた髪の青年。

背中に鞘に納められた刀を背負っているが、手にはそれとは別に、白い刀身の剣が握られていた。ただし刀ではなく、中東のものと思われる。

「誰、あなた……………」

ポツリと呟く沙耶香。別に返答は求めていない。彼女の任務は反逆者たちの身柄の確保。そのため障害は全て排除、それを果たすだけだ。

「ふんつ、別に大したもんじゃねえよ。儂俺は、ただの刀鍛冶だ。そして、お前さんの任務の妨害が儂俺の任務だ。まあ、それよりも——」

そして、青年は剣先を沙耶香にへと向けて

「お前さんの御刀、『妙法村正』だろう？」

「……………」

何も答えない沙耶香。だが、確かに彼女の持つ御刀の銘は『妙法村正』、別名『千子村正』とも呼ばれている。

「正直、任務なんてどうでもいい……儂俺はただ、てめえがソレを振るうに相応しいか、見極めたい。だから……全力で掛かって来い!!」

「……………」

青年、いや公安零課の『千子村正』から鬨鬨気がビシバシと溢れ出す。それを感じ取った沙耶香も、改めて構えをし直す。

「さあ、糸見沙耶香。剣の實力は十分か？」

村正VS村正

ガキンツッ！ ガキンツッ！ ガキンツッ！

月夜の下、鉄同士の激しいぶつかり合いの音が響き合う。

練府の刀使、沙耶香の御刀と公安零課の刀鍛冶、村正の剣の剣戟が続いていた。

「ほお、小娘のわりには良い腕をしてるな？」

「……………」

「いた、あそこっ！」

「彼女が、練府の……………」

そこに、累の部屋から下りてきた可奈美やセイバーたちが到着した。

そして、二人の斬り合いがどうなっているか、ようやく確認出来た。

片手で剣を振るい未だに余裕の態度を見せる村正と、自ら無心状態になることで、迅移を持続的に使用出来る固有能力『無念無想』で斬りかかる沙耶香。

「実力はほぼ互角か。それにしても、あの迅移……………持続的に発動させているのか……………」

このままでは、あの男は勝てない！そう思った時、可奈美が「違うよ姫和ちゃん……あの赤髪の人の方が全然強いよ……！」

そう、可奈美の言う通りである。一見拮抗しているように見える。いや、拮抗させているのだ。

村正はまだ本気ではない。沙耶香が、村正を持つ剣士に相応しいか見極めているからだ。だから、まだ本気は出せない。

下手をしたら、見極めるどころでは無くなるからだ。

「どうした、どうした？その程度か？」

「……………」

無心状態なので、村正の挑発は彼女の耳には届かない。だが、彼の唇の動きから、挑発されていることは分かった。

「……………！」

ならばと、沙耶香は一瞬一步引き隙をわざとつくる。

もちろん村正はそれを見逃さない。距離を開けさせず、剣を振りかぶる。

「(ハハ)……………」

ガキンツ!!

「おっ?」

だが、それを待っていた。振り下ろされた村正の剣を、沙耶香は逆に弾き飛ばした。剣を弾き飛ばされた村正は丸裸同然。沙耶香はがら空きになった村正に刃を向ける。もちろん、背中を抜かせる間など与えない。

「マズいっ！」

村正のピンチに、姫和は直ぐに御刀に手を伸ばそうとしたが、和泉守がそれを止めた。まるで、黙って見ていると言わんばかりに。

そうしている間に、沙耶香の峰打ちが村正の胴体に叩き込まれようとした時――

「投影、開始――」
ガキンツッ！

「っ！」

沙耶香の刃は、村正には届かなかった。

ギリギリ……！

「惜しかったな？」

村正の手には、いつの間にか双剣が握られており、沙耶香の刃を止めていたのだ。

先ほど弾き飛ばしたはずの白い剣と、まるでソレと対を成すような黒い剣の2本が、沙耶香の剣を挟むように止めていた。

そして、フンツ！と今度は村正が沙耶香を弾き飛ばした。

「……………」

写シは消えなかったが、だいぶ体力を失ってしまった。これ以上の戦闘続行は難しいかもしれない。

だが、沙耶香は退かない。

撤退は任務に入っていないから。

「……………」

「ほお、まだ闘るか？」

ならば闘う。任務遂行が私の存在意義なのだから。

そこから僅か1分近く、2人の剣戟は続いた。

沙耶香が村正の剣を、また弾き飛ばす。そして――

「投影、開始」

沙耶香が村正の剣を折る。そして――

「投影、開始」

沙耶香が村正の剣を叩つ斬る。そして――

「投影、開始」

彼の手に、同じ剣がどこからともなく現れる。それも際限なく。

「なんだ、アイツは……………!?!」

「凄い……………マジシャン……………じゃないよね?」

離れて見ている姫和や可奈美の方が、良いリアクションをする。

セイバーたちは、村正のことをどう説明すれば良いか迷っているようだった。

零課内でも、村正だけが持つ特殊な能力。果たしてソレをどう説明すれば良いのか分からない。

そうこうしている間に、沙耶香が18本目の剣を弾き飛ばす。そして今度は、互いに距離を開ける。

沙耶香も無理な深追いは得策ではないと判断したのだろ。

すると村正が

「なるほど……確かにこの腕前なら、村正がお前さんを選ぶ理由はなんとなく分かる。だが——」

ポイツと、村正は片手に残った剣を放り投げ

「お前はまだ村正を使い熟せてない」

「……………」

「確かに刀なんて誰が使うが、所詮肉切り包丁だ。だが、それで満足するならお前の実力はその程度で終わるし、村正も本当の意味でお前を主と認めない」

「……………」

「村正は……………アイツはそんな事を想って打ってきたんじゃない！」

「村正……………」

「セイバー……………あの人は……………」

可奈美には、村正が何を言っているか分からない。

分からないが、何か怒っているようで、悲しんでいるようにも見えた。

そしてそれは、セイバーも感じ取っている。いや、共感している。彼も、前の主に対して強い想いがあるから。

「それを今から見せてやる」

そして、ようやく村正は背中中の刀を抜く。その刀が月の光によって、その姿をその場にいる全員の目に焼き付ける。

「それ……………」

「なに……………っ!?!」

「アレって……………あの子と同じ?!」

「そうだ、コイツの銘は『千子村正』、てめえと同じ村正だ。今から村正の本当の力を見せてやるから、その目ん玉よおろく見開いて見とけよ……………」

チャキ…と静かに構える村正。

それに対抗するように沙耶香も構える。

そして――

「っ!」

「……………」

勝負は――

スパンツ——!!

一瞬で終わった。

パリンツと沙耶香の写シが消え、膝をつく沙耶香。

「どうして……」

「動きが単調だ、刀鍛冶に悟られるぐらいな。1から出直せ、たわけ者」

沙耶香の固有能力『無念無想』は迅移を持続的に発動出来る一見チートのような能力。だが、自らを無心状態にする必要があるのだ、どうしても単純な動きになってしまうのだ。

「さて……とりあえずこれで任務は——」

「まだ……」

「なに？」

「まだ……終わってない……」

ふらりと立ち上がる沙耶香、その眼はまだ妖しい光が灯っていた。

「お前、まさか——」

ガキンツ!

再び迅移で村正に斬り掛かる沙耶香。しかも、写シ無しで。

「なに、写シ無しで!？」

「なるほど……これは予想外だったな……」

和泉守たち零課も、事前調査で沙耶香が無念無想を使える事は把握していた。だが、写シ無しでも使える事まで知らなかった。

ギリギリ……!

「くそっ……お前……!」

「任務を……果たす……それが、私の……」

「(さすがにこれ以上はこっちの体力が保たん……!)」

ただでさえ、この刀を抜いたからあまり長い時間戦えない。

「(仕方ない、こうなったら……最悪、腕の1本——)」

「待ってっ!」

「っ!？」

突如、2人の間に無理やり割り込む者が。それは

「お前は?!」

「……………」

「可奈美っ!？」

「アイツ、いつの間に?!」

「……………可奈美」

村正と沙耶香の間に割り込み、無理やり2人を引き離す可奈美。そして、村正の代わりに彼女が沙耶香の前に立つ。

「何してやがる、美濃関の!お前が出る幕じゃな——」

「お願い、ここからは私にやらせて!」

「何言つて——」

「村正」

「セイバー……………」

いつの間にか隣で、静かに村正を止めるセイバー。そして、可奈美の方へと向き

「どうする気だい、可奈美?君が彼女を斬るのかい?」

「斬らない!!」

「何っ!？」

「っ!?!」

可奈美のその一言に村正だけでなく、和泉守たちも驚きを隠せなかった。ただ一人、セイバーを除いて。

フツ——

「っ!」

ガキンッ!

そうしている間に、目標を変えた沙耶香が可奈美に斬り掛かる。が、それを受け流す可奈美。

「(やっぱり……この子の剣、御前試合前の時と違う……)」

そして、斬り返しにくる刃を交わし、距離を取る可奈美。

「君がその気でも、彼女は本気だよ。それでも斬らないと?」

「そうだよ、私は……この子を斬らない!」

「……分かった」

「おい、セイバーっ!良いのか!?!」

「責任は僕が持つ……」

「ありがとう、セイバー」

そう言い、沙耶香の方へと向き刀を構える。

そして、再び沙耶香が真つ直ぐ可奈美へと斬り掛かり、それを受け止める。

そこから沙耶香は突きを繰り出そうとする。

「そんな魂のこもつて無い剣じゃ——」

だがそれを可奈美は、身をかがめ交わし沙耶香の御刀をガシツと掴み——

「何も、斬れない!!」

バツと彼女の手から離し放り投げた。

「御刀を!」

「なるほど、コレならアイツは今度こそ本当に戦えない!」

そう、幾ら写シ無しでも迅移が使えても、それは御刀があつての恩恵。その御刀を手

放せば、その恩恵が無くなり、今度こそ沙耶香は何も出来なくなるのだ。

「あ……………」

沙耶香さえも予想外の行動に、啞然としてしまう。そんな彼女に可奈美は笑顔で話し

かけた。

「こんばんは、覚えてるかな? 御前試合の1回戦で戦った、『衛藤可奈美』。あの試合、

スツゴク楽しかったよ。沙耶香ちゃんの技、ずっとドキドキしっぱなしだったよ！」
「……………」

さつきまで斬り合いをしていた相手に、何を話しているのか。沙耶香にはまるで分からない。

村正と戦う前だったら。

今はなんとなく彼女の言葉がよく聞こえる。心に届く。

そして、何故かその心が揺れるのを感じる。

これは、高津学長に初めて褒められた時に似ていた。

「（これは……………）」

「ねえ、良かったらまた試合してくれないかな？」

そう言って、沙耶香に手を伸ばす。

そして沙耶香はその手をジッと見つめ、僅かにその手に自分の手を伸ばそうとした。だが、上手く彼女の手まで動けない。すると

「なに、モタついてやがる」

と、村正が沙耶香の手を取り、可奈美の手に握らせる。

すると可奈美はしっかり彼女の手を掴み

「約束だよ！」

「……………」

可奈美その笑顔と、村正の手の温もり。今まで感じたことの無い感覚に、沙耶香が戸惑ってしまおうが、同時に心地良く感じていた。

「何なんだ、アイツは……………」

「こうなると分かっていたのか、セイバー？」

「僕はそこまで万能じゃないよ……………でも……………」

セイバーの見つめる先では、可奈美が先ほどの村正と沙耶香との斬り合いの感想や、彼女の能力について興奮気味で話していた。

「可奈美なら、出来ると……………信じてただけだよ」

「えつと……………ど、どういう状況なの……………これ？」

そこに、ようやく降りてきた累。

てつきりまだ、襲撃者との戦闘が行われていると思っていたが、何故かその襲撃者と握手をしながら楽しそうに（可奈美のみ）会話をしていた。

そこで和泉守が事の経緯を説明し、増援が来る前にこのマンションから離れる事になった。

それから数分後

増援が来る前に、可奈美たちは累の車に乗り込み、マンションから離れた。

その途中、公園の前に停まり、そこで村正と沙耶香が降りた。

「ごめんなさいね、こんなところで。あなたにはずっと守って貰ってたのに」

「別に構わねえよ。セイバー、俺はコイツを近くの交番まで届ける。その後、また連絡する」

「ああ、頼むよ」

「えっと、ありがとうございます」

助手席の窓から顔をだけを覗かせるセイバー。とその後ろの窓から顔だけ出し、村正に頭を下げる可奈美。姫和も車内から彼に頭を下げていた。

「それが俺俺の任務だからな。それと……」

村正は懐から、小さな小箱を取り出し、可奈美に手渡した。

「小腹用に作ってたヤツだ。道中にでも食つとけ」

「ありがとうございます！」

「それじゃ、行こつか。2人とも、気を付けてね」

「またね、沙耶香ちゃん。村正さんも」

「おう、お前らも達者でな」

「……………」

窓が閉まり走り出す車、それを見送った2人は、車が見えなくなつた後「それじゃ、交番まで送る。それと……」

村正は車内ですつと没収していた沙耶香の御刀を彼女に返した。

「……………いいの？」

「別に抜いても構わんど。儂俺に勝てるならな」

そう言つて彼女に背を向けて歩き出す村正。

隙だらけの背中、今なら勝てる。

いつもなら直ぐに抜いて筈の御刀が抜けない。

沙耶香は村正の背中を見つめながら、彼の後ろを着いて行こうとした時

くうく……………」

「……………」

「……………」

可愛い腹の虫の鳴き声。村正の腹の虫はこんな可愛い鳴き声はしない。となると

「……………腹、減つたのか」

「……………うん」

「ハア〜……分かった、来い」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
累の車

村正と沙耶香と別れ少ししてから、車を国道に向かわせながら、累はセイバーの今後の方針について聞いていた。

とりあえず、セイバーたちはチャット相手に指定された合流地点に向かう事になった。それだけ聞くと、累もそれ以上は聞かなかつた。

もちろん、審神者にも今までの経緯は報告済みだ。彼も念の為に、他のメンバーも向かわせると言っていた。

「ハア〜、それにしても、今頃私のマンションは大変だろうな。この車も照合済みだろうし……」

当然だ。夜中とは言え、アレだけ騒いだら他の住人が通報しているだろう。

今頃マンションは警察でいっぱいになっている頃だ。

それだけでなく、あちこち検問所を設け、この車を血眼になって探しているだろう。

「つて、言ってるそばから検問っ！」

累たちの目の前に、検問所が見えてきた。そこには既に幾つか他の車が止まっており、多くの警官が車内を調べられていた。

「あちやう、ごめんね。どうやらここまで——」

「いえ、このまま検問所に向かつて下さい」

「えっ!?でも、このままじゃ検問所に……」

「いいから、セイバーの言う通りにしてくれ」

和泉守にも言われ、累は不安になりながらも、検問所へと向かつて、車の列に並んだ。それからたった数分だけだったが、可奈美や姫和には何時間かのように長く感じた。念の為、制服の上にフード付きジャンパーを着て、フードを深く被った。

そして、いよいよ累の車の番となった。

警官の1人が累の車のナンバーを照合し、他の警官の1人が、コンコンと運転席の窓を叩き、累は窓を開ける。

「は、はい……」

「申し訳ありません、とある事件の被疑者を搜索してまして。車内を改めても宜しいでしょうか?」

「え、えっと……」

チラリと、隣のセイバーにどうすれば良いかと、目を向ける。すると

「おい、待て。この車は……」

ナンバーを照合していた警官が、待ったをかけた。そして、ヒソヒソとその警官に耳打ちすると

「こ、これは大変失礼しました！任務ご苦労さまです！」

そう言い、警官2人は累に敬礼をした。

「えっ？」

「(っ!?)」

累だけでない、後ろの座席に座っていた可奈美たちも驚いていた。任務とは、一体何の事かと？

そして、セイバーが一度車外に出て、警官にあるものを見せる。

「そちらも、検問ご苦労さまです。引き続き、検問の方を宜しく願います」

「はっ！」

そう言い、セイバーが車内に戻ると検問所の門が開かれ、あっさり通してくれた。

その間、ずっとポカンとしている何も知らない女性陣。

そんな彼女たちの心境を知ってか知らずか、セイバーは累に、国道近くに向かうよう指示をした。

◇ ◇ ◇ ◇
村正&沙耶香Side

セイバーたち一行が検問所に到着した頃、沙耶香は公園内のベンチに1人、ちよこんと座っていた。

そこに、村正が両手にペットボトルのお茶を1つずつ持ち、彼女の元にやって来て隣に座る。

「ほら、お茶」

「……………」

近くの自販機で買ってきたと思われるお茶を黙って受け取る沙耶香。その様子を見ながら

「(コイツ、ホントに感情を感じさせないな……)なあ、お前家族は?」

「……………いない。孤児、だから……………」

「そっか、それは悪かった……………」

「あなたは……………」

「俺も、生みの親はとつくの昔に死んでしまってる。家族って、訳じゃないが。家族並に大

切なヤツらはいる」

「……………」

「ところでお前、甘いもんは好きか？」

「甘いもの……………」

無表情だった沙耶香の顔が、パァーと明るくなった。どうやら大好物のようだ。

「なんだ、そんな顔もするんだな。なら……………」

ゴソゴソ…と懐からプラスチック容器を取り出し、中を開けると大福が2つ入っていた。

「アイツらの差し入れのあまりだ。食うか？」

「食べる……………」

そう言い、村正から大福を両手で受け取り、モグモグと食べる。その様子はまるで、リスのような小動物に見えた。

「可愛いな……………」 そう慌てるな、ゆっくり食べるよ」

「モグモグ……………うん……………モグモグ……………」

「ほら、口元が汚れてるぞ」

そして、持っていた手ぬぐいで沙耶香の口元に着いた粉を拭き取った。

「(やれやれ……………濃濃はコイツの親かよ……………)」

「……」

手ぬぐいで口元を拭き取られながら、沙耶香は村正の自分を見つめる目をジツと見ていた。

彼女は孤児だった。物心付いた時から孤児院にいて、中学にあがる前にあつた健康診断で御刀への高い適性があることが分かった。

それをどこかで聞いた練府の高津学長が直々に彼女を引き取り練府に入学させた。それからずっと、刀使としての訓練を続けていたので、家族の温もりと言うのは知らない。

だが、村正のその目や彼といるこのひとときに、それに近い何かを感じていた。

「ん、どうした？」

「………何でもない」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
逃亡組Side

国道近くの隅、累はそこで車を停め、可奈美たちが下車下。

「累さん、色々ありがとうございます」

「ううん、寧ろここまでしか出来なくてごめんね？これから大変だろうけど頑張つてね」
「はい」

そして、次にセイバーたちの方へと向き

「この子たちをお願いします」

「もちろん」

「心配すんなよ。それと、あんたのスマホにマップを転送した。そのルートを迎れば検問には引つかからないぜ」

「色々ありがとう。それじゃあ」

そして、累は車をUターンさせ、彼女たちの元から走り去っていった。

車が見えなくなつた後、姫和が今後どうやって移動するか聞くと

「それなら大丈夫。もう手配してある」

そう言つて、セイバーが指差す方向には

「アレは……高速バス？」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

村正&沙耶香 Side

一方その頃、とある交番近くまで村正は沙耶香を送り届けていた。

「あそこの交番に行けば、管理局に連絡が取れるだろう……」

「……………」

「悪いが俺は一緒には行けない。別に俺たちのことを話しても構わないが、どこの誰か特定出来るか保障はしないぞ」

「……………」

「……………だからさ……手を、離してくれないか？」

チラリと自分の左手を見る。村正の左手は沙耶香の右手がしっかりと握られていた。

別に拘束するためのものでは無い。どちらかと言えば、子供が親の手を握る方に近い。

「えつとな……く……く……！^俺俺はまだ仕事があるから、行かないとダメなんだよ。お前だつて、管理局に戻らないとマズいだろう？」

「……………」

やはり手を離してくれない。何も喋らずずっと村正の手を握り、彼のことをずっと見ている。

刀剣であつた村正に、年頃の少女の対処方法など知るはずも無かつた。

「……………名前」

「はっ?」

「名前……………」

やつと喋り出した沙耶香。どうやら村正の名前を聞きたいようだった。

「あ〜〜……………悪いな、それは言えねえ。とりあえず上の人間に聞かれたら適当に言つていてくれ」

「……………じゃあ、お兄ちゃん」

「……………は?」

今なんて、と聞こうとしたが沙耶香はその前に手を離し、交番へと向かって行った。

村正はその後ろ姿をポカンと眺めていた。

「……………お兄ちゃんって……………儂俺そんな若造じゃねえのに……………」

しかし、やはり照れくさいのか、頭をボリボリとかきながらその場を後にした。



数時間後 とある喫茶店

「う〜ん……………このコーヒーと言う飲み物も、中々良いな……………」

「モグモグ……俺っちも牛乳たっぷり入れたヤツなら気に入ってるぜ。眠気覚ましにちようど良いからな」

窓際の席に男2人組がモーニングを食べていた。

1人は中学生ぐらいの少年で、もう1人はがたいの良い青年。その2人の隣には、長さは違うが、何か細長いものを包んだと思われる風呂敷が置いてあった。

「ふう〜、それにしてもアイツらホントに何してんだ?」

目玉焼きを飲み込みながら、双眼鏡で近くの浜辺にいる者達を見る少年。青年も釣られるように手元の双眼鏡を手取る。

「う〜ん……自分には、普通に遊んでいるようにしか見えないが……」

彼らが見ている先では、殆ど人がいない浜辺でビーチバレーをしている少女と、パラソルの下で寝ている少女がいた。

「ホントにアイツらが舞草のエージェントなんだよな?」

「主からの情報では、そのように……」

ふ〜ん、とお代わりで頼んだ牛乳を一口飲む少年こと公安零課の『葉研藤四郎』。

「しかし、やはりどう見ても遊んでいるようにしか……」

そう言い、不思議がる青年、公安零課の『蜻蛉切』。

「しっかし、あの金髪の姉ちゃん、胸デカいな」

「／＼／＼や、薬研どのっ！任務中にそのようなことを……！」

「でも蜻蛉切だって分かるだろう。あの姉ちゃん、年の割には良いもん持つてるって。しかし……何食ったらあんなにデカくなるんだ？」

薬研どのっ！と蜻蛉切は顔を赤めながら薬研から双眼鏡を奪う蜻蛉切。こんながたいの持ち主だが、女性にはめっぼう弱いのだ。

「別に良いだろ？折角人の体を得たんだから、これくらい」

「それはそうですが……」

「なのに……なんで蜻蛉切とかはデカくて俺はこんな……」

「気をしつかり、薬研どの。きつと、いつか、薬研どのもぐんぐん伸びていくでしょう！」

「うるせえ、どうせ……どうせ……俺はいつまでもチビだよチクショー!!」

ズウーンと自身の背丈のことで落ち込み、今ばかりは、理不尽な世界を恨む薬研であつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

一方、その浜辺では

「ヘーイツー！」

『ねねっ!』

ビーチバレーを楽しむ長船女学院の『古波蔵エレン』と荒魂の『ねね』。

「う〜ん……日差しは上々……」

離れた場所で、パラソルの下で日差しを浴びる長船女学院の『益子薫』。優雅に日差しを全身に浴びながら

「へ、ヘックションツ!」

盛大にくしゃみをした。それもそのはず、海にはまだ季節が早すぎる。ちよつと風が吹いただけで、全身がブルブルと震える。

「あく、もうちよつと後に来れば良かった……」

「オリヤー!」

ピューン……ドガツ!

「フガツ!」

そこに、エレンが打ったボールが薫を直撃し、地面に転がり込んだ。

「いてて……」

「ハハハ……ゴメンなさいデース。薫も一緒にやりませんか?」

『ねね〜!』

「謹んで遠慮します」

そう言いながら、サングラスをかけ直し、再び寝転がら薫。そこに、エレンのスマホに着信が入る。

「ハイハイ！あ、学長！」

相手は彼女たちの学長、真庭学長であった。どうやら任務のようだが、薫の方が

「知らん、こっちは休暇中だ。って、言っとけ」

『『知らん、こっちは休暇中だ』、だそうデース』

そう言い、この後の展開を読み、薫の耳元にスマホを近付けると

『オイコラ薫ううー！、ふざけんなコラアアー！ツ！！』

「うぎやつ?!」

スマホからの怒鳴り声で、再び地面に転がる薫。

「いやいや、そうは言いますがね真庭学長様。オレ、今御刀が無い。宅配便で学園に送ったからな」

『それは問題ない。先ほど送り返した』

「へっ?」

その直後——

ドオオオ——！！！！

大きな着地音と土煙で浜辺を揺るがした。

その正体は小型ロケットが彼女たちの目の前に突っ込んで来たからだ。しかもご丁寧に薫の御刀『寧々綺斬丸』が括り付けてあった。

「Wow……」

「税金の無駄づかいだろ、これ……」

『ねね……』

『では任務を説明する——』



喫茶店

「な、なんと……」

ポタポタ……

「税金の無駄遣いだろ、アレ……」

ダラダラ……

「あの、お客様方……飲み物がこぼれてますよ？」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
逃亡組 Side

セイバーが手配した高速バスに乗った一行は、少し仮眠を取ってから、セイバーたちの話になった。

高速バス内は、運転手除いてセイバーたち一行しか乗っていない。他の座席にはお客は誰もいなかった。

普通ならこんな高速バスは目立ってしまうかもしれないが、外からこのバス内はマジックミラーで見えないようになっていいるからだ。

「さてと……まずは何を話そうか」

「まずは、お前たちが本当に公安警察かどうかだ」

姫和にそう言われ、セイバーと和泉守はそれぞれ懐から黒塗りの警察手帳を出し、2人に見せた。

手帳には、それぞれ証明写真と警察の紋章。氏名、更に所属が書いてあった。

「すごい、本物だよ」

「確かに……公安零課とあるな……」

刀使も一応は国家公務員になる。そのため警察手帳には見慣れているので、本物か偽物かは判別出来る。

「あれ、けど名前が『セイバー』になってる……」

「こっちは『和泉守兼定』と……」

「こんな名前の人物などいないだろう。だが」

「残念ながら、それが俺たちの本名だ。もちろん偽名じゃないぜ」

「僕らの素性についてだが、申し訳ないがまだ話せない。けど、僕らの組織については少し話せるよ」

「えっと、じゃあ『公安』ってなに？」

「……………」

「確かにあまり聞かないかもしれないけど……可奈美、君ちゃんと国家公務員だよな？」

「あははは……」

「えっとね、公安警察は警察庁と都道府県警察の公安部門を指す俗称で、正式には警備警察の一部門なんだ。主に国家体制を脅かす事案に対応する。つまり警察の中でも特殊な警察組織ってこと」

「これで姫和の中の謎が一つ解けた。

今までのスムーズに逃亡出来ているのは、彼らが公安組織であつたから、事前に公安

傘下の施設に根回しをしていたからだ。

今も、この高速バスも彼ら公安が用意した特別なバスなのだ。

「ただし、僕らの『公安零課』は同じ公安組織でも知る者は殆どいない。ある事案に対して創設された存在しない公安組織……」

「だから、『零課』って名前なのさ」

「そのある事案とはなんだ？」

「1つは、君たちと同じように荒魂に関する事件担当。僕らは君たち刀使のように、荒魂を倒せる力があるからね。それと、荒魂を使つて犯罪を犯そうとする者達を取り締まること。それと……」

「悪いが、ここからは先は俺たちの素性に関することだから、話せない」
「……………」

そうして、彼らの話は一度終わり、バスの旅が続いた。結局は感じんな部分は聞けなかった。

数時間後…

目的地近くのパーキングエリアにバスが停まり、可奈美たちはそこで降りた。

んく……!と座りっぱなしで硬くなった体を伸ばし目的地まで徒歩で移動することになった。

その前に姫和が

「可奈美、やはりここで別れよう」

「姫和ちゃん？」

「……………」

「ここからは先は……無理だ。昨夜のことでようやく分かった。お前の剣と私の剣は別物だ。私は『斬る剣』、お前は『守る剣』。セイバーたちは両方を兼ね備えているように見えるが、どちらかと言えば『斬る剣』に近い……ここからは先は『斬る剣』しか必要無い」

「勝手に決めないでよ!セイバーたちだって私が一緒に来ることを許してくれたじゃん!」

「それはお前がこの件に深く関わってしまったからだ。だからお前を守るために同行を許した、そうだろう?」

「……まあ、それに近いね」

「ならば、無理に行動を共にする必要は無い。この間の公安の宿泊施設のような所に匿

えば良いだけだ。あのような施設は1つだけでは無いだろうか？」

「十条の言う通り、少し離れたいるが、一カ所同じようながある」

「ならば今すぐそこへ行け。そこでの一件が終わるまで匿って貰え」

「どうしてそんなこというの！」

短い間だったが、ここまでずつとみんなで頑張つて来たのに、何故そんなことを言われるのか。可奈美にはまるで分からなかった。

「可奈美、お前は人を斬つた事があるか？」

「っ！……写シ無しで……？」

「もしくは荒魂化した人を……」

最近では報告は無くなったが、嘗ては荒魂に襲われ、その身に取り込まれ荒魂化した人間はそう珍しく無かった。

そして当時の刀使たちは、その元人間だった荒魂を斬っていた。

「荒魂化した人はもはや人ではない。記憶が残り、多少話せるものもいるが、結局は人間じゃ無い。御刀で斬つて祓う、それしかない。私たちは祖先たちの業を背負い、人々を守る巫女なんだ」

「……………」

座学が得意ではない可奈美も、その事は学園で習つた記憶はある。その時は深く考え

ていなかった。

「私がこれからするのは荒魂退治だ。だが限りなく人に近い荒魂だ。そして、それを阻む者達も容赦なく斬る。それも私怨に近い動機でだ……だがお前には——」

「可奈美には斬れないってことかい？」

「セイバー……」

姫和の言葉に、セイバーが横やりを入れる。それからセイバーは静かに語った。

「十条さん、君の言うことは確かだ。可奈美は優しい、彼女の剣は確かに『守る剣』と呼ぶに相応しい」

「そうだ、だからこそ、ここから先はそれが邪魔に——」

「何故そう言い切れる？」

「何故って……」

「確かに、『守ること』と『斬ること』では明らかに『守ること』の方が難しい。何かを守ることは自らを危険にさらすことになる。もしかすれば、命を落とすことも」

「……………」

「だが、決して無駄じゃ無い。何かを守ることは、何かを諦めないことだと、僕は信じてる」

「何かを……」

「諦めないこと……」

「『斬ること』は確かに簡単だ。だがそれは諦めて斬り捨てると同じなんだよ。そしてそれは、逃げてることにもなる。十条さん、君はずいぶん強く語るが、結局逃げてるだけだ」

「なに……っ！」

セイバーのその言葉に、今にも彼に殴りかかりそうに、なるが、まだ耐えている。だがいつまで保つか、分からない。和泉守はヒヤヒヤしながら、見守っていた。

「いや、現実逃避と言うべきか……君は刀使の本来の役目から目を背けてるだけだ」

「本来の……役目だと？」

「刀使は『祖先たちの業を背負い、人々を守る巫女』だと君は言ったが、それは違う。それは君の行動を正当化させるための言い訳に過ぎない。刀使は……人々を守るだけじゃない、荒魂たちを救う存在でもある」

「荒魂たちを……救う、だと？」

「荒魂だって、好きで暴れるわけじゃない。彼らはただ、誰かに何かを伝えたいだけなんだよ」

「何かを……伝える？」

「大半は人間への憎しみや怒りだろう。けど、中には寂しさや悲しさもあるんだよ。そ

れらを受け止め、彼ら荒魂に人殺しをさせず、守り救う。そしてその想いを忘れず次に繋げる。それが刀使のあるべき姿だ」

「……………」

可奈美はセイバーの言葉に感銘を受けていた。彼は刀使では無いのに、自分たち以上に刀使のことを想い、理解している。だが、

「お前もたいそう言うが、そういうお前は人を斬った事があるのか？」

「……………ある。かつて……………何十、何百と、この手で斬り捨てたことがある……………」

「えっ……………!？」

流石にこの返答は姫和も予想外だった。そして可奈美も言葉を無くしていた。セイバーは確かに言った、殺したと。

そして今度は横から和泉守が

「セイバーほどじゃねえが、俺もだぜ。俺もずいぶん人を斬ってた時期があつた」

「……………」

ここに來ての2人の衝撃の事実。言葉を失った2人に和泉守が

「何かを斬るってことは、その命を、未来を奪うことだ。お前らにその覚悟があるか？」

「そ、それは……………」

「そもそも覚悟ってどういうものか、よく考える。ただの言葉だけじゃないんだよ、『覚

悟』は。今のお前の覚悟は言葉だけだ」

それからセイバーと和泉守は、飲み物を買に行くと言って、その場を離れた。残された2人は、とりあえず近くのベンチに座り、しばらく考えていた。

可奈美はこれからホントに彼らに着いて行くのか。

姫和は本当の覚悟とは何かを

「……………めん、和泉守」

「何でお前が謝るんだよ?」

彼女たちから離れた場所で、様子を眺めるセイバーと和泉守。

「いや……………君にも辛い役目を……………それに嫌なこと……………」

「俺は親友だけに重荷を背負わせるような奴じゃねえよ。それにしても珍しいな、お前があそこまで言うなんて」

「……………あのふたりを彼女のようになしたくなかったただだよ」

セイバーの脳内に、とある王の姿が映る。

可奈美たちと変わらない可憐な少女が、人々の想いを背負い、輝く王になり、完璧な王となり、全てを失った。

そして、彼女はセイバーを手放した。



鎌倉 練府女学院 学長室

「なんたる失態だっ!!」

今にも手を出しそうなくらいに怒りを見せ、怒号をあげる高津学長。

その目の前には沙耶香が。

村正と別れてから、沙耶香は交番から所轄に連絡をとり、つい先ほど戻って来たばかりだ。

管理局に報告を終えた後、高津学長に連れられ、現在に至る。

「申し訳……………ありません……………」

「敵の所在をようやく突き止め、奇襲をかけた筈が逆に奇襲を受け返り討ちに合い、あまつさえノコノコ戻って来るとは……………どうやら貴女を過大評価し過ぎてたみたいね?」

ジロリと沙耶香を睨みつける高津学長。

彼女に取って御前試合など遊びの範疇。任務での実績や成功率の方が重要。

それだけが高津学長を満足させる。

「そのために貴女を育てたの、貴女の価値はそれだけなの！」

そう言い、沙耶香の御刀を抜き彼女に向ける。

「少しばかり、過保護に育て過ぎたかしらね……」

コンコン…

「開いてます」

そこにノック音がなり、高津学長は御刀を納めた。

そして入ってきたのは、親衛隊の夜見だった。

案外大した人物では無かったので、無視すれば良かったと思う高津学長。しかし次の彼女の要件で、その考えは改めることになった。

「紫様がお呼びです。直ぐに来るようにと……」

刀剣類管理局本部 本部長室

「練府学長、私は追撃を命じた覚えは無いはずだが……？」

「それは……」

愛しの紫に任務失敗の件で呼び出されたと思った高津学長だったが、どうやら紫の命令無しで動いたこと自体で呼び出されたようだったもの

「とある情報から、反逆者たちの居所を掴み、紫様の手を煩わせまいと——」
「それを判断するのはお前ではない」

高津学長の言葉をピシヤリと止める紫。

「勝手な判断はするな」

「ですが……！わ、私は許せないのです。紫様に刃を向け、手の届くところでのうのうと
している反逆者たちを！何故、私にお任せして下さらないのです!？」

私なら貴女の役に立つ。

刀剣類管理局や親衛隊、この世の誰よりも。

「なのに……!」

「高津学長、お言葉が過ぎます」

「っ！貴様は黙っているろ！」

「雪那」

「は、はい!」

ようやく分かってくれたのか。そう期待した高津学長だが、紫から発せられたのは
「貴様は貴様の仕事をしろ。もういい、下がれ」

「は……はい……」

意気消沈とし、高津学長は洩々部屋を出て行った。

残された夜見は引き続き紫の警護任務に戻ろうとしたが

「夜見、お前には別の任務を与える」

「はっ」

「この者たちを連れ、ある場所へ向かえ」

そう言い、部屋の扉が開かれそこにいたのは

「紫様……この者たちは……」

「私^我の協力者だ……」

『グルル………』

異様な雰囲気を漂わせる、異形の鬼剣士だった。

天狗と日輪刀

「あれ？」

ふと気が付くと、美炎は1人でいつも遊んでいたあの公園にいた。いつもと変わらない公園。

ただ違和感があるとすれば、美炎ただ1人であること。

美炎はいつも通り、さつきまで知恵と義勇と一緒に遊んでいたはず。なのに、いつの間にか彼女1人。

「あれ……ちいねえ?……ぎゆうくん?」

キョロキョロ見回しても誰もいない。

いや、人の気配が全く感じられない。

まるで世界に自分以外、誰もいなくなってしまったかのように。

「みほのちゃん」

そこに、背後から声が聞こえた。

振り返るとそこには義勇が立っていた。

いつもと変わらない、ヒーローのプリントされた服を着ている幼馴染みの少年。

「あ、ぎゆうくん！どこいったの？ねえ、ちいねえどこいったのかな？いまはちいねえが、おにさんやくなのに——」

「ごめん、みほのちゃん」

「……ぎゆうくん？」

「ぼく、もうみほのちゃんとあそべない……」

「えっ、どういうこと……？」

「ぼくは……もう、みほのちゃんやちいねえといっしょに、いられない」

「……なんで……なんでそんなこと言うの！やつと……やつと会えたのに!!」

美炎は義勇に手を伸ばそうとするが、一向に届かない。

いや、彼との距離が縮まらない。むしろ段々と離れていつている。

「ぼくは……俺は、お前たちとは違う」

「義勇くん……？」

「俺は、お前たちの知ってる俺じゃない」

そう言って、義勇は反羽織の姿で、片手に刀を握っていた。

「もう、お前たちとはいられない」

「待つて……義勇くん……」

「さようなら、美炎」

「義勇くんっ!!」

そう言い、義勇は何処かへ行こうと足を進める。

直ぐに彼を捕まえないと。でないと、もう二度と会えない。そう思い、美炎は彼の元へと走る。

だが、やはり彼との距離は離れていくばかり。

幾ら走っても、幾ら呼んでも、義勇の足は止まらない。

そして、段々と彼の姿が見えなくなる。

「いやだ……………ダメ……………行かないで、義勇くん!! 待って……………待ってよ、義勇くん!!」



「義勇くんっ!!」

バツ!

手を伸ばして、布団から起き上がり目を覚ます美炎。

「今の……………夢……………?」

ハア…ハア…と、汗をかきながら周りを見渡す。

暗い部屋の中、美炎の他に知恵や清香、ミルヤと呼吹。

皆それぞれ布団でグッスリ寝ていた。

時計を見るとまだ午前2時過ぎ。

「ここは……………そっか、結局青砥館に泊まったんだっけ……………」

そう、調査隊一行は青砥館店主の陽司と娘の陽菜に押し切られ、一泊する事になった。

そしてここは、青砥館内にある、調査隊一行のために用意された和室。彼女たちはそ

こで集まって休んでいた。

ようやく記憶が戻った美炎は、額の汗を拭う。

「……………すごい……………ビツシヨリ……………」

額だけでない、体中汗でグツシヨリだった。布団も彼女の汗で濡れていた。

「とりあえず……………着替えよう……………」

美炎たちは、陽司たちが用意してくれた寝間着を着ていた。しかし美炎のは彼女の汗で濡れてとても着れたものではない。

とりあえず制服のシャツでも着ようか、そう思い着替えようとした時

「美炎ちゃん……………どうしたの？」

「あ、ちい姉……………」

どうやら起こしてしまったのか、知恵が半分目を覚ます。

しかし、美炎の体が汗で濡れていたことに気付く。

「どうしたの、いやな夢でも見たの？」

「うん……………ちよつとね……………」

苦笑いする美炎。その表情から何か察した知恵は、自分の布団にもう1人分のスペースを空ける。

「ほら、おいで、美炎ちゃん」

「え、ちい姉？」

「小さい頃はたまに皆と一緒にのお布団で寝てたでしょ？」

「いや、それは小っちゃい頃だったから——」

「それじゃあ、おやすみ美炎ちゃん」

「うん……おやすみ……」

結局知恵に押し切られ、彼女と同じ布団で寝ることに。

そして何故か美炎は知恵に抱き枕のように抱きかかえられ、頭を撫でられていた。

まるで、泣きじゃくる子供をなだめるように。

「大丈夫よ、美炎ちゃん。怖いものは何も無い。わたしやみんながいるから……大丈夫

よ」

「……うん、ありがとう……ちい姉……」

そして、再び美炎は目を閉じ、静かに眠った。

翌日

「ありがとうございました、青砥陽司さん。昨日は泊めていただいただけでなく、私たち

の御刀の点検までなさってください……」

店の会計で話すミルヤと青砥館店主。

昨日、彼ら親子になんやかんやで押し切られ泊まることになり、更に食事に御刀の点検も嫌な顔一つせずしてくれたのだ。

その礼として、調査隊一行は朝から店の手伝いを精一杯行つた（呼吹は最後まで渋つたが）。

「こつちだつて、一年で一番忙しい盛りを手伝つてくれたからな、お相子様だよ。それと、『陽司さん』でいいんだぜ。そーういやお前さん、仲間のこともフルネームで呼んでなかつたっけ？」

「馴れ合うことは、役目ではありませんから……」

役目、そう言うミルヤに、陽司はやれやれだな……と思う。

「ま、ほどほどにな。だが俺のことは『陽司さん』、または『ヨージ』でも可だ」

では……とミルヤは試しに呼んでみようとするが、少し恥ずかしがり、結局フルネームで呼ぶことにした。

「(こういう時、彼女が居てくれたらと、ついつい思つてしまいますね……)」

ミルヤの脳内に、とある綾小路の後輩がよぎる。

あの狐の面を頭にかけた、とある少女。

「さて……実はお聞きしたいことがありまして。『南无薬師景光』と言う御刀のこと、お噂でも構いませんので、聞いたことはありませんか?」

「それって……『南无薬師瑠璃光如来 備前国長船住陰光』、だったか? 確か……戦国の武将、『武田信玄』が富士山にある浅間大社に奉納した刀だな。オリジナルとその御刀も、江戸の早い時期から、長いこと行方不明になつてはるはずだが?」

「さすがにご存じですね。では、写しについて?」

もちろん刀使の『写シ』ではない。鍛冶職人が自らの技術を追求するために行う、写し。

つまり、南无薬師陰光の複製のことだ。

「すまん、写しが存在するのは知ってるが、そこまでだ。なにしろ、そいつが出て来たら、俺も一度くらい拝んでみたいものだな」

そもそも御刀も、ある意味『写し』と呼ばれるもの。

実在した歴代の名刀、名剣をモデルに鍛造されたものだから。

「あ、そうだそうだ! 珍しい刀がこの間来てな、店じまい前に見せてやるから、仲間たち連れて後でここに集合な」

「珍しい刀、ですか? それは一体——」

「まあ、見てのお楽しみってやつだ」

そう言われ、実は刀剣好きのミルヤは今日一番に興奮し気味になり、その後の店の手伝いをフルスロットルで終わらせたという。

* * *

「——てなことが、ついさつきあったわけだ。なんつーか、生真面目な娘さんだね？」

会計で先ほどのミルヤとの会話を話す陽司。相手は、知恵であった。

「そうですね……南无薬師景光。ありがとうございます、陽司さん。でも、なんの意味があつて木寅さんはそんな御刀のことを……」

「それは俺にもさっぱりだな。それよりも、だ！知恵ちゃん、来るなら来るって、言ってくれよ。紗南^真のお嬢^庭ちゃん^学でも、『ファイマンの爺さん』でも構わんが。先に言ってくれりや、お・も・て・な・し、の1つでも出来たんだぜ？」

パチリとウインク（——）をすする陽司。

それは確かに申し訳なかったが、元々ここに来るつもりはなかった。ミルヤと清香が来たがらなければ、原宿にさえ来なかった。

寧ろ、知恵たちの活動が外部に漏れる可能性を考慮して、陽司たちとは接触は避けた

かった。

「ま、そりやそうだがな……それでだが、紗南の嬢ちゃんから連絡があつた。お前さん宛に伝言を預かつてる」

「伝言？」

『うちのエージェントの2人が伊豆に待機しているが、親衛隊が同じく伊豆に向かつて、このままだとかち合いそうになる。それと、流石にあの2人じゃ『例の協力者たち』に追い返されるかもしれないから、後を追つてサポートをやってやつて欲しい』

『面倒だと思うが、調査隊の連中には陽司から「赤羽刀の束が海岸から揚がつた」とでも言わせて一緒に連れて行け』

『こつちもまだ交渉が掛かりそうだが、何とか『向こう』と協力関係を結べたら、少しは負担も軽くなると思うから、宜しく頼む』

「——と、言うことだ」

「相変わらず人使いが荒いですね、うちの学長は……」

ハハハ……と苦笑いする知恵。

「まあ、とりあえず今日も泊まっていけば良いさ。伊豆までのチケットは紗南のお嬢

ちゃんが手配してゐるらしいからな」

「分かりました。では——」

「あ、ちよつと待てよ、知恵ちゃん」

「はい、まだなにか？」

「えつと、見せたいものつて何ですか？」

昼からの店の手伝いをひと段落させ、店じまいの準備をしようとした美炎たちにミルヤと知恵が集合をかけた。

なんでも陽司から、店の手伝いをした褒美に、珍しい刀を見せてくれると言うことらしい。

長年この家業をしている陽司も、生まれて初めて見た珍しい刀剣とのこと。

「でも、良いんですか？その……お客さんのものなんですよね？」

清香が不安そうに聞いてくる。確かに客のものをそう簡単に見せびらかせて良いものか？

「大丈夫だよ、その客からも許可は取ってる」

「おと〜ん……っ！持って来たで〜っ!!」

すると、店の奥から陽菜が重そうに、細長い木の箱を持ってきた。

「おう、あんがとよーけどよ、無理せず台車に載せて来いよ?」

「おとんがこの間、台車を壊したんでしょ!!早く新しいの買ってよね!」

よいしょつと、机の上に木箱をのせ、その周りに店主の陽司や、美炎たち調査隊が集まる。

シウルシウル…と木箱に結んである紐を丁寧に解いていく。そして、箱の蓋が開かれ、中を見ると

「えっ……コレって……」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

数十分前

第〇〇隠れ家 // 陰の間 //

昨日から審神者が手配した隠れ家に宿泊している義勇たち。現在は他の公安部署に赤羽刀調査隊の監視を任せ、一時休息を取っていた。

「ハア~~~~このままダラダラしていたい……」

部屋の居間で、だらしなく寝転がる善逸。普段なら、杏寿郎が

「だらしないぞ、黄瀬よ！」

——と、言うが現在部屋には善逸の一人しかいない。

「三日月のじいさんはマツサージ……炎定の奴は旅館の手伝い……富田はどっか行ったから……好きなだけダラダラし放題い〜!!」

ヒヤッハー！と部屋の中を転がりまわる善逸。

だが、次第に勢いが弱くなり、止まってしまふ。

「……………ヤベ……………めっちゃヒマ……………寂しい」

善逸が部屋で一人いる頃、義勇は館内の電話ボックスにいた。

因みに審神者への報告はすでに済んでいる（ちよつとお説教も受けた）。電話の相手は別の人物だ。

「では、先生は今新宿に？」

『ああ、所用でな……預けてた刀を取りに来た』

「先生（は刀をもう振ることは無いから壊すことは無いはずなのに）、壊したのですか？」

『いや、いつもの点検をな。ただ村正殿は任務中。〃鋼塚〃の奴はインフルエンザで倒れたらしい』

「（生粋の刀鍛冶）バカでもインフルになるんですね。（あの人も人間らしいところが

あつて) 良かったです」

『そう言うことだから鋼塚が血涙を絞るように、青砥館を紹介してくれたな』

文字通り、血の涙を流すようだったらしいが、そこではない。

「青砥館……ですか」

『どうかしたか?』

「(青砥館には俺たち零課の監視対象が宿泊しているが、先生にその事は伝えられない。だが先生の口から俺たちのことが洩れる心配も無いがやはり、) 言えませぬ」

『そうか……それと義勇。キッチンと飯は食べているか? “真菰” が心配しとったぞ。』

「義勇は鮭大根しか食べてないんじゃないか」と。ちゃんとバランスよく食事を取っているか?』

「……………はい」

『……ハア、まあ良い』

「先生…………… “鏑兎” は?」

『彼奴も息災だ。今は中間試験の勉強で忙しいようだな』

「そうですか……………」

『ではな、義勇』

ガチャリ……と通話が切れる。それから少し考え、義勇は旅館を出て行った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
数十分後

青砥館

「うわー、綺麗な刀っ！」

「なんだこの刀？」

「刀身が水色とは……確かに珍しい刀ですね……」

「コレって……」

「……」

木箱の中に入っていたのは、水色の刀身の刀が1本。

清香はその刀身の美しさに見惚れ、あまり興味の無かった呼吹ももの珍しそうに見、刀剣オタクのミルヤは初めて見る刀をじっくり観察していた。

しかし、美炎と知恵だけは別の意味で驚いていた。

似ていたのだ、彼が、義勇持っていたあの刀に。

色は義勇の方が深い青色だったが、あの刀に近い何かを感じた。

「青砥陽司さん、この刀は一体……?」

「おう、『日輪刀』って呼ばれる刀だよ。現代でも滅多に見られないレアな刀だ」

『日輪刀』、そう呼ばれる刀に皆がじっくり目に焼き付ける。

「さて問題だ、この日輪刀の材料には普通の刀に使われる材料以外に、『猩々緋砂鉄』と『猩々緋鉾石』って特殊な鉾石が使われているんだ。そこにもう一つ、あるものが使われているが、なんだか分かるか?」

陽司からの問いに調査隊の皆がうくん…と考える。

通常、日本刀の材料はたたら操業によって得られた和鉄が使われる。この日輪刀にも使われているが、それ以外に使われる材料で、思い付くものと言え

「うくん……なんだろう?」

「けっ!刀は材料なんてどうでもいいだろう?」

「いえ、刀は使われる材料の産地によって、その切れ味や刀身の美しさに大きく影響します!たかが材料でも、その一つでも違えば様々な姿に変えるのが刀なのです!例えば—

——
ペラペラ…と刀について熱弁するミルヤに、少し引き気味に面倒くさそうに聞く呼吹。

すると美炎が

「もしかして……」

「美炎ちゃん？」

「お、分かったかい？」

「もしかしてですけど……『珠鋼』ですか？」

珠鋼は、刀使が使う御刀の材料。限られた地域しか採掘されない神性を帯びた鉱石。その神性があつてこそ、御刀は荒魂を斬れるのだ。

「正解だ、美濃関のお嬢ちゃん！よく分かったね？」

「いえ、なんとなく……」

「しかし、何故御刀の重要な材料である珠鋼がこの刀にも？刀剣類管理局が、珠鋼は御刀の材料以外の使用を認めないと規定で定めたはずですが？」

「現代ではな。けど、昔はそんな規定は無かつたらしいぜ。確か……戦国時代には結構造られたらしぞ？」

「では何故——」

「折神家がある意味、日輪刀を使う剣士を恐れたからだ」

ミルヤの問いかけを陽司ではなく、別の人物が答えた。

店の入り口に誰かが立っていた。

水色の川模様の和服を着た――

「て、……天狗っ!？」

天狗の面を付けた男性。声と白髪を生やしているところを見ると、歳のいったご老人だと思うが、杖無しに真っ直ぐ立つところを見ると、まだ50代と言ってもおかしくなかった。

いや、天狗の面を付けてる時点でおかしいのだが……

「いらっしやいっ!!お嬢ちゃんたち、この人がこの日輪刀の持ち主だよ」

「はあ、この変なおっさんが!？」

「七之里さん、失礼よ!すいません……あの、何故そんな面を?」

「これか……趣味だ」

「趣味……」

「それにしても、お早いですね。取りに来る時間はまだ少しあると思うのですが……?」

「昔から約束の時間より早く着くように癖付けているのでな。それとさっきの続きだが

……」

「はい、日輪刀を使う剣士を折神家が恐れたと仰っていましたが、一体どういうことですか?」

「まあ、少し長くなるが——」

『日輪刀』は太陽に一番近く、一年中陽の射すという『陽光山』という山で採れる『猩々緋砂鉄』と『猩々緋鉍石』という日光を吸収した特殊な鉄。そして『御刀』の材料でもある『珠鋼』が使われている。

そのため、この日輪刀にも神性が帯びているのだ。
故に、この日輪刀でも荒魂を倒せるのだ。

・
・
・

「(そつか、だから義勇くんも荒魂を……)」

これで謎の1つが解けた。義勇が刀使でもないのに荒魂を圧倒出来たのは、この日輪刀があつてこそだ。

「だが御刀とは、決定的に違うものがある。それは、刀使でなくても使えることだ」

日輪刀は神性を帯びてはいるが、御刀のように持ち主に『写シ』や『迅移』などの能力を与えてはくれない。

その代わりと言つてはなんだが、この日輪刀は、刀使のように少女たちにしか使えない、と言う制限が無い。

劍の心得があれば男女問わず、子どもから大人まで、誰でも使えるのだ。

しかもこの日輪刀を使つてとある戦い方もあるのだ。

戦国時代には、刀使ほど多くはないが、この日輪刀を使つて荒魂から人々を守る者達が存在した。

最初は刀使と共に協力関係を結び、荒魂と戦っていたが、歳を重ねる毎に適正が下がる刀使と違い、日輪刀の劍士たちはそんな心配は無い。寧ろ歳を重ねる毎に、技に磨きがかかり、どんどん実力を増す。

そこに当時の折神家当主は恐れた。

このままでは、刀使の立場が無くなるのではないか？

刀使の権力が無くなれば、長年天皇家に仕えた折神家の立場も無くなる。

そう考えた折神家は、豊臣家の刀狩りで弱つたところを、江戸時代に入ってから幕府

にも取り入り、珠鋼を御刀のみにしか使用を禁じた。

更に日輪刀やその劍士たちに関する資料や記録を破棄、日輪刀も没収、様々なかたちで、彼らを歴史の影に消す工作を施した。

そして、明治に入ってから、すっかりその存在が消えてしまった。

・
・
・

「———と云うことで日輪刀自体、残った数は微々たるもの。鍛造方法もほんの握りの者達しか知らず、規則で鍛造さえも出来ない。故に日輪刀の存在は現代では滅多に見られないのだ」

「……………」

長い話を終え、天狗の男性は、陽司から鞘に納められた日輪刀を受け取る。

「あの、日輪刀の刀身はみな、そのような色なのですか?」

「ん? ああ……これは儂が持ち主だからこの色なのだ」

「? どういうことですか?」

「日輪刀は別名『色変わりの刀』と呼ばれている。理屈は儂も詳しくは知らんが、日輪刀は持ち主によってその刀身の色を変える。この日輪刀も、最初はただの刀のような色合

いだったが、若い頃、儂が手に入れてこの色になったのだ」

「なるほど……色変わりの刀……」

天狗の男性の手元に渡った日輪刀を、未だにじっくり観察するミルヤ。すると男性が「持ってみるか？」と聞き、ミルヤは2つ返事で、日輪刀を男性から受け取った。

「おお……！御刀よりも少し重いですね。ですが、確かに御刀を持った時の感覚に近い……！」

おお……！と未知の刀に触れ、感動するミルヤ。

その間に、美炎は男性の隣に立ち

「あの、すいません……その日輪刀って……他に誰が持つてるかとか、分かりますかね？」

「うん？そうだな……日輪刀の数はそう多くはないが、どこで誰が持つてるかまでは把握出来ないな……今は入手もかなり難しくなったからな……」

「そうですか……」

「ありがとうございますました〜！」

会計を済ませ、大きな風呂敷で刀を包み、紐で肩にかけられるようにして、青砥館を後にした天狗の男性。

もう歳だが、年頃の美少女たちに見送られるのは少しばかり気分が良い。そんなことを考えていた時、ふと気配を感じる。

静かな水のように自然に溶け込んだ気配。

「腕を上げたな、義勇」

すると、電柱のかけから義勇が姿を現した。

「お久しぶりです、鱗滝先生」

「先ほど電話で話したばかりだろう？ともあれ、久々だな、義勇よ」

天狗の名は『鱗滝佐ノ助』。義勇の剣の師匠であり、義勇が公安零課に入るきつかけとなつた人物。

なつた人物。

「あの少女たちが監視対象だったのか？」

「すいません……………」

「構わん、任務内容をそう他人に漏らす必要は無い。だがすまん。少しばかりコレのことを話した」

そう言い、鱗滝は背負っていた日輪刀を見せる。

「あまり刀剣類管理局に、日輪刀の存在をほのめかすのは御法度だったな……………」

「いえ、審神者はあくまであまり公おおやけにしないようにと言っているだけなので……………我々の

ことを嗅ぎつけるほどでは無いかと……………」

「そうか……そうだ、義勇よ」

「はい」

「お前、確か岐阜の方出身だったな……？」

「はい」

「……美濃関の刀使に知り合いはいるか？」

「……………はい」

少しばかり間が開いた返事。義勇の過去を知る鱗滝は何かを察したのか、それからは何も聞かず、駅まで義勇に送って貰った。

◇ ◇ ◇ ◇

翌日 伊豆行き列車内

青砥館を後にした一行は真庭学長が用意し、陽司から渡された伊豆行きの切符を受け取り、その列車に乗っていた。

しかも中々良いものを手配したようで、清香や美炎は列車の窓から見える景色に興奮気味だった。

ただ呼吹の方は退屈そうであつたが

「すごいです！窓が大きくて眺めも良くて！伊豆を走る列車にも特別なものがあるんですね——」

「なんとかビューって言うらしいよ。そういえば、なんか『伊勢』と『伊豆』って似てるよね。海の脇を走る列車とか、『伊』の字が一緒とか、半島とかさ」

「そういえばそうですね……何ででしょう？七之里さんは何かご存じですか？」

「知るかよ、んなもん！ああ——！まだ着かねえのかよ！」

「しかし、集まるどころには情報は集まるものですね。青砥館のご主人から伊豆行きの情報を得られるとは、思ってもみませんでしたよ」

流石ですね、と青砥館の事を褒めるミルヤになんとなく同意する知恵。本当は真庭学長からだというのを知ってるのは知恵だけだからだ。

「(とりあえず、このまま黙っておきましょう——)」

その時

キイイ——！！

「って、なに?！」

「これは……!」

「キャアアア!」

「のはっ!」

突然の鉄同士が強い力で擦れる音と揺れ。そして列車はゆっくりと止まった。どうやら緊急停止をしたようだ。

一体何事かと、調査隊だけでなく他の客たちも騒ぎ出す。

まさか! と思い、ミルヤは急いでスマホを見ると、スペクトラムファインダーが反応していた。やはり荒魂が出現したようだ。

『お客様にお知らせします。現在線路近くに荒魂が出現したと報告があり、緊急停止致しました。機動隊が到着するまで現場には近付かず、係員の誘導に従い、迅速に列車の外に避難してください。繰り返します——』

「調査隊各員、我々は荒魂に向かう。準備をっ!」

「は、はい!」

「よっしやー! 待ってたぜ荒魂ちゃん!」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

義勇組 Side 別の車両内

キイイーーーーー!!

『お客様にお知らせします。現在線路近くに荒魂が出現したと報告があり、緊急停止致しました。機動隊が到着するまで現場には近付かず、係員の誘導に従い、迅速に列車の外に避難してください。繰り返します——』

「……………とのことだが、どうする皆よ?」

「三日月……………その前に……………」

「この状況を何とかせねばなっ!!」

「(キュ……………)」

緊急停止により、上から三日月、杏寿郎、善逸、義勇と4段重ねになってしまい、動けなくなっていた。

特に1番下の義勇は、目をグルグルさせ気絶していた。

「と、とにかく……………炎定……………三……………日月……………早く……………どいて……………」

「しつかりしろ、黄瀬! 富田、大丈夫か!」

「(キュ……………)」

「あなや」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
同じ頃 また別の車両内

キイーーーーー!!

『お客様にお知らせします。現在線路近くに荒魂が出現したと報告があり、緊急停止致しました。機動隊が到着するまで現場には近付かず、係員の誘導に従い、迅速に列車の外に避難してください。繰り返します——』

「Oh! ナニゴトデース!? まさか、荒魂デスか!」
「……みたいだな」

真庭学長からの任務で、同じ列車に乗っていたエレンと薫。車内放送で状況を理解した2人はそれぞれ御刀を持ち、外へと向かった。

「サクツと、やつちやいまシヨウ薫!」

「面倒くせ〜……しゃーない、行くぞ、ねね。オレたちの出番らしい」
「ねね〜!」

やる気満々のエレンと、面倒くさそうな薫、正反対な2人は調査隊が出た少し後に、列

車を降りた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

エレンと薫が列車を出た頃　また別の車両内

エレンと薫の監視をしていた蜻蛉切と薬研。

浜辺で遊んでいた2人がついに動き出し、その行き先にセイバーたちの向かう場所と判明。2人は審神者が急遽用意してくれた切符で2人の尾行を行っていた。

「荒魂か……薬研殿、我々も出るか？」

「落ち着けよ蜻蛉切の旦那。監視対象が出たようだ……俺たちまで出たら鉢合わせになる。ここは刀使さま方に任せようぜ」

「ならば、避難誘導を。おそらく係員だけでは事足りぬでしょう」

それもそうだな、と椅子から腰をあげようとした時

「あれ……蜻蛉切、アレって……」

「どうかなされたか……アレは……」

2人が目にしたのは

「富田、しっかりしろ！目を開けろー!!」

バシバシバシバシッ――

「炎定よ、それ以上やると――」

――

「良いよ三日月、止めなくて。アイツにはあれくらいで丁度良いんだよ（ニヤリ）」

「気絶しているだろう義勇の頬をバシバシッ!と叩く杏寿郎と微妙な顔をする三日月。そして悪い顔をする善逸の4人がいた。」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「木寅さん、見えたわ!」

「ええ……」

列車を降りた一行は、直ぐに現場へと向かっていた。そこには数体の荒魂が。中には大型もいる。

知恵たちは直ぐに戦闘態勢をとる。だがミルヤだけは

「(多すぎる……一昨日の原宿に今日、安桜美炎の話によれば鎌倉でも。この短期間で三度も……)」

刀使なら荒魂と遭遇する機会が多い。だが短期間に同じチームが遭遇戦を行うことなど普通はあり得ない。

何か、自分たちの知らない何かの力を感じさせる。

「木寅さん、どうかしたの？」

「いえ、なんでも……瀬戸内知恵さん、あなたは六角清香と共に避難誘導を！七之里呼吹、安桜美炎は私と荒魂討伐を！」

「分かったわ、行くわよ六角ちゃん！」

「は、はい！」

「ヨツシャー！楽しんで荒魂ちゃん！」

「了解です！いくよ、清光！」

御刀を抜き、荒魂に斬り掛かろうとした時

「ヘーイ！ワタシたちもお手伝いシマース！」

そこに知恵と同じ制服を着た刀使2人が加わる。

「あなたたちは……？」

「長船の刀使ですか？」

「YES！ワタシは『古波蔵エレン』、こっちは『薫』！困った時はお互いさまデース！」

「サツサと終わらせんぞ〜」

「ああ？あの荒魂ちゃんたちはアタシの獲物だぞ？」

「七之里呼吹、少し黙って。協力感謝します、この場は私の指示に従ってください」

「了解デース！」

「へ〜い」

「では……これより、荒魂を殲滅する！」

伊豆での交錯

①

「はあっ!!」

ザシユツ!

『!!』

ミルヤの一撃が熊型の荒魂の脚を狙い、荒魂は大きくバランスを崩した。そこに上空へジャンプした呼吹と美炎の刃が捉えた。

「楽しかったぜ荒魂ちゃん！」

「これでっ!!」

ザシユ! ザクツ!!

『!!?』

ザシユ!

「これでFinaleデース、薫！」

「きええ〜〜〜」

ドーンッ!!

ムカデ型の大型の5本目の脚に切り飛ばし、荒魂がフラフラになる。そこにやる気を感じさせない薫の大太刀による重い一撃が、荒魂を一刀両断にした。

「あゝゝゝ、疲れた……」

「ねね!」

数十分後…

「エレンさん、薫さんも! 助太刀ありがとうございます! おかげで助かりました!」

荒魂を全て討伐し、ミルヤが処理班を要請し、荒魂と戦って満足したのか、近くの地面に寝転がる呼吹。その間、美炎は助太刀に来てくれたエレンと薫に礼を言っていた。

「イエイエ、困った時はお互いさまデース!」

「オレは疲れたく……もう帰りたい……」

「それにしても、お二人とも強いですね!」

「それほどでも! ミホミホも中々良い腕してマスよ!」

「み、ミホミホ?」

エレンの独特の呼び方に少し戸惑う美炎に、薫の背後から「ねね」が近付いて来た。

「あれ、この子……」

「ねー！」

「オイコラ」

美炎に向かつて、ピヨーンと飛びかかろうとしたが、薫がガシツと尻尾を掴んで止めた。

「何してんだよ、ねね。美炎ツイツに何かあるのか？」

尻尾を掴み、自分の元に引き戻す薫。それをエレンが

「薫！ねねの尻尾を掴んだらカワイソウデスよ」

「え？なにその子、もしかして荒魂!？」

「やれやれ……確かにコイツは荒魂だが、代々オレの家、益子家を護る守護獣だ」

「ねねー！」

そこに、処理班への連絡を終えたミルヤが合流した。

「益子家の守護獣……それなら聞いたことがあります。荒魂でありながら、人を襲わず共に暮らす希少な荒魂だと……」

つまり今回の荒魂は、このねねに引き寄せられた可能性が高いと、ミルヤは予想した。

「そうデース！ねねはHoly Beastなのデスよ！」

とは言え、このままねねを連れて彼女たちと行動を共にするわけにはいかない。

エレンたちはここで迎えの車を待つ事にした。

「ところでお二人はどちらに？」

「伊豆の方……まだまだ先が長いんだよな……」

「ね……」

ミルヤが2人の為に、車での最適ルートを調べようと目的地を聞くと、だるそうに答える薫とねね。

「え、伊豆なら私たちも同じ方向ですよ！スゴい偶然！」

「ハイ！Very Very 偶然デスね！」

「ところでずつと気になってたんですけど、その不思議な話し方は海外のどっかで育ったからですか？」

「NONO、これは^祖グラン^父パの影響デス。大好きな大好きなおじいちゃんデスね！」

嬉しそうに語るエレン。その気持ちは、幼い頃から祖父に育てられたお祖父ちゃん子的美炎にはよく分かった。

そこに、避難誘導を終えたのか、知恵と清香が走ってやって来て、ようやく呼吹も起き上がる。

「あら、どうやら終わったみたいね」

「ハア……ハア……せ、瀬戸内……さん……速い、です……」

「ん、なんだお前、なにバテてんだよ？何のために来たんだよ？」

「七之里さん、そんな言い方はないでしょう？大丈夫、清香ちゃん？」

「は……はい……すいません、原宿で買った靴が合ってなかったみたいで」

「まだ履き慣れてないものね。いいから元の靴に履き直しましょ」

そうして清香が新しい靴から、元の靴に履き変えている間、呼吹が知恵に

「おい、何だよお前は」

「私？私はただのみんなのお姉さん、かな？」

「チツ……わけわかんねえよ……」

「こちらは荒魂討伐に協力してくれた長船女学院の『古波蔵エレン』さんと『益子薫』さんです。それと、薫の守護獣の『ねね』」

「よろしくデース！」

「ども〜」

「ねね〜」

改めて知恵と清香に2人を紹介するミルヤ。

「よろしくね、2人とも（この2人が……）」

「は、始めまして……！」

「では顔合わせも済んだところで——」

そろそろ移動しようとした、その時

『!!』

『!』

「き、木寅さん!また荒魂がつ!」

「なにっ!?!」

先ほど倒した荒魂とは別に、また別の荒魂がこちらに向かって来た。大型はいないが、小型が数体こちらに威嚇するように咆哮をあげる。

「くっ!調査隊、戦闘態勢っ!」

「はい!」

「うっひゃー!また会えて嬉しいよ荒魂ちゃん!」

「今日2度目だぞ……一体どうなってんだ?」

「いいから薫、ワタシたちもヤリマシヨウ!」

「あく、面倒くせく。とつとと終わらせんぞ!」

「ねね!」



義勇&薬研組Side

美炎たちが荒魂との二回目の戦闘を開始する少し前、義勇たち零課が彼女たちから離れた場所にいた。

『ふむ……おそらく舞草は衛藤さん、十条さんの実力をはかる為に、エージェント2人を向かわせたと思う』

薬研はスマホをスピーカーに全員に審神者の声が聞こえるようにし、彼からの情報を聞いていた。

「じゃあなんで調査隊も伊豆に向かってんだよ？あつちは舞草との繋がりなんて『瀬戸内知恵』だけだろ？」

善逸の疑問は当然だ。だが次の審神者の言葉で全員に緊張が走る。

『菊一文字から、親衛隊が伊豆へと動き出したと連絡があった』

「っ!!」

今まで折神紫から、ピツタリ張り付いていた彼女たちが遂に動き出した。紫直属の刀使となると、これまでのように上手くことを運べるか不安になる。

『現在菊一文字が機動隊に紛れて、親衛隊の監視をしている』

「なるほど、つまり調査隊は親衛隊とエージェントが接触しないよう、瀬戸内が調査隊を誘導していると言うことか、主？」

三日月の推理に審神者は「正解だよ」と、返す。

「なら大将、俺たちはどうする？このまま各自の任務続行か？」

『そももいかない。親衛隊の情報が来る少し前に時空の歪みも観測された』

零課にとつての“真の敵”がこの世界に入り込む時に発生する時空の歪み。それはここ最近頻繁に起こるようになったのは、皆知っている。

ただしあくまで小規模。一体や二体程度が折神紫に接触したぐらいだったが、今回は中規模の部隊、数十体がこの世界に入り込んだ』

「なっ!？」

数十体もの時間遡行軍がこの世界に入り込んだ。こんなことは初めてだ。そしてその狙いはおそらく

「衛藤可奈美と十条姫和を守る、セイバーたちか……」

『富田の予想どおりだろう……彼らは最初衛藤さんたちを狙うだろう。だが、おそらく本命はセイバーたち。数が少ないところから我々零課の戦力を潰していくつもりだろう』

「では、主。自分たちが」

『ああ、こうなったら舞草の思惑通り、衛藤さんたちの実力を見て貰おう。薬研と蜻蛉切はエージェントの監視を一時中断、速やかにセイバーたちと合流し時間遡行軍の襲撃に

備えろ。義勇たちは引き続き調査隊の同行を追え。もし親衛隊がとセイバーたちと接触しそうになったら、これを阻止せよ』

「了解!」

「はっ!」

ブツンと、通信が切れ薬研と蜻蛉切は命令通り、直ぐさま先にセイバーたちの元へと向かうことに。

「じゃあな」

「皆さん、お気を付けて」

「2人もな」

「武運長久を祈っている!!」

「がんばれよ!」

薬研たちを見送った後、義勇たちも調査隊の監視に戻ることに。

そこに、義勇のスマホに審神者からメールが届いた。

追加の指令かと思いいメールを開くと

『義勇へ』

先日の新宿の件については不問にする。幼馴染みを想う君の気持ちは尊重したい。

だがあまり我々の存在を明かすようなことは控えるように。呼吸法の技しかり、そこから我々に繋がる可能性があるのだから。もし、君なりの考えがあるのならそれを尊重しよう。だがそうでないのなら、キチンと責任を取ってもらおう。

『審神者』

「……………」

メールを読み終えた義勇は、スウーとスマホから目を離し空を見上げる。

審神者の言うことは分かっている。

日輪刀の鍛造は江戸初期の頃から折神家によって禁じられている。それによりそれを扱う剣士は日に日に数を減らした。

今に残っているのはごく僅か。主に2つに分かれている。

杏寿郎の『炎の呼吸』は、炎定の一族が代々血筋に伝え教えていた。

義勇の『水の呼吸』や善逸と『雷の呼吸』は、それを会得し使い熟した者に血筋関係なく伝えていた。

零課では時間遡行軍と戦う時に、義勇たちは呼吸法の技を敵に見せている。そしてその時間遡行軍は管理局の長の折神紫と繋がりを持っている。

つまり零課に呼吸法の技を使う者がいると知っている。

無闇に管理局や刀使たちに呼吸法の技を見せれば、自分たちの存在を明かしているこ

とに他ならない。

だから審神者から常々注意されていた。

「(分かっている……頭では分かっているが……)」

チャリつと、美炎たちと撮った写真が入ったペンダントに手が伸びる。

どうしても体より先に心が動いてしまうのだ。特に、美炎に何かあった時には……

「お〜い、富田！なにやっつてんだよ！俺たちも早く行こうぜ！」

「……………ああ」

善逸の呼ぶ声で、義勇はスマホをポケットに入れ、彼らの元へと向かった。



調査隊Side

「ハア〜…………ハア〜…………やつと終わった〜！」

「もう無理です〜…………」

「2人とも、お疲れさま」

ようやく最後の一体を倒し、張り詰めてた気を一気に緩めます美炎と清香。そんな2人に労いの言葉をかける知恵。

呼吹の方はまだ戦い足りないのか、残党がないかキョロキョロ見回していた。

ミルヤは念の為に追加のノロ回収班を要請している。

エレンと薫の方は

「疲れた〜……ん、どうしたエレン？」

「ね？」

「おかしいデス。今日一日だけで、2度も密度の高い連戦をしたことはNothing
デス」

「そう言えばそうだな……」

「ねね……」

薫も人使いの荒いお婆さんに現場から現場に回されることなんてよくあったが、何度も偶然に出くわすことなんて経験が無い。

そのエレンと薫の話聞いていた美炎はそうなの？、と驚く。

「こんなにも戦わなくちゃいけないなんて、聞いてません……いろは学長も『赤羽刀を探
すだけだ』って言ってたのに……もうイヤです……」

「アタシは大歓迎だぜ！こんな楽しんでませてくださいるなら、もつともつと出て来て欲しい
ぜ！」

「七之里さん！そんなこと言わないでくださいよっ！」

呼吹の不吉な発言に清香が半泣きになりそうになりながら注意する。ホントにこれ以上出て来たら、今度こそ泣き出しそうになっているからだ。

そして、彼女たちの言葉に美炎はそうなの？と逆に不思議がる。

「(私は年に何回かあったけど……もしかして私だけ？まさか私……荒魂との遭遇回数、普段から多い?)」

1時間後…

要請したノロ回収班と、伊豆行きワゴン車2台が到着し、後処理を頼みワゴン車に乗り伊豆へと向かった。

1台はミルヤと呼吹、清香が。もう1台を美炎と知恵、エレン、薫に分かれ乗っている。

その道中、連戦で疲れたのか、美炎はウトウトしそのまま寝てしまった。その隙に知恵は後部座席のエレンと薫の方に話しかける。

「ちよつと良いかしら、エレンさんと薫さん」

「ハイ、なんですか?」

知恵は改めて美炎が起きていないことと、運転手に聞かれない程度の小声で話す。

「単刀直入に聞いわ。あなたたちは真庭学長の指示で衛藤さんたちの元に向かっているのよね?」

エレンはWow…と驚き、薫は初めて本気の目を見せた。

「それに親衛隊もこの伊豆に向かつて来てもらいたいわ。あなたたちは鉢合わせになるとマズいんじゃないかしら?」

「お前……何を知ってる?」

ギロリと睨みつける薫。しかし知恵は冷静に答える。

「長船の『源流』たる地のこと。真庭学長の指示で、あなたたちのサポートを命じられている。これで良いかしら?」

「なるほど、Understandingアス。お仲間でしたか。ではこちらにも質問にお答えシマス」

エレンも彼女たちが聞こえる程度の声で返した。

エレンと薫も、知恵と同じく『舞草』の指示で伊豆に向かっていること。そこで新たに仲間になる『衛藤可奈美』と『十条姫和』の実力を試すこと。更に以前から協力関係を結ぼうとしていたとある組織のメンバーの実力もついでに見てこい、と。

「そんなわけで、親衛隊と鉢合わせはごめんアス。もしかして、もう伊豆に?」

「衛藤さんと十条さんへの追っ手としてね。でも、もう伊豆に着いているかは分からない

いわ。とにかく、そっちは私たちが引き付けるから、あなたたちは舞草の役目を果たしてちょうだい」

「言われなくても」

「ねね！」

「恩に着るのデスね」

「それともう一つ。そのとある組織のメンバーって……どんな組織で、誰が所属してるか聞いているかしら？」

「Oh……残念デスが私たちも全く知らないデスよ」

「エレンの爺さんと『朱音様』は知ってるみたいだが、オレたちには全く教えてくねえんだよ……」

「そう……」

その後、一行は途中下車し、それぞれ自分たちの目的地へと向かって行った。

「皆さーん、またお会いしましょーウ！」

「じゃーな〜」

「ねね〜！」

エレンと薫たちともそこで別れた。調査隊はそこからは歩きで山中へと向かった。

「そう言えばエレンたち、こんなところに何しに来たんだろ？ちい姉何か聞いてる？」

「ごめんなさい、私も聞きそびれちゃった」

「2人とも、私たちも日が暮れる前にせめて宿にだけでも着きましょう」

そして調査隊一行は歩き出した。

「ハア……ハア……けっこう歩きますね……」

「大丈夫、清香ちゃん？」

「ホントにだらしねえな……」

そう言うが無理もないと思う。だんだんと山道は坂の舗道されていない道へとなっている。慣れていない者には辛かった。

「そうですね、少し休憩に……いえ、それは後にしましょう……」

何かの気配に気付き、御刀へと手を伸ばすミルヤ。

「木寅さん、もしかしてまた……」

知恵がそう聞くと、ミルヤはコクリと頷く。

「一匹や二匹だけじゃない……しかし囲まれている……」

グルリと見渡すと、先ほど戦った荒魂より更に小さい。虫型の荒魂。ミルヤの感じた通り、数は数匹ほど調査隊の周囲を囲むように飛んでいた。

「どういうこと？まだ向こうはこつちに気付いていないだけど……」

「あ、あの……先ほどの荒魂となにか関係があるのでしようか……？」

「それより、民家の近くじゃなくてラッキーだよ。しかもこつちに気付いていないなら、今のうちに——」

倒せばいい、と美炎が言おうと時、呼吹がそれを遮った。

「バカどもが、これは違うんだっての」

「えっ、七之里さん。それどうということ？」

「うっさいな、なんでもないってんだよ」

ぶつきらぼうに言い、御刀を抜く呼吹。しかし、口元はニヤニヤと笑っていた。

「なるほど、コイツら親衛隊の荒魂か……おもしれえ……」

その時ポツンと呟いた呼吹の言葉に、知恵だけは反応した。

「(七之里さん、今……親衛隊の荒魂って言った？つまり親衛隊はもうここに來てる……?)」

それもそうだがその前に、*“親衛隊の荒魂”*と言った。つまり、折神紫直下の刀使が

荒魂を使役していると言うことだ。

一体どういう事かと考えてる時間は無さそうだった。

「とにかく……調査隊、各員抜刀！荒魂が民家に向かう前に殲滅する！」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

可奈美&姫和Side

調査隊がエレンたちと別れた数分後……

可奈美と姫和はずつとベンチでセイバーの言っていた事を考えていた。

「セイバーたちの言ってたこと……本当のこと……だよね」

「そうだろうな……」

『かつて……何十、何百と、この手で斬り捨てたことがある……』

『セイバーほどじゃねえが、俺もだぜ。俺もずいぶん人を斬ってた時期があつた』

「それってやっぱり……セイバーたちは人を……」

可奈美はそこで口をつむぐ。言いたくなかったからだ。2人が人を殺したことがあると。

確かに警察官なら、任務中に被疑者を殺してしまうことは稀にある。テレビでもそんなニュースが流れるのを見たことがある。

だがセイバーたちは1人や2人殺した訳では無い。何十、何百と言っていた。

そして、それには自分たちが想像出来ない程の覚悟を持っていることを。

「覚悟……か……」

「……………」

覚悟なんて、最初っから決まっていた。だがそれをセイバーに否定された。自分の覚悟は覚悟なんかじゃないと。だったら

「私は……どうすれば良かったんだ……!」

ギユウツ……と拳を握り締める。

そこに――

「見つけたデース!」

「っ!?!」

カタコトの日本語で話す長船の刀使が2人に向かって斬り掛かって来た。

可奈美は直ぐにベンチから離れ、御刀を抜き長船の刀使から距離をとる。

姫和の方はベンチから立ち上がると同時に御刀を抜き、彼女の攻撃を受け止め、逆に斬り返す。

しかしそれをヒョイツと身軽そうに交わし、距離をとった。

「ヒュウ〜♪中々ヤリマスね〜。美濃関学院中等部の『衛藤可奈美』と平城学館『十条姫和』デスね？」

「そうだけど……」

「貴様、追っ手の者か……」

「YES！長船女学院高等部1年、『古波蔵エレン』デース！」

そこに、ふあ〜とあくびしながらエレンより小柄でありながら、その2倍以上の御刀を背負う刀使が現れた。

「長船女学院高等部1年……『益子薫』……ねみい……（　　）　oo」

「折神紫に刃を向けた不届き者、覚悟するデース！」

「っ！」

「（あれ、そう言えば、ねねのヤツどこ行った？）」



セイバーSide

「いぎ、勝負デース！」

「くそめんどくさい……」

少し離れた場所で可奈美と姫和が、長船刀使2人組との激突が今にも始まりそうだった。

それを見守る予定だったセイバーと和泉守。だがそんな2人のスマホのレーダーに、反応があった。

刀使4人の元に向かう反応が多数。荒魂でも親衛隊でもない。零課がずっと戦ってきた本来の敵。

「主の言う通りだったな」

「出来るだけ、彼女たちから離れて対処するぞ」

そんな2人の元に、シユタツと薬研と蜻蛉切が合流した。

「遅くなつて悪いな、2人とも」

「いや、ナイスタイミングだったよ薬研」

「状況は？」

「向こうで長船刀使と衛藤、十条が戦ってる。それともうすぐヤツらが来る」

チラリと、薬研と蜻蛉切もその方向を確認する。

現場では、エレンの体術と剣術を合わせた攻撃と、薫のリーチの長く重い攻撃のコンビネーションで、可奈美たちを圧倒していた。

「おいおい、大丈夫なのかあの2人？」

「これくらいで終わるなら、その程度だつてことだよ」

だが、そうではないとセイバーは確信している。可奈美たちはあの2人に遅れをとるようなことは無いと。

「向こうは向こうで任せよう。ところで……………薬研、ソレはなに？」

「ねっ！」

「えっ？」

薬研の頭の上、そこにはいつの間にか小さなリスのようなものが乗っていた。それは薫と一緒に居たはずのねねであった。

「……………え、なにコイツ？」

「……………あ、荒魂……………でしようか……………？」

「い、いつの間……………！」

和泉守、蜻蛉切、薬研とそれぞれ驚いてねねをじつくりと見る。

「もしかして君は、噂に聞く益子家を守る特異な荒魂かい？」

「ねねっ！」

セイバーがそう尋ねると、元気よく答えた。どうやら「そうだよ！」と言っているようだ。

「つか、なんでそんなヤツが薬研の頭に乗っかってんだよ？」

「自分も、全く気付きませんでした……」

「っ！みんな、今はそれどころじゃなくなってきたぜ……！」

この中で一番索敵能力が高い薬研が、目標の気配を感じ取った。そしてそれを聞いたセイバーたちは、それぞれの得物を抜く。

薬研も腰の刀を抜こうとしたが、「おっと」と頭の上のねねを地面に下ろす。

「ここは危ねえから、お前さんはサツサとご主人さまのところに帰れ」

「ねっ！」

「安心しろ、向こうの戦いに水を差す無粋なヤツらをぶっ倒すだけだよ」

さあ、行けと、ねねを薫たちの元に行かそうとするが、ねねはその場を動く気は全く無かった。

それを見て薬研はやれやれ（？）（？▽？；）（？）………と思い、とりあえず近くの茂みの中にねねを隠した。

「……から絶対出るなよ、良いな？」

「ね!」

「薬研、そろそろ……」

「ああ」

ようやく薬研も得物を抜いたところで、セイバーたちの目の前に、人とは思えない異形の者たちがぞろぞろと歩いてきた。

『グルル………』

黒い瘴気のようなものを身に纏わせ、頭に唐傘のようなものを被る、刀を持った者。

『キシャーーツ!!』

骨だけの体を持ち、口に短刀を咥え、上空に浮かぶように飛ぶ蛇のようなもの。

『………』

戦国時代の甲冑と黒い瘴気を纏い、太刀を持つ者。

この異形の怪物たちが、セイバーたち公安零課の本来の敵。本来この世界に居るはずの無い存在。

殺気を高める異形のものたちに対して、セイバーは不可視の剣を構える。それに続くように、和泉守たちも自身の得物を構え、殺気を更に高める。

「悪いが、ここから先は通行止めだぜ」

「可奈美たちの元には行かせない。お前たちの狙いは私たちだろう」

「我ら三人で短刀の残りを。あとは全部和泉守どにお任せしましょう！」

「この裏切りものー!!短刀なんてあと二体ぐらいじゃんっ!!」

『グアアアアー!!』

「のはっ!?!」

ガキンツ!

ちよつとよそ見をしている間に、唐傘をかぶった怪物が和泉守に斬り掛かり、慌ててそれを受け止める。

グググ……

「(ハ)……………(ハ)の……………」

つば釣り合いで押し合いながら、和泉守は体勢を整えて、刀に力を込める。すると、だんだんと和泉守の刀が怪物の刀を押し返して

「なっ……………なぐめぐるくなー!!」

バキンツ!!

『っ!?!』

「オリヤアアー!!」

そのまま相手の刀をへし折った。だがそれだけは終わらない。和泉守の刀は怪物の左肩へと振り下ろされ、そこから斜め下へと怪物の身体を切り裂いた。

『ガアアアー!?!』

断末魔をあげながら、唐傘も蛇同様、ボロボロと灰のように崩れていき、跡形も無く消えていった。

すると他の唐傘たちや、甲冑姿の怪物が敵討ちのために一斉に和泉守に襲い掛かってきた。だが、和泉守は何も動じていなかった。

一斉に斬り掛かる怪物たち。普通なら一人だけでコレを対処するのはキツイ。普通なら

「へっ……てめえら——」

『『グオオオオオオオオオオオオ!!』』

ダッ!

ザシユツ! ザシユツ! グサツ!

「もう少し練度を上げてからかかって来やがれ」

『』』

『ガッ………』

ボロボロ……

和泉守の言葉にほとんどの者たちは答えることは出来なかった。その全てが和泉守の刃によって頸が無くなっているからだ。

そして、そのまま甲冑姿の怪物の首を貫いていた。

頸を無くした怪物たちは悲鳴すら上げられず、ボロボロと身体を崩して消えていった。

最後にこの甲冑から刀を抜くだけ――

グッ……!

「ん?」

グッ……グッ……!

『ガッ……ア……!』

首から刀が抜けない。いや、抜けるはずがない。甲冑が自分の首に刺さっている刀を両手で掴んで離さないからだ。すでに身体は崩壊しかかっている。だが、それでも離そうとしない。

『グルアアー!!』

狙いは和泉守の背後から斬り掛かるもう一体の甲冑姿の怪物だった。自分を囿に、和泉守の隙を作ったのだ。

「へえ、なかなかやるじゃねえか」

しかし、当人は余裕な態度を崩さない。別に刀を抜く必要が無いからだ。

ズバンツ!!

『ガアッ!』

ボロボロ……

背後から迫っていた甲冑姿の怪物は、一瞬のうちに真つ二つになり、灰と化した。

「油断大敵だよ、和泉守?」

「なあゝに、お前が背中を守ってくれるから問題ねえだろう、セイバー?」

そう言つて、背中に立つ親友に笑いかける和泉守。

セイバーの方も、しようがないなあゝと言いながらも、存外悪くない顔をしていた。

「はあく、あの二人は流石だね。俺たちいらなかったんじゃねえかな……なあ、蜻蛉切の旦那?」

ブシュッ! バタリッ! ボロボロ……

また一体、唐傘の怪物が灰と化した。その前には、片手で短刀をクルクルともてあそぶ薬研。

その近くでは、甲冑と唐傘の怪物の胴を一気に槍で貫いている蜻蛉切が。

薬研に言われ、セイバーたちの方を見ると、セイバーと和泉守の周りにはすでに怪物たちによって囲まれていた。だが、二人の表情から笑みは消えていなかった。

『『ガアアー!!』』

「おらっ！」

「はあっ！」

ザシュツッ！ ブシュツッ！ ザクツッ！

ボロボロ……

囲まれ、一斉に斬り掛かれても、その怪物たちを次々と灰へと変えていくセイバーと和泉守。しかも、その動きは派手に見えるようで無駄が見えない。何より、背中合わせなのに、お互いに干渉しないギリギリを狙いながらも、互いのフォローを怠らない。

敵を一切寄せ付けず、勝利を勝ち取る、正に最強。

「ハハハ……確かにあの二人の組み合わせは、零課内でも最強ですから。しかし、油断は禁物ですよ、葉研どの」

「分かってるよ。言ってみただけ、おっと………新手だぜ」

スウ……と構える葉研。蜻蛉切もそれを見て、葉研の視線の先を見る。すると森の奥から、確かに新たな気配を感じ取れる。それも数体。

しかもその中で、先ほど倒した怪物たちより強力な、気配を一つ感じる。

「（こちらが本命か……）セイバーどのっ！和泉守どのっ！」

蜻蛉切の叫びで、二人も新たな敵の気配を感じ取る。

そして、森の奥から姿を現したのは先ほどと同じ唐傘と侍甲冑の怪物。そして――

「ん？……なんだ、アイツは……？」

「和泉守どの……アレは一体……」

「お前らが見たことねえなら、俺たちにもサツパリだよ。なあ、セイバー？」

「あ、ああ……そうだね……（なんだ、一瞬胸がザワついたような……）」

セイバーたちも初見の敵。それは――

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

可奈美Side

タツタツ……

パーキングエリアから離れた森の中、可奈美たちとエレンたちの戦闘は続いていた。

「可奈美、まずは――」

「うんっ！」

姫和が一瞬の視線の交差で可奈美に第一目標を指示する。目標は大太刀を振るう薫に狙いを絞る。

まずは姫和が自慢の機動性で薫の視線を左側へと誘導し――

「(ここだっ!)」

姫和の背後、薫から死角になるところから、可奈美が彼女に刃を振り下ろした。

「させません!」

ガキンツ!

「なっ!?!」

だがその前に、エレンが二人の間に入り込み、可奈美の一撃を受け流す。

「(ならばっ!)」

即座に狙いをエレンに変えた姫和は、直ぐさま彼女に刃を向けるが

「オット!」

それも織り込み済みだったのか、エレンの身体が金色になり、片腕であっさりと防がれてしまう。そして、エレンの口元がニヤツと笑うのが見えた。

「(金剛身っ!?!しまったっ!) 可奈美っ——」

「遅いデース!」

「きえ〜」

ドーンツ!!

シュンツ!と、迅移で可奈美たちの元から離れた。そこに気の抜ける掛け声と共に、薫の一撃が振り下ろされた。

パラパラ……

振り下ろされた一撃によって、地面がクレーターが形成し、頭上に土が舞い散る。

だが、その刃は標的を捉えることは出来なかった。

「あ……危なかつた〜」

「ふう〜……………」

「避けたか……ちつ、今ので終わつとけとよ……」

「ヒュ〜、なかなかヤリますね!」

悪態をつく薫と、素直に可奈美たちを賞賛するエレン。

『金剛身』。刀使の持つ能力の一つで、一時的ではあるが、身体を鋼鉄のように堅くし、防御力を高めることが出来る。

その金剛身と『タイ捨流』、そして体術のトリツキーな組み合わせで戦うエレン。

そして、一撃必殺を得意とする超攻撃的剣術『薬丸自顕流』を使う薫。

普通に考えれば、剣術だけでなく体術までも使うエレン相手には、距離をとって戦うのがベスト。だが、距離を開ければ、巨大な太刀を振るう薫の一撃が襲い掛かる。

ならば、距離を詰めて薫を狙おうとすれば、エレンがフォローに入り、彼女のトリツキーな戦術の餌食になるか、距離を開かされる。そうなれば、また薫の攻撃が待っている。

まさにこの二人は、二人であって二人でない。二人で一人の刀使を思わせる。

「ダメだよ姫和ちゃん！この二人息がピッタリで……！」

「くっ……やつかいな……！」

「へへーん！カオルとワタシはBESTなパートナーデスからね！」

「誰もパートナーになつた覚えはねえ」

「アレツ?!」

一見巫山戯ているように見える二人だが、その実力は本物。この二人とは、御前試合でそれぞれ戦ったことはある。

だがあの時は1対1での勝負。しかもエレンは体術を使っていない。

「(あの時は本気では無かったと言うことか……)」

逃亡中の身としては、このまま戦う必要は無い。隙を見て離脱するべきだが、彼女たちが素直に逃がしてくれるとも限らない。

ならここで仕留めるしかない。

「(だが、このコンピを討ち取るにはどうやって……)」

「姫和ちゃん」

「可奈美？」

「落ち着いて。確かにあの二人の息はピッタリ。隙なんて見えない」

「それは私にだって分かって——」

「じゃあ、なんで御前試合では勝てたの？」

「それは、本気を出していなかったから……」

そこでハッ！気が付いた。それを見た可奈美はニコツと笑う。

「大太刀の子の方は任せて！」

「良いだろう、任せた！」

ヒュンツ！と、迅移で一気に加速し、エレンへと迫る姫和。それを見たエレンは逆に刀を振るってきた瞬間を狙おうとし——

「あまいつ！」

「Whatツ!？」

ドカツ！

「Ouch!？」

刀を振るうと見せかけて、彼女の懐に体当たりで潜り込み、そのまま一気に可奈美と薫から離れた。

「ア〜レ〜……——」

「なるほど……オレとエレンを引き離れたか……確かにそうすればさつきみたいなのコンビネーションは出来ねえ……」

「そう。1対1なら、私たちの勝機は一気に上がる」

「ハッ、舐めんなよ……後輩っ!!」

「えっ、あなた中等部の1年よね?」

「……………」

薫の背丈は可奈美より、明らかに小さい。可奈美は現在中等部2年だから、自然と薫の年齢は可奈美より下に見えてしまう。

「……………ちだ」

「え?なんて?」

「オレは……………」

プルプル…………

「高等部の1年だぁー!!」

「えっ、ウソっ!」

「ぶっ飛ばぁー!!すっ!!」

「あわわわ!」

怒り心頭の薫は、とにかくブンツ!ブンツ!と御刀を振り下ろし、可奈美を狙う。

可奈美の方は、なんとかそれを避けて、隙を狙う。そして

「きええー!!」

今まで以上に振りかぶり、胴が大きく開く。

「(ここだっ!)」

「なんてな」

「えっ?」

「おりゃ」

薫の胴目掛け、仕掛けようとした時、薫は刃を振り下ろさず、ブーメランのように投げつけてきた。どうやら先ほどまでの八割演技(残り二割はマジで怒ってました)。ワザと隙を作らせて、可奈美が攻撃してくる瞬間を待っていたのだ。

流石に予想外の攻撃に、可奈美は慌てて躲そうとして、バランスを崩し掛けた。

「しまった——!」

やられる! そう思ったが——

「……………ヤベ、ねねがいるつもりで投げちまった……」

ポツンと立つ薫。それもそのはず、普段は「ペット」の手助けがあるからこそ、この戦法は使える。だか、当のペットが先ほどから姿を見せない。それなのに、ついついそのクセで投げてしまったのだ。

おかげで御刀は離れた場所で、木に刺さってしまい、御刀を手放したので写シも解けた。しかも

「えっと……さつきはごめんなさい！」

タツタツタツ……

可奈美には堂々と逃げられた。

「はあく……アイツどこ行ったあー!?」

「へえ、ワタシたちを引き離すなんて、考えましたネ？」

「……………」

「でも、コレで勝ったと思わないで下サイよ？先日の試合では負けましたが、今度はどうでシヨウ？」

「無論、また勝たせてもらうぞ」

「(ニヤリ)」

ヒュンツ！

今度はエレンから迅移で一氣に姫和を間合いに入れ、刃を振るう。

「あまいっ！」

だか、それを予測していた姫和は逆にそれを弾き返し、がら空きになったエレンの胸元に突きを出す。

「どつちが!」

ガンツ!と姫和が突き出す前に、今度はエレンが金剛身を使い片腕でその刃を弾き返した。しかも、そこから片足を上げたと思いきや、そのまま姫和の横腹目掛けて蹴りを入れてきた。

「ちっ!」

なんとか迅移で回避し、距離を開けた姫和。あと一步遅かったら、今の蹴りで写シを解かれていただろう。

「(それにしても、やりづらい相手だ……剣術だけならともかく、体術も使える刀使なんて聞いたことがない……)」

「へえ、今の躲しますか……」

「お前、刀使と言うより格闘家だな……」

「アハハツ、でも試合でやると怒られますけどネ」

「(しかしどうする……なんとか1対1に持ち込めたが、長引けばこちらが不利に……)」

「来たか!」

そこに、薫を振り切った可奈美が合流し、これで2対1になった。

「カオルを倒しましたカ……ならば、友の敵討ちデーヌ!」

「いや、ただあの子が自爆したただけなんだけど……」

「問答無用デース！」

そう言つて、また迅移で二人に向かつて斬り掛かる。それに対抗するように可奈美も迅移でエレンの正面から迎え撃つ。

「おバカさん、また金剛身で受け止めて、今度こそ決めマース！」

可奈美が間合いに入る手前、全身を金剛身で強化し、可奈美の攻撃を受け止めようとした瞬間

「(ここだ!)」

ピタッ!

「アリヤツ!」

間合いに入る一歩手前、寸前で急停車をかけて、エレンとの激突を避けた。おかげでタイミングをずらされ、金剛身が解けてしまった。

そこに、姫和は今日一番の迅移で一気にエレンの間合いに入り、彼女の首元に刃を当て、王手をかける。

「お〜いエレン、無事か……って、んなわけないか」

そこによくやく御刀を回収した薫が合流するが、時すでに遅かった。

「今度は長船が刺客か。どうやってここが分かった?」

『ガアアアー!!』

怪物たちは、何も語らず、ただ咆哮をあげながら可奈美たちに斬り掛かってきた。流石にここで敵味方言つてる場合ではないので、仕方なく四人は共闘することに。だが

『グルアアアー!!』

ガキンツ!!

「くっ……コイツら……強い!」

「姫和ちゃんっ!」

『ガアアアー!!』

「っ!このっ!」

ガキンツ!!

「(この化け物みたいなの、我流の剣だけど、相当練度が高いっ!)」

今まで荒魂と戦ってきた刀使にとつては、この怪物たちは異常であった。荒魂は意思は持たないただ襲い掛かる猛獣のようだが、この怪物たちは違う。対人戦に特化した剣士そのものだ。

しかも一体一体が練度が高く、簡単に倒せず、逆に追い込まれる。

そしてエレンと薫たちも

「ちよつとカオル〜！こんな聞いてマセ〜ン！（涙）」

「オレに言つても仕方ねえだろ！」

『ガア!!』

「うるさい……デース!!」

ザシュツ!!

『グオオオー……!!』

ボロボロ……

「ホ、What……ツ!?!」

「消えた……!?!」

エレンがの御刀を振り下ろし、怪物を頭部から真つ二つにした。すると、解けてノ口になるのかと思いきや、ボロボロと身体を崩し、そのまま消えていった。

やはりこの怪物たちは荒魂や人間とも違う、別の存在と言うことがハッキリ理解出来た。

「だったら——!」

加減をする必要は全くないということ。それならと可奈美は一気に攻めにかかった。すると唐傘の怪物も、対抗するかのように咆哮をあげる。

『ガアアア——!!』

「(我流で最初は動きが読みづらかったけど、よく見れば、動きは単調。なら——)」
ヒュンツッ! スカッ!

『ツ!?!』

「(ある程度の動きの予測が出来る!)」

唐傘が刀を振りかぶり斬り掛かろうとした瞬間、迅移で寸前で回避。それにより唐傘の動きが一瞬止まったところを、ズバツと横一線に斬り払った。

胸を切り裂かれ、唐傘は悲鳴をあげながら、やはりボロボロに身体を崩し、跡形もなく消えていった。

「よし……みんなは……っ?」

「はあっ!!」

ザシユツ!

『ガアアア……』

ボロボロ……

どうやら姫和の方もなんとか一体倒せたようだ——

『グルアアア……』

ガキンツ!

「クソツ!?!」

薫の方は、侍甲冑の怪物に押されていた。自顕流得意の一撃を放つタイミングをそう簡単に与えないよう、絶え間なく斬り掛かる侍甲冑。

おかげで薫は防戦一方。そして

『ツ!!』

ガキンツ!

「しまっ——」

ついに御刀を弾き飛ばされ、がら空きになった。

「カオルっ!!」

「(まずいつ!) 姫和ちゃん、助けに行かないと——」

『『グルアアアアアアアア!!』』

「ダメだ、コイツらが邪魔で——っ!」

可奈美が薫の元に向かおうにも、他の怪物たちに行く手を阻まれる。そうしている間に、侍甲冑は無防備の薫に止めの一太刀をくらわそうとしていた。

『ガアアアアアアアア!!』

「(あつ、これ死んだな……)」

目の前に迫る刃。逃げようとしても、身体が言うことを聞かない。だが、何故か不思議と恐怖を感じない。いつも日々だるく感じながら生きていた。

面倒くさい任務、また任務、次も任務……
そして……

『カオル、今日はどこに行きマース?』

『カオルはもうちよつとやる気を出せば、すごい刀使なのに、勿体ないデース』

『カオルは将来、何がしたいデスカ? ワタシ? ワタシは……Berry Goodな男性と熱い恋愛がしたいデース!』

「(なんでこんな時、アイツエレンとの思い出が……)」

そんなの分かってる。

ここで死んだら、彼女はきつと泣くだろう。

そしたら——

「泣き声がうるさくて眠れねえーだろうがぁー!」

『ツ!』

刃が迫る直前、身体を無理矢理動かし、刃を避ける。そして、弾き飛ばされない御刀

「!？」

ブウーンッ!!

『ツ……………グルアツ!？』

刃を振り下ろした瞬間、突風が薫たちの前に吹き荒れた。その中でも侍甲冑は目を閉じながらも刀を振り下ろし、僅かに何かを切った感触を感じた。

だが、目の前には薫の姿は無かった。

「……………な、なんだ……………？」

突然の突風で、薫も目を閉じていた。それをゆっくり開けると、同じくらいの背丈で、学生服のようなものを着た少年に抱き抱えられていた。

「ふう……………危なかった〜！おい、一応助けたがケガは？」

「いや、別に……………」

「そうか……………良かったな、お前のご主人、ケガは無いようだぜ？」

「ねねっ！」

ヒョコツと少年の肩から守護獣ベツトの“ねね”が顔をのぞかせていた。

「ねね!？お前、今までどこに……………てか、お前だれ？」

「ん、俺か？俺は、『薬研藤四郎』。とりあえず味方だ」

「そして俺たちなっ!!」

ビュンツ！と3人のかげが現れ、次々と可奈美たちが苦戦していた怪物たちを一掃した。それは

「大丈夫か、可奈美？」

「セイバー！」

「クソつ、意外と手間取った……！」

「和泉守！……と、お前は誰だ？」

「申し訳ない十条姫和どの。自分の自己紹介は後ほど……」

「へエ、あの3人が……」

そこにセイバーと和泉守、そして可奈美たちは初見だが、蜻蛉切がようやく可奈美たちと合流した。

彼らの姿を見て、可奈美は嬉しそうにセイバーの元に駆け寄ろうとしたが、セイバーはそれを止めた。

「まず、助けが遅くなつてすまない。それとこの怪物たちの相手もさせてしまい、申し訳ない」

「セイバー、もしかしてこの怪物のことを知ってるの？」

「衛藤、話はあとだ。一番厄介なヤツが残ってる」

和泉守がそう言い、刀を森の奥へと向ける。よく見ると、彼らも戦闘していたのか、ホ

コリだらけになっており、特にセイバーの格好はあちこち傷だらけになっていた。

「一体何が？」

「来るっ！」

すると、ガチャ……ガチャ……と足音が聞こえてきた。

それは――

『A――urrrrrrrッ!!』

全身真っ黒な瘴気に身を包んだ、黒い存在であった。